

望みの種子は

二万年後に！！



2

島さち子

ふるさと
切るな！！

望みの種子は二万年後に

2

装
画

島
さ
ち
子

望みの種子は二万年後に 2

20 なぐりあい

真つ黒い雲が空に蓋をし、その下は大雨のあとのように、変にぎらぎらした灰色……水銀色が果てしなくつづいて、以前ここが町であったしるしは、もう、どこにもない。地平線に沿ってわずかに带状のうす赤い空があるだけだ。昔のように空を工場の煙が流れたりしないのか？ 昔のように空の片隅から明るくなったり、空の蓋をとったように真上から明るくなったりはしないのか？ 何故次の空が巡って来ない、ここに明日はないのか、こんな形に固まった一瞬にしか生きる方法がなくなってしまうのか？

「北！ お前は独りぼっちで、他人に何の関心も持たずに生きること、そんなにも慣れてしまった

のか？」

北はおれのそばにいて、柱のように立ったままだ。

「北！ どうした、おれを忘れたのか？ この間、何カ月前になるかな、会ったばかりじゃないか？ 驚きだなあ、銀泥に見えるこれは一体どんな物質なんだ？ 勿論どんな風にも遺伝子に畸型を及ぼすかなんて、そんなことは男だから心配しないよ。以前このあたりにおれを避けて二手に分かれる人波があつた、おまえ以外にもう一人位いたつていいじゃないか。何故バツクするんだ、このあいだのことを気にしているのか？ おれのおふくろに会つてくれた？ 会えなかつたか？ それで、逃げようとしているわけか？ 憎むべき人間も、縁もゆかりもない人間も、おまえひとりなのかい？ 苦勞するね、後ずさりだからな。何か言つてもらおう、おまえ独りしかないのなら、おれのおふくろを隠した責任をおまえがとらなければならないのだ。おまえにはアリバイがないじゃないか。ここは一体地上なのかどうか？ おまえがここを地上だと言つたところで、おれは大地をそれほど信用してはいないよ。誰がおれのおふくろを葬つたと言つたとしても本心から信じるというものではないさ、すぐ掘りはじめたりはしない。なんで黙っているんだ！ おれは無感動に黙っているおまえを、憎んでいる、おまえもおれを憎むがいい。もはや罰が恐ろしくはないじゃないか」

間違つて見当違いの場所に帰つて来たのではないかと考えると、時間がかかるのだ。地上に

立っていたら、おれの頭を目標にして雷が落ちてくるだろう。

「地下にひそむ場所はないだろうか、粉になった太陽のかけらが地下にひそんでいるのではないか。

おまえは、おれに、先輩風を吹かせてくれよ。おまえは地下にいたのか？　ここが町だったしるしに何かあるか？」

何も無い。おれたち二人が地上に立っている姿が、今記録されるだけだ。

「おまえは、おれが分からないの？　声が出ないのか？　黙っていないで話せ！　おまえほどの闘士が、らしくもなく、打ち負かされるのに慣れていると言うように、何故、黙っているんだ。話してくれよ、話せ！」

遂におれの腕が、パンチが北の顎に入る。被害者同士であることを、ふたりが確かめ合うとしても、こうなっては、蒼ざめたなぐりあいしかない。どちらもないなくなるしか解決のしようのない、すさまじい水銀色でかためられた地平線に、握りこぶしがよきによき飛び出すなぐりあい。

「お互いに対する敬意を忘れてはいけないからな、こうでもしなくっちゃ……。何故逃げないのだ、北、コブが何個出来たというんだ、お互いに必死で護ろうよ、自分の命じゃないか。おれは全力をあげたらしい。おまえを殺しかねないんだな、何時か、多分。おまえはおれを殺していいんだよ、この腕が狂いっぱなしになることがあるとしたら、どうなる？　用意しておくんだな。」

……できるなら、今、おれをやっておくんだ、今でなければ……。今やらなければ手遅れになる」

北は髪の中にコブを山のように作って熱をもたせて黙っている。おれも頭に角ほど堅いコブをつくり、そのコブから来る気絶が、額の半分を襲って眼まで及びそうになるのを、必死に払いのけ、払いのけしている。満身の力を振り絞ってみても、もう北を打ち負かすことも、自分を打ち据えることもできない。

「お互いにもう力がないから、これ以上近寄らないことにしよう、肩を齧り合うしか食いものがないところだ。おまえは今まで何処にいたんだ。地下しか居場所はないようだから、地下にいたのに何故、

のこのこ地上に出てきたんだ？」

北が揺れている、口が動く。

「やってくれるよなあ、全く。僕が話せないのは記憶を失ったからだよ。それが、今日、何故か、外に出る欲求につき動かされて、地上に出てきたところで、きみと、鉢合わせしたと言う訳だよ」

「そうなのか、おかしいとは思ったさ。そういうことは、もつと早く言ってくれよ、ぼこぼこにならない前にさ！ 北、静かに考えてみるんだ。ここに笑って震える陽ざしが再び来る可能性があるかどうか？ むかしから、そんなものは、ここになく、おれの中で過去が誇張されて魅惑的に見えているのではないかどうか。教えてくれよ！」

「きみ、この下にあるのはな、正体不明の混沌の世界だ。もとのように、宇宙から国を眺望できる時

代は終わった。何処に足を踏み入れるかで、きみのこれからは、きまるだろう。行くのはよせ！」

北は体を巡らせて周囲を見回した。今でも官憲に監視されているのだろうか？

「それでも、おれは行くよ。おふくろを探さなければならぬんだ。お前は、広が多分おれを追ってくるだろうから、逢ったら、山に引きずっていつてくれないか！ 記憶はもどってくるさ！」

北の現れた出入り口から複雑な階段を降り、踊り場で、エレベーターに乗って下降する。すでに何層もの地下街が形成されているのかもしれない。

終点で降りると数人の若者が通路を歩いて行くのが見える。それぞれが、手に何か握り締めている。何だろう、後ろからその正体を探ってみる。

A市から来た者たちが山に持ち込んだ、「若者は要塞に來たれ！」のチラシだ。とすると、軍隊の求人じゃないか？ まずったかな、軍隊に入る気はない。

とつさに歩みを止めると後ろから來た男に押し返される。体力自慢らしい、若者がぞくぞくと続いて来る。何処に隠れていて命を長らえたのだろう。それが不思議だ。

新築されたばかりの会場には、もう、五十人ほどの若者が集まっていた。互いに牽制し、優位を勝ち取ろうと、髪を撫でつけたり、服の埃を払ったり、靴を磨いたりしている。

幹部らしい十人の試験官が上段の席につき、中央に大臣が着席した。大臣まで出席するとは、よほど、この採用試験は重要な意味をもっているのかもしれない。好奇心から、しばらく、傍観することにして、一番後ろに席を取る。

「お待たせ致しました、熱意ある諸君に多数ご応募いただき、我軍にとつても、わが国にとつても、心強い限りであります。本日は、大臣閣下も出席され、この苦難の時代を共に戦う、若者の気概に直接触れんと、待ち構えておいでであります。それではこれから、大臣閣下も加わっていただき集団面接に移ります。集団面接で合格された諸君は、個人面接、身体検査を経て合格を決定するものであります。それでは、座席で、六十人を横に三班に分けます。リーダーを一人づつ選出して下さい」

中尉の襟証をつけた男がてきばきと、ことを、運んで行く。

おれは、有無を言わず三班に組込まれてしまう。おれはおふくろを探さなければならぬんだ、それに、子供の生まれる前に山に戻らなければならぬ。こんなところで、時間をつぶすわけにはいかないんだよ。よりによって、軍隊などに組入れられたらことだ。抜け出そうと腰を浮かせたとき、誰かがおれの背中を力いっぱい押しだしていた。

「第三班、リーダー決定！」

中尉が叫ぶ。おれが慌てて振り返ると、三班の班員が拍手で応えている。何の気だ！ みんな、に

たにたと笑っている。異分子であることは、ばればれだから、苛めかもしれない。戦前この国では、子供から大人まで苛めまくっていたなあ。こいつらはまだ、苛め地獄を引きずっているんだ。

第一班から、点呼が始まっている。第一班起立！ 点呼、1 2 3 4……2 0。大臣閣下に敬礼！ 着席！ 試験会場で、どうしてこんなことになるんだ？ まるで、ロボットだなあ。第二班も終了した。

おれは黙って立つ。班員も一寸遅れて起立した。おれは号令をかけない。

「何故、黙っている。リーダーは号令をかける！」

中尉の怒声が飛んでくる。驚いた班員が1 2 3 4 5 6……。点呼をはじめ。おれは静かに着席する。みんなも着席する。号令など不用だ。

「号令なしで何ができる！ 戦争も出来なければ、国を護ることもできまい！ 軍隊にとって号令は絶対なのだ。号令こそ集団の意志、国の叡智、号令によって秩序は保たれる。その理解なくしてこの国の軍隊に入ることは出来ない！」

中尉のつばが飛んでくる。照明をうけ、しぶきになって四散する。おれは言ってしまう。

「そうでしょうか、号令のない軍隊こそが、理想なのではありませんか？」

「なんだと！」

中尉のピンタがおれの顔面に入る、体が派手に吹っ飛ぶ。相手が悪い筋金いりだ。部屋中に火花を散らしても、おれは立ち上がる。おふくろが泣くから、負けてはられないのだ。

「なにをするんです！ 暴力は止めて下さい。僕は号令はかけない、掛けるくらいなら死んだ方がましだ！ 僕は号令で死んでいったものの魂にかけても、号令などしない。それが悪かったら弾き出して下さい！」

「この国の組織に刃向かう気か？ たった一人ですか？ 笑わせるんじゃない。ただの点呼でオーバーなことを抜かすな！ 点呼、右向け右、前へ進め、敬礼、休め、たったそれだけのことが言えないのか？」

「たったそれだけだつて！ それですべてじゃないですか？ 本当に号令の必要なときには、この国の政府は、軍は、保身で一杯で、何一つ言葉を発しなかった。そのために人々は死に、国は滅びた。あなたがたは何をしていたんです。そして、これから、何をしようとしているんです？」

まさか、試験場で殺されはしないだろう、おれの信管にふれたのだ。おれは突っ走っていた。もう止めることはできない。

「われわれを混乱させようとしている。敵の回し者では……」

「しばらく、吐き出させろ！ 素性がわかってくるさ！」

試験官が頭を寄せて協議している。

「僕は戦争で生別れになった、おふくろを捜しているんです。祖母は少女の頃、大戦のさなか、クラス委員でしたが、絶対に号令はかけなかったといえます。軍国主義の跋扈していた時代です。おふく

ろは、そう教えてくれました。僕は号令はかけません。どんなことがあっても！」

「ただのマザコンとも思われんが？　面白い、もうすこし話させて見る！」

大臣がいい、幹部集団から、

「叩き出せ！」

の声があがる。着席している志願兵がおれを揶揄し、非難して足を踏み鳴らす。その轟き。

「僕が避難していた山から帰ってみると、僕の町は銀泥に覆われていました。戦争はどうなったんです、勝敗は？　隊員を募集しているのは、今も戦っているんですか？」

僕は大臣に向かって問い掛ける、この機会を無駄にはできない。喉にまで出ていた質問が自己主張する。

「落ちこぼれでも、この国のことが気になっていたとみえるな？　きみは大勢を理解していないのだ。よく聞け！　世の中は大変貌した！　昔と今とは全く違う。故に、今、戦争が何処にあるのか知ることとは非常に困難だ。全貌はとらえられん！」

「……では、何に向かって、戦い、この国を護っているんですか？　若者を集め要塞を築いて、誰から、誰の身を護ろうとしているんですか？」

「きみは、この国が地下に潜ったことを責めているが、この国が標的にならないために地下に拠点を

移したのだ。各国でも同様に考えた。それが間違いだっただろうか。その他に生き残る道があったか？ あつたら聞かせてもらおう。……人間が太陽を嫌い出したのは何時からだったか？ 紫外線が怖くなったのは何時からのことか思い出してみろ。北極の南極の氷が、エベレストの氷河が融けだしたのは何時のことだったか思い出してみろ！ 予兆はあつたのだ。海の水位が突如上昇を始め、大津波になつて打ち寄せ、この国は山間部を残して水没した。そして、陸上にあつたものは急激な引き潮で海に持ち去られ、後に銀泥の大地が残った。地中は地上から避難した諸国で混沌としている。これに整然とした秩序を与えるためにはどうする？ 号令するんだ！ それしか勝利の道はない。きみらも、生き残りたかつたら、号令に従わねばならない。わかつたか！」

「お聴きします。われわれは、空なしに、山なしに、川なしに、海なしに。太陽なしに、月なしに、星なしに。雲なしに、雪なしに、雨なしに、風なしに、どうして生きていけるんです！」

「偉そうに、ほざくな！ 世の中は大きく変貌した、そう言っただろうが！ 世界は、全面戦争にチェンジしたんだ。日々戦争だ。総てが敵なのだ。自然回帰の時代遅れが！ そんな少年趣味の相手はできない。自然こそが、われわれの、人類の大敵だったのだ！ それがわからんのか？ 太陽がほしいなら、作つたらいいだろう。地下にあつても対応は無限だ、不可能はない。われわれは、これから、境界のない敵と、顔のない敵と、頭のない敵と対していくんだ。こんな時は、号令をかけて、より強

固な大きな顔を作り上げなければならぬ。その気概なくしてこの苦難は突破できないのだ。それでは、賛同してくれる諸君だけ残ってもらおう。反対の者は出て行くがいい、それを妨げたりはしない」

大臣は顎を上げおれを、あざけるように見下して高笑いする。

「それは違う！ そんな隠遁生活が人類の幸福なのか？ 理想なのか？ それは誤っている。自然を認めずに、歴史に学ばずに、顔をみずに、頭もつかわずに、心を無視して、なにをしようというんだ？ それは破滅だ！」

おれは、おふくろとして、死者の代表として主張しつづける。つまみ出されて本望、おれは立ち上がる、数人が後をおって立ちあがった。

「人間も物も不足しているんだ、物を確保する生産活動をなおざりにするな！ それがこの国の至人命令だ！ 落第した、くずどもは、生産活動に移行させよ！」

大臣の号令が地下を震わせて響き渡る。

「わたしは首巻にされてしまったんです。だから、軽くなくては、すぐに捨てられてしまいます。もう何日も水を飲んでおりません。それでも水っぽいと苦情をいわれます、汗をかくご婦人なので、それだけで、結構何とか生きています、と言うことかもしれません」

四方八方を伺い美しい首巻が、毛並みに映る照明効果を按配しながら、内気にか細い声を震わせる。「で、首巻だったなら、生きていますふりはしないで、死んだふりをしていれば、それでかまわないのではありませんか？」

取り巻いていた新人の男は投げ出すように言うと、先輩のグループを見回して笑いをかみしめる。

「ええ、だけど、生きている身、少しでもほどこけようものなら、ご婦人は、わたしが意地悪をして、そうやっただけに違いないというんです！」

「意地悪で、汗っかきの首巻だなんて！ 頰に、重い足が棒みたいで……」

そこで、説明をうけている彼等は笑い始める。

「それに……、うんこなんかする首巻なんて！ おしっこなんかする首巻なんて！ なんでそんなものを、まだ捨てずにつかっているのでしょうか。それに……」
またそこで彼等は大笑いする。

「首巻がズボンをはいているじゃありませんか？ 首巻が、首巻をしている、なんてこともあるのでしようね。と、いうことになる、首巻のしている首巻の方がずっと上等で軽くて素敵ではありませんか！ おちびさん！ それは、タヌキかミンクなのでしょう？」

「こんなもの、こんなもの！ ただの畜生じゃありませんか？ 僕なんかと、到底くらぶべくもありませんよ！」

首巻の男が首巻を叩きながら言う。

「タンスになっっている人間など、ないのでしょね。人間がタンスになんか、なれるわけがありませんもん？」

このすつとんきような国家事業に乗って、おれは言ってみる。

「いいえ、なっております！」

「立派なタンスはあるじゃありませんか？」

「過去の遺産です、しかし遺産などなんになるでしょう。生きるということは体当たりだと、王様はおっしゃいました……」

「王様の命令で、国民は物になるのですか？ それが生産活動だと……？」

「世の中は物質至上主義、物なくして何ができますか？ 物こそ近代社会を支えている根幹ですよ。いいえ、王様がそうおっしゃいます」

「それは考えようによつては、楽しそうだなあ。なら、茶碗などでなく、橋なんかになることも、できらるんですか？ サルは橋になると聴きましたか？」

「ここでは人間が直接なので……」

「サル並みの智慧しかないのですね！」

おれは嘲笑する。彼らも手を叩いて踊りあがる。

「なら、人間がなっている橋を誰が渡るんです？」

「人間がなっている車が渡ります」

「車にのっているのは何なんです？ それは人間でしょう？」

「いいえ、人間であるかもしれませんが、シートだったり、ブレーキだったりしているに違いありません。今度は人間の塊が通りました！」

「川も人間なんですか？」

「ええ、人間が水がわりになっております。だけど、この国にはきちんとした夜があります。夜には人間は物であることを止めます。人間は人間であり、過去の遺産のなかに埋もれて眠ります。

はい、人間である茶碗じゃなく……」

茶碗である女は自信に満ち、茶碗のなかで、幸福そうに飛び跳ねる。

多くの思考が催眠状態のまま、妙に幼い。おれは笑いたいのをこらえて、眼をつりあげる。

「となると、王様が問題だ？ 王様はどうしておられるんです。どんな、物になって、おいでですか？」

興味深々だなあ！」

「王様ですか？　王様は人間を着て歩いていいんです。美しい若い男女が王様を囲い、王様の下は人間の塊です。車椅子である人間は、ときどき、くるりくるり回転しながら、王様を運んでおりました」

「ずるいなあ、王様は。それでは、王様の思う壺だ！　大変なあ！　食べ物になっっている人間はいないのか？　王様は贅沢三昧、つぎつぎ、好物になった人間が、王様に食べられて消えてしまっているじゃありませんか？」

ふらふらの一団が、ガサガサ音を立てながらくる。
彼等は固まってしまい、もう、声もださない。

「ゴミ処理場だということです。人間炉のやることは、これで焼くことは致しません。大型機械だったそれらは、塊のまま解体され、つまり、家庭へと解き放たれます。かさかさの人たちは、それぞれが枯葉が飛んでいくように、我家の方に飛んで帰って行きました」

おれは石になり、自然が病を癒す間、千年眠らなければならぬと言う人のところに帰ってみる。
自然の時間体系のなかで、それは瞬く間の時間だ。

何年経ったのだろう、今、つぶてより早く飛んできた石が、おれの額の中央で、正面衝突し、おれは気絶してしまう。

おれは目覚め、この奇妙な国にさよならする。物であつた疲れが四方八方から押し寄せ、積み重な
り、おれの歩みを阻んでいる。

「王様のお成り！」

ただ一人、人間姿の王様は、赤いスポーツカーから喜々として身を乗り出し、おれを標的に軽機関
銃を乱射させる。

「命中！」

王様の声が有頂天だ。

22

ふるさとを切らないでくれ！！

何人かの唇が吸盤でも引き剥がすような音を響かせている食堂のなかで、むさぼりくっっている食

物が急に唾液になじまない苦いものになる。おれの知っている食べ物も舌の上にのせると、舌がおいしさの山盛りでたわむほどに、素材そのものの味と味付けが溢れ、喉ピコまでおおわらわになったものだった。スプーンですくい上げてみると食べ物もみんな紫色のスタンプが押し込められている。スタンプの文字はおれになじみのない外国語の記号。口に入れたものは後戻りできないところまで入り込んで動いていき、小さい動物を丸呑みにしたように、おれの意志にもとづかないうごめきをしている。まさか、人間が？

いまかかざらわっているのと違う過去が、舌に生き返っているのだ。きつぱり切り捨てていたかのように、省みずにいた過去の味を懐かしんで舌は歯や歯茎で苦味をこそげ落とすのだ。間を置いて、また口の中に入り込み苦く後戻りできないところまで呑まれてしまう食物がある。

テーブルの上に、スタンプで一杯の大きなザボンがあつて、包丁を振りかざす大男がいる。刃は光を増し雪山のエッジのようだ。

「おれは組板の上にいるわけじゃないが、気をつけろよ！」

おれは怒鳴る。

「おまえのようなケチなものを切る気はないね。これを地球だと見立てて切る、おれの領土は広い方がいいからな！」

「待ってくれ、切り方を考えてくれ、おれのふるさとを切らないでくれ！」

大男は卑しげな顔付きなのだが、一瞬、上品に見える。おれの近くに刃を突きつけるときが上品で、果物の表面に見当をつけて首を傾げるときが下品な顔付きなのだ。大男は口笛を吹く。

「ふるさととは、おれが十年前、何年前、何日前かにいた場所だろう。今、そのことを思い出しているんだよ。ふるさとなどという言葉を思い出すなんて、いけないことだとは知っているんだ」

恨みをかわない目的だろうが、この国の新支配者たちは、われわれ収容所にいる者に対して、想い出を犯罪に近いものとして排撃する教育をしている。毎日毎日思いがけないことが起こり、思いがけない境遇に陥った後、経験など何の役にも立たず、思い出す気がないという形での記憶喪失をして、つぎつぎ年月を重ねる術が身についたのかもしれない。頭の構造などそう複雑ではないと前から信じてはいたが、これほどまでに単線構造だとは……。いま、急にふるさとが、あったことに、おれは気づき、ふるさとがあるとすることが身に応え、過去の引力だけが強力になり、その間にあった年月が急によそよそしくなっている。

ここに、おれの過去を知っているものは、ひとりもなく、自分自身の過去を思い出そうと、するものさえない。これが愚かさを育てるために、懸命に徹底的に教育された、あげくの果てだ。

もはやおふくろは亡くなったに違いない。最後はキビガラのように軽かったらうと思う。おれが遺

体を抱え上げたら、あまり軽くて、抱えるおれの身体が浮くかと思うほどだったに違いない。抱くおれの腕がぐるぐるつと二重巻きになるほどの細い体だったろう。おれには、おふくろの消息を探る必要があるのだ。そのために、ひとり戻ったはずだった。これだけは彼らだって消すことはできない。

おふくろの何時も身に付けていたエプロンの結び目は恐ろしく堅かった。決して解けない固い結び目は、口を閉じた死貝のように、きつと焼かれても焼かれても、決して燃え尽きはしなかったろう。炎に舐められても、切り捨てられても、どうにもならない塊は、おふくろが作った結び目だけれども、教職にあった、おふくろを、育児のために家庭に縛り付けた仇だったのかもしれない。一体その塊はどこに捨てられてしまっただろう。キビガラみたいに簡単に燃え尽きてしまう身体にくらべて、結び目は少しは燻っていても、彼女のヘソだったみたいに恨みがましく、何時までも燃えきろうとはしなかったはずだ。

おれが私生児として目覚め、まだ願望をもっている為に生きているのだとしたら、願望に歴史がなければならぬのだが……、恨みがましく燃え切ろうとは、しなかったに違いない、塊を見つけたことがおれの願望だとも言うように……、

「思い出すことは発明とは違うから誰にだって出来るんだよ。発明ではないが驚嘆させられるもの、興味つきないものなんだ。思い出すことは実に沢山あるんだぜ！」

おれは叫びたい思いを、押さえる努力で震えてしまう。食べ終わったら急いで精神調整センターに、行けとの命令だ、まだおれに利用価値があると心得ているらしい。

監督のひとりは高く上げて組んだ足の膝を鷲掴みにし、もうひとりは電子カルテを両腕に抱え込み、早い速度でなにやら打ち込んでいるが、おれには、その音がいらだたしさを秘めているとわかる。

「きみはすっかり忘れているだろうな。きみの疲労は、何時何をした疲労かどうか、原因を知っている疲労ほど気持の悪いものはない、それが犯罪なんだ、わかってるな」

「いや……、こちらは、きみを犯罪者にして、底なしの過去に落ち込ませようなどという悪意はない、絶対にない。しかし、どう思うかな？ きみたちがこの収容所で何年生き、何をしてきたか、機密に属することだが、きみが冷凍にされていなかったという証拠は何処にもないと言ったら……」

「からかいじゃないんでしょう？ 脅しに輪をかけてはいけませんよ」

「そう、脅しに過ぎず、出口ありだよ、出口あり、きみを犯罪者に仕立てても、ぼくらに得はない。過去にきみは二年ずつ五種のきみを生きた、AF、MG、TQ、ZO、SD 全くかかわりのない五人として、二年ずつできみは名も感情も変えて自分を保護してきたのだ。僕たちも、きみの過去につながる一切の感情から、きみを保護するために、万全の措置を講じてきている。そうだよ、ぼくら以外の何者とも、きみは無縁ですむ。時間でさえ、きみはぼくらの与える時間以外とは無縁だ」

「そうだよ、思い出なんぞと寝言を口走って恥をかくような真似だけはするなよ。わかっているね、何よりも働くことだ。命令に従って……」

「今話し合っていたところだ、きみの名は、Wがいいか、PYがいいか？　しかしきみにとっては何でもよかるう、呼ぶのはこっちだからな」

「さあ……」

おれが東克という名を主張するかどうか観察しているようだ。想い出を捕まえたことが、おれの外観に多少とも出ているのだろう……。

おれは水底の沈殿物のように深く落ち込んでいながら、今位置を上を上げている喉仏を下に落とすことさえ出来かねている。

長い間、おれの上着とズボンの間には隙間があり、冷気のベルトが太くなり、細くなりしている。熱いものにありついたりしても、シュツと音をたてるだけで、少しも温みをもとうとしない冷たい隙間、おれはそれをチェの輪のように、はずそうと夢中になる。世界中が冷たいのなら、冷たさに逆らう無理をせず、冷たい輪をぐんぐん太くして、士気高揚のために伸びあがり、天に向かってつばをする。おれの睡で人形倒しのように彼らが傾いている。

「寒くもないのにきみは寒さで震えあがるゼスチュアをし、尊大に伸び上がり、上を見てつばをした。

わたしが今ハンカチを探しているのは、それを拭くためだということが分かってるな。なにを思い出した、思い出しもしないでそんな様子をみせる筈がないじゃないか、さあ、言いなさい、見れば見るほど年寄りカーテンみたいにも見えるが、血色はいいな、きみを褒めてあげているんだ、現在や未来が嫌いなのか？」

監督の男は不器用そうな重苦しい指で顔を拭っている。

「現在や未来は好きでも嫌いでもありません！ 昔から寝ていても必ずしも下が安心できるものではなかった。僕の載っているジュウタンは、あつという間に引つpegがされて、上から僕を叩き、踏みつけにしたものだった、そんなものの上にも、やつぱり地上にいたことになるんですからね、地上にある限り総てを、そう信用してはいませんでしたよ」

「昔からといったな？ 僕の載っているジュウタンと言ったな、何時のことだ、その言葉の一切れあれば、ほころびを捕まえ、何を思い出したかを推定することができる。もう少し何か言ってみなさい、

この男に凍傷のあとがありましたか？」

電子カルテを開き、頭を突き合わせて、おれの病歴を探しているようだ。

「ぼくは少し思い出したかもしれないが、そう、はっきりしたものではありません。僕の脳天と足に冷気が笠や足台になってあり、その邪魔物を通して、なにか、しびれるような手ごたえを感じていました」

「通り一遍の答え方だな。なんのこともか説明になっちゃいな」

「僕の細胞が、あちこちでぷつんぷつんと潰れて、そのはじけ飛ぶ細胞液に僕の皮膚がくしゃみをし
ました」

「隠している。たしかに。なんにも言わないと同じじゃないか、以前弁護士であったかのような詭弁だ」

腹立たしくなって握り締めているおれの手繋がる背からプクプク泡が飛び出していく奇妙な感覚
がくる、ドロのなかからアブクの吹き出す、あの感触。こんな場違いな時点で、身体の脂が吹き出し
て爆発するだろうか。おれは反動で前に倒れる、何時かそうするように訓練されていたようだ。誰か
が一発くらわしたのかもしれないし、後ろで何かが爆発したのかもしれない。

「きみは倒れたが、それは過去の衝撃によるのではない、今加えられた力による衝撃だとわかってい
るだろうな。すぐに湯気が上がってくるだろう、きみの寒さは風邪なのだ判断して、治療を加えた
のだ。様子を見る、軽いものなら、湯気は発散する熱と一緒にきみから思い出も一掃してくれるだろ
う」

もうひとりの監督も言葉をつづける。

「大事をとらなくてはいけないよ、出来そこないで終わった過去……、過去なんぞ何時だって出来そ
こないだ……。その思い出という尻尾をつけると、尻尾を追いかけるぐるぐる回りをする、それっき

りどうにも止まらなくなるのさ。進むことを忘れる、それでは、もう、生きている甲斐がないし、何の役にもたたない、処刑されるか、自殺するか、死者に恋をしようあれだよ。過去は未来の役割を引き受けてはくれない！」

ふたりの男はおれが鳥肌立ってくるまで見据える。

「こいつは、質問しませんな、未来が過去の役割を引き受けてくれるか、などと……」

「ハハハ……、大丈夫、尻尾を追い駆ける状態にはまだ陥っていない。笑い給え、笑っているうちに正常に戻る」

「この程度の薬のたった一グラムで、「だった」も「だろう」も「である」になる。こいつは軽い症状なんですね」

「言ってみろ、きみの言いたいことを言ってみなさい！」

胸のなかに思い出の地図が出来、その上に人物や物を配置し、動かし、破壊を再現させはじめる。思春期を過ぎた本物の大人は、おふくろのことを口に出しても恥ずかしくはない。おれはおふくろの古希のお祝いをしたとかなんとか……。おれの量を大きくしてくる想い出に緊めつけられる咽喉から、出し抜けに蝙蝠のように言葉が飛び出していく。そらで覚えさせられたことがあったかのように。

「過去の思い出に浸ろうという欲求は、星座に分け入って並ぼうという精神病的欲求と同じです。根

も茎も切った現在という切花だけを凝視しなければ、美にも幸福にも遭遇することは出来ません」

確かな口調で唱えるように、しかも監督に対して。真似したこともなかったはずの調教人的アクセントを交えて、それ一種類の調子しか知らないかのように。

「それでいい、呆然としていることが平穩なことなんだよ、過去のはかない関係を数えたりはしない、はかない関係の上には、何も築けないんだ。もう分かっただろうし、薬も効いてきたに違いない」

調教の言葉に身をまかすのに馴れているから、身をまかす振りをしながら、おれはふるさとを考える。あそこを離れる頃、まだ体のあとや、苦しそうな引っかき傷がいたるところにあった。

車のなか、立ち木の幹、競馬場の馬の鞍にまで、最後の息を引き取る肺のように苦しそうな臭気を吐き出す掃除機にも、手垢や足のあとは何時だっけとすっかりと遺産であるしるしを残して、駆け出したりはしなかったのだ。その後戻ったとき、何一つ見ずに衝撃を受けたにしても、まだ発掘すれば思い出だらけ、跡形なく消え去らずに残っているものがあるに違いない。おふくろを探し出すために、人がいたら、北々刊行社の娘の消息を知っているか？ 向かいの顔の大きな銀行員とその一家をしっているか？ 決して雇い主をおれに明かさなかったブルドーザーの男の消息を知っているか？ キイを何本もぶら下げていた女を知らないか？ このうちの一人でも知っているなら、母を知っている人物を知っていることになる。これらの人物の最後がどうだったかを聞いてみれば、望みのものを探し出すことが出来そうだ。

おれはまだ伏せてある思い出の地図を、サンと広と一緒に移動した方向に向かって拡げていく、順次に。何処からかヒューヒュー口笛の吹き損じみたいな音が洩れる。

「効いているな？ 忘れたのか？」横目をつかつて見るふたりの監督は、おれを測っている目つきだ。

「きみの刑期は満了した。体調を整えた後、帰ることだよ、帰るところがわかっているかな、中毒すると何一つ分からなくなってしまうんだが……」

彼らは言いながら、出て行き、おれは思い出を倍から倍に殖やす作業に専念する。

おれは、今と言う幻影をひよいと追い払い、すぐに到来する思い出の山を胸に膨らませて勝ち誇れるのだ。

しかし、思い出はもっと、心臓に一発ぶち込まれるような、急激な圧死でなければならぬのかもしれない

「あなたたちは可哀そうね。人間でも人間と言う病からたやすく治癒することが出来るものなのに！」

「治癒するって、人間という病気から、どうなることですか？」

「あなたが、どうして、そんなに深刻な顔をしているのか、わからない。つまり、ある種の女と結婚すれば治癒すると言うじゃありませんか！」

思い出など預かり知らぬくせに気味の悪い大笑いをする女係官だ。

「おれは何も知らないね、表現は分からないが、男に仕掛け何てものは、何もないんだから……」

怪しい者とそうでない者との区別がつかないから、おれは思い出すことを中止して、女の顔を見据える。小鼻のないコブのある鼻、おれと同人種とは思えない、これが戦勝者の顔か？

「同じ場所にじっとしていると、足が熱い鉄棒になってしまふ、口を閉じると唾液が熱湯になる。ですから、立ち上がって歩かなくっちゃいけない、話さなくっちゃいけない！ わかりますか？」

おれは行ったり来たりしてみるが、空気の玉が下にあつて足はめったに床につかず、歩数をますのに比例して、足は太さと重さ形の奇怪さを増し、足に疲れが来るが、足の底ではなく上の方に乗っかっている大腿のあたりに疲れがあつて重い。

「あなたの相棒が来ますよ、あなたは口の中を熱湯にしないですむでしょう」

おれは、おれの口の中が熱湯になるかどうか試みて何も言わない。その論法でいけば、見開いているために氷が張らなければならない、おれの目は、女のユニホームに何日間もそれを着たまま倒れていたような大規模に入り乱れた皺をみる。

ユニホームには皺だけでなく、皺を押し分けて、二つの乳房が丸みを豊かに突き出しもする。おれがそれに匹敵するような何ものかを持ったことがあったか？ この女は何と立派なんだ！

男が入ってくる、慣れない握手は、抱き合う見たいに面映ゆい。どことなく親しさを感じさせない鋭い顔付き。それでも、おれは嬉しがつてみせ、その肩を叩いている。

「おれと通じる話が出るのは、相棒だという、あなたしかいない。ぐずぐずしないで故郷の言葉で話して下さい。眉を吊り上げないで落ち着きを取り戻して下さい」

男は話そうと努力して震える、急に話してはいけないのかもしれないな。

「こわいなら、故郷などというものが怖いなら、かまいませんよ、どんな言葉でも」

彼は沈黙したまま穏やかになり、フケというよりカサブタのような白いものを髪の毛の先にぶらさげ、堅固な嗶れ声をあげる。

「おれは思い出したんだ！ 何のために思い出したのかわからんが……、明日があるからおれは思い

出したんだろうか？ 明日がなくなったら思い出したんだろうか？ 明日は何にも関係しないんだらうか？」

「明日は彼らの持ち物で、おれたちの知ったことじゃない、棚ボタのように明日がくるのであって、関係しないでくる幸運と考えましようよ」

これはおれに治癒効果が出ているということだろうか？

使い古された銀色のテーブルの上に光が落ちていて、日光であるかのようにジリジリ時を刻んでいる気がかりがある。縞模様のズボン、焼け残った家具、おふくろとお揃いのモーニングカップ、雨漏りを受け止めているバケツに揺らぐ水が、あのバラックにはあつたな。おれは息がつけない。しぶしぶ話すという感じの男の声がくる。

「意味ありげな表情をして死にたいものだと思つたなあ、変に分かりきつた傷跡など残したくないとおもつたなあ。それなのに、この傷跡が残つたよ、眺めてくれるなら、今、見せてあげようか？ おれは物惜しみしない。欲がないから生きているんだらうか、欲があるから生きているんだらうか。欲とは関係なくこうやっているんだらうか？ 倫理的に考えようとすると渦巻きになる。おれは考えすぎてカタツムリになるのだからか。そんなことを、おまえは考えないのか？ 考えもしないで思い出すというわけかい？ 大きな息をしないこと、目をしばたくのをやめること、口は傷があるためにむ

くれあがったら、むくれ上がったままにしておくことだ。どんな戦闘があったか……お前は味方の陣に何個の爆弾をぶち込んで何人殺したか、クラスター爆弾で何人殺傷したか、その時、心は痛まなかったか？ 敵兵と一緒にになって「サインして祝ったことはなかったか？ など思い出すことはないのか？ 戦闘でなく生体実験……何人に対して行われて何人死んでしまったか？ どんな兵器を作らされたか？ 戦場で自分がどんな役割をしたか、おまえ、全部を思い出せるのか？」

この男は何年前のことを言っているのだろう、おれは男に顔を向けずに聞いている。おれの頭の周りを小さい球体が公転しているようで、ぼんやりし、その厚いぼんやりのなか、ぴんぴん、思い出が冴えた脳さばきでしゃしゃり出るが、故郷に関するものばかりでそれ以外の部分は昨日の注射薬が効き目を現して消したのか、それとも始めからその部分に関しては苦痛であるために思い出すのが嫌だとかたかたか思い出す能力を復活させなかったのか、浮かんでこない。一カ月についてさえ、何千何万もの思い出が掘ればありそうなのに、今故郷から離れた、おれの過去は深みで地鳴りさえしない。何一つ強力なものとしては経験していなかったのだろう、思い出しても気持をつかみはしないのだ。過去が、あからさまに現在に露出することは画期的なこと、それ相応に恐ろしいものが生まれてくることなのだ。相棒だというこの男はおれの過去を記憶しているのか？ もしかしたら、それを裁こう、何種かの線がなぐらふのぶらさがっているベッドに腰を降ろして、灰色の壁をみていると、

たしかに女が言ったように足の底から熱が湧いてきて、足首まで熱湯にひたつたようになる。がくんと肘で腕を二つ折りにし、自分の手のひらのなかに頭を置くと、何時もの何倍も重い、赤と紫のカーテンがはたはたする。おれの腹は薄皮だけになっていて、手を腹の上に置いて眠ったら、夢や思い出のありようによつては、自分の腹のなかをかき回してしまわないとも限らない。

「おれたちは長い間、ここに住みついてはいるようですね、ここでは日が沈んだり昇ったりはしないから、おれたちに与えられている一日は、どう待っても終わらないようですね」

「そうだな、何の役にもたたないにしても、どうして、おれたちは自分の暦を作らなかつたのだろうか？ 彼等の思いのままに生きるのに、なんの疑いも持たなかつたことになる……」

男は考え込んでいたが、ごそごそテレビにセットする。

「これを見てご覧！ これに見覚えはないか？」

映像が写っている、戦場なのか温度が高いため映像が流れ出している。彼がいる、何人かの部隊を引き連れているようだが、号令をかけている男に見覚えがあるような気もする。

「あなたは、わかりますよ。あと、見覚えのあるような男が号令をかけていますけど、頑張つて、すげえ声を張り上げて、こいつ、馬っ鹿じゃないかな！」

おれの眼球が歪み、早々に映像を闇に送りこむと、映像は眼の裏側から眼球の中心に向かって、悪意を差し込んでくる。

「そう、自分をまともに見るなんてことは、まずないからな。おまえ、可笑しな奴だなあ！」

「なんだって！ そんなことはないよ、そんなことはありえないんだ。おれは、無意識だとしても、強制されたとしても、号令なんてしない！ そういった、U N Aを引き継いでは、いないんだから……」

「いい格好しいはやめろよ。人間なんだぜ、人殺しなんだよ、お互いにな。相棒なんだぜ！」

おれはおれが号令を掛けているのを、眼をむいて見る、その声をこの耳の底で聞く。号令に従うのを身を細めて見る、味方に向かって射撃するのを頭を蔽って見る。

「嘘だ！ おれはどんな時でも、他人に支配されない。戦争を拒絶するように育てられてきたんだ。

これでは、母さんに合わせる顔がないなあ……。一体何処で戦争をしているんです。地中で

戦うと言うことは、どういうことか分かっているんですか？ 戦争によって、空気の採り入れや排気がうまくいかなくなれば、共倒れじゃないか？ 地上の公害なんでものじゃすまない。境界の判然と

しないところで爆弾など使えるはずがないだろう。やがて地球の重心が狂ってくる、気圧も狂い、小人が巨人になってのさばってしまう！」

早くおふくろを連れて地上に飛び出さなければならぬ。誰にも支配されないとともに、そこにはサンがいるんだ、それだけは理解できる。

「希望は腐っていますよ。食べ物が与えられたら、おれは咀嚼の回数で唇をつくる方法を考えましょ

うか！ 今まで彼等の時間が来るのが待ち通しかったことなど一度もなかったのに……。おれの決めた時間が、おれの予測しない幸運を運んでくることがあり得るでしょうか？ 誰がおれの決めた時間のなかを漕いでくるんです？」

「まあ、あせるなよ。おまえの長く伸び放題の毛が、そよそよして、草原に寝ている気分になるなあ。おれの吐息がそっちへ吹いていったら、目をつむってご覧よ……」

男のんびりという。思い出すほかに何かすべきことが、あつたんじやないだろうか？ 食事を全くしていないようだが……。

やつとの思いで別の日が来ている。腰に大きな鍵の束を吊るした黒服の男が来る。おれたち二人は組み合わせているのに慣れきっているという形に腕を組んだまま、僧のほら貝のような、それも思い通り鳴らず苦悶すると言うような声をきく。

「これを……」

辛うじてわかる声で、鍵束を光らせ花の香りのただよう封筒を差し出している。

おれはどきんとし、差出人はサンであり、過去がいまに連なってきたと理解する。紙とペンがあることは自由が来ていること。彼女の伝言を読み、彼女に向かって返事を書くのだ。おれは暫く両

手に宛名もない封筒をはさみ、顔をその上に載せ、始めだけで、すぐに微々たるものになってしまう弱い香りを嗅いでいる。

ひよっとしたら過去は公認されて、現在か未来と置き換えられるのではないか、という希望的観測をする。

読まないのだろうか、おれは男を窺う、男は疑い深そうな表情をしておれを見ている。

「女というものは……実際、女というもののほど、男がする思い出話を嫌う動物はない、密告者はその女かもしれないよ」

「サンは昔、喉に障害があつたから、書くのが好きなんです。他意はなく、おれに向かつて、書いたのだと思います。あなたは、あなた宛の手紙を読んだらどうです。おれもおれ宛の手紙を読みますから……」

——思い出は、あなたの息子と瓜二つではありません。あなたのママとも、おそらく瓜二つじゃないでしょう。何処にも瓜二つのものなど、あつたためしのない思い出は、あなたを独りぼっちにするでしょう。

そんなものに縋りついては、懺悔の終わりもないでしょう。

女らしい気のいい作為？ 何をいいたいのか分からない。見本のメモを与えられて、まる写しにしたのか？ 彼等が偽造したのか？ 彼女はこんな文字を書きはしなかった？ いや、こんな文字を書いたかもしれない。おれはそれでもサンのいない過去の年月に気づいて、その年月の間に別の時があったことを怖れ、この文字に慌てているのだ。たとえ、あつたとしても、そんな時間を認知する気はないが、法律上の結婚をしたりしていたら！

「あなたは知っていませんか？ おれがどんな女と接触があつたかどうか？」

おれに知らない傷が残っているにしても、なかつたといつていい、統制された大きな踏み外しのない彼らの与えた時間内のことなのだ。おれはごそごそしたり、びくびくしたり、口籠もつたりして、何に甘えているのだろう。手紙の返事は紙にペンで書けばよい。頭皮のうえに書くことはいらぬのだ。といつて、手は何を返事すればよいのか分からないらしい。

右手は左手で書くように、ぎいぎい音をたてんばかりに、ぎこちなく、拝復、拝復、拝復、と書きつづけている。

「——種子さえあれば、例え二万年の眠りについていても、芽を吹き、伸び、花を咲かせる。

どんな異変の年月を忍んでも、残っている望み。のぞみの種子は、二万年後にまかせるべきではあるまいか！——そう書いて下さい」

おれの手は男の言う通りに書いている。

「おまえは、自分をわかまえてるね」

これが彼女に対する返事と言えるものかどうか？ 不快なことに、この男が思えば、おれも思うようになって、この男がまるで彼らであるかのように、おれを支配しはじめ。種子から芽生え、苗は間引きされる、生き残ったものは丈夫で、消えた者の命を万も集めたほどに、強力な生命力の持ち主なのだ。

「あなたはきつと、思い出は風船みたいなもので、それにぶら下がって、ここを脱出し、空中旅行ができると思つたに違いないけど、何病だったのか自覚はあるんでしょうね」

女係官はおれに話しながら窓もドアも開け放ち、部屋の真中に人事不省という形で倒れて眠る相棒の男の手当てを始める。病名は人間だと女係官はいつたが？

「正気を失うほどよく眠ることが治癒なんですか？」

「あなたは相棒が死後に残すことづてを、頼まれましたか？」

「死後ですって？ そんなに悪いんですか？」

「この方は死んでいるのよ」

「言つてなど頼まれせんよ、いつ死んだかさえ知りませんでした」

ことづつて、もしかして、二万年後に！ あれだろうか？ 男はあのあと満足そうに「サインして見せた。」

「そうでしょう言つてがないと言ふことが、即ち、彼がすでに生前から記憶をなくしていたことになり、あなたの方も、言つてを受けなかつたという、そのことで記憶を消してしまつたことになるんです」

女係官は男の服のボタンをはずし脱衣させ始める。男はまだ死後硬直は始まつておらず、服を缺で裂かずに脱がせることが可能だ。女係官は男を抱き起こす形で上着を脱がせてから、足の方に回り、両方のズボンの裾を持ち上げて後退しながら引つ張る。男は横着で死者の真似をしているように、ズボンと一緒にずるずる引きずられて壁まで達してしまふ。おれはここで男を憐れみ、女係官から死者の恥部を蔽ふことをしなければならぬのだが、死者と一緒にいるというだけで殺人容疑を受けているようで居心地悪く、格闘のすえ殺したみたいに男の体の上で体力を失つてしまふ。女係官は男が身に付けていた衣類の全部を剥ぎ取り終わり、小脇に抱え、全裸の死体を残して、おれを立ち上げさせるあなのおれ柙櫛は棺に大詰められどあなたと同じ車に乗る。車にはあなたの親しい女性も同乗することになるでしょう。あなたに、親しい女性かどうかを感じる力があるかどうか問題だけれど。わたしが親しいのだと言う以上、親しいと感じるしかないわね」

女係官のグリーンの背一面に大きな白いV字型、スカートにも同じ染め抜きがあるらしく、V字のとがり目が二重になって、歩みの歩幅に揺れ、打ちやすい場所を探していくクイのようだ。

この女はおれの拳骨の固さが分かっていない、固さは過去によって千倍になっているのだ……。

おれには女を地に打ち込んで、この収容所から逃げる自信ができています。おれは昔失業者だった、飢えてもいた、拳骨は固いが、ここからうっかり逃げたら、失業者になって飢えるのではないかとの危惧が、胸を締め付ける恐怖になっている。おれの働くべき会社のようなものも見えず、ずんぐりした塔がみえ、トレーラーバスがつけている。

「今は新聞色の空だわ」

女が言う。

「まだクモ糸のようなものが空にはびこっているんですか？」

おれが聞く。

「新聞紙には活字があるのよ」

「空中戦が活字で行われるようになったんですか？」

「文化はそこまで退化しないものよ。つまらないことを言っただけじゃない、わたしが禁止します。つまらないことで手数をかけないで下さい」

人も物も自然も、戦争が終わって自信たっぷりだと言うわけか？ どこかで車が風速何十メートル

かの烈風をつくっているが見えず、何処もかしこも新聞色でガソリンやオイルの臭いがしみているのだ。

24 燃えない結び目

明り窓から強烈な光が落ち、輝く両手に身をかがめ、光をもみ消そうとしている女がいる。女の下には汚れた紙が散らばっているが、醜い一つ一つが汚れながらも清らかな光彩を放っている。女は太陽のカケラがその手の中に潜ったとでも言うように、光をもみ消す仕草を続け、ウエイトレスのように、エプロンをつけ、滑らかな顔を歪め、唼の音がするほど大げさな瞬きをして、おれを見据え、また何をしているんです？」と気ぜわしく両手をもみ始める。

女は俯いたままで笑い、黙って後部座席を指さしている。蓋のない棺があり、なかに相棒の男の死体が仰臥して、布一枚被せられていない。おれを何処かで追い越して、一足先に運び込まれている死

体に、おれは、その死体に舞い戻った霊のように、着ている上着をぬいで掛けてやるのだ。おれは半裸。スポーツ選手のように胸は厚くはないが、女の前にも平気。死体はおれひとりだけの視線にさらされ、付き添っているおれは他者への見世物であることに感動している。

「上半身なら脱いでも構わないでしょう？」

「わたしに脱げとおっしゃりさえしなければ別に……」

女は折った腰の前面から後ろにライトブルー地に棕櫚の木、蛸、投槍、などの白い線書き模様のあるエプロンをつけている。おれの眼は潜りこんでいき、懐かしさに、そこから出る気がない。

「それは、おれのおふくろのものだ！ あなたは何処でこれを手に入れました？」

「くどくときはそういう言い方をするものかしら。なにしろ、わたし一人しか此処にいないんだもの、くどかれて当然ですけど……」

女は首をかしげ、めくれているエプロンの両端を指で広げる。

「エプロンをはずして下さい。結び目がとれないでしょう。取れないはずだ、その紐の結び目は……」

「なんとまあ、堂にいったくどきかただこと！」

言いながら胸を突き出してくる女に興味はない、おれはエプロンを見たことで、いちどきに両目をつむれないのだ。

「くだいてなんていません、あなたの声がおふくろの声に似ているなどとは、露ほども思っていますよ。ただ、エプロンがおふくろのものだと言っているんです」

「複雑な意味のある言葉を口にされたのでしょうか？」

「勿論です」

「くだくのではないとすると、わたしを泥棒だとおっしゃるの？」

「泥棒だとしても、おれにとって有難い泥棒ですよ、あなたは、おふくろの居場所を知っていることになる……、いや、おふくろの最後を看取ったのかもしれない。教えて下さい！ 体がキビガラよりも軽かったでしょう？ 燃えカス一つ残さずに消えてしまったのですか？ そのエプロンをどうやって剥ぎ取ることができたんです？」

おれは女の後ろに回り、あらん限りの力でエプロンの紐を解こうとする。女は、まるで冒されでもしたような声をあげ、容易にエプロンの尻尾をつかませない。

「わたしを泥棒だと言って！ 泥棒だから好きだと言って下さい！」

女は甲高い声で叫ぶ。この女は、手紙をよこした女なのだろうか？

手紙をよこしたのはサンではなく、この女だったと言うこともあり得るのだ。おれは女を注意深く吟味してみる。女は意識過剰になって、エプロンの紐を尻尾みたいに背に振り上げたり、股の間にはさんだり、横にふったり……。そうまでしなくとも……。

「わたしがあなたの思い出と瓜二つのものを持っているとおっしゃるの？ そんな筈ありません、絶

対にないわ。わたしは潔癖！ 切り捨てたものなど見向きもしない、そんなものがわたしに付着しているというのなら、取り払って下さい！」

ふと見れば、おれの手の内に特上の美女がいるのだ、一気に衝突していく。女は左右に体をゆすり結び目をおれにまかすから、上手に剥ぎ取ってしまう。なにか指先が創造する力を持ちはじめ、結び目に徐々に生命を吹き込んでいくように、おれの指から腕が激しい流れになる。

女の腰からエプロンはすっぽり抜けて、結び目はそのままほどけず、おれの手のなかにある。それを拳の中に握り、喉の叫びをそのままにして、おふくろのものに違いないと言う確信を少しぐらかせながら、膝の上で拡げてみる。

「それをどうしようと、なさるの？」

女が聞く。どうすると言つて、こうしているしかない憤りで見ると、膝の上でそれは、柔らかなガ―ゼのようにくたびれた頼りない布に過ぎず、結び目も小さく、ひねれば、解けそうな危ういものでしかなくなっている。どんな小さな音でもハンマーで碎かれるように響く、ノイローゼ患者のように、まるで大音響を起こす大鉄槌みたいに重いものに、おれも感じているのかもしれない。やはり、これは、ひとから剥ぎ取る犯罪でもあるのだ。

よく見ればこんなに軽く、こんなにも心もとなく、影に縁取られ、照明をはね返して色薄く、膝の上で少し膨れ、へこみ、しわがれた振動をしている。

女はちよつとためらい、脳天から声をあげる。

「ああ、思い出したわ！ あれなら、もう、枯れ木、骸骨、ええ、物干し竿から洗濯物を取るようになって……。人間なんかじゃありませんでしたわ！」

「人間なんかじゃなかっただと？ おれのおふくろだ！ 盗みを正当化しようというのか？ 嘘をつくんじゃない！ あなたが、おふくろから剥ぎ取ったところへ、おれを、連れて行くんだ！」

おれは結び目をつくったまま、すっぽり抜いたエプロンを女に対する責め具に使おうとし、女はそれを奪い返そうと引つ張る。

抜け目ない女はおれから奪い取り、反対におれを括ろうとする、おれは動けない。動けない釘は、その結び目で、力任せに引つ張られて、ぼろぼろに裂ける布のなかで、そこだけが固く、ほどけず、オニキスみたいに光る五角形の塊。おれは息をつまらせる、喉から出ていくのは煙のようなものだ。

「連れて行けっておっしゃっても、それは出来ないわ。あなたは知らなかったのかしら？ この国の新しい支配者は、老人と子供を殺害するところから統治を始めたのよ！ あなたはそれに関与しなかったの？ 彼らは平和の詐欺師と言われないために、その事実を抹消しようとしているのよ」

「そんな馬鹿なことがあつてたまるか！ 何時？ 誰が、何をしたって？」

「足手まといになることや、敵なら他にも深謀遠慮があるにきまっているでしょう！」

「時間をかけ、やつらがおれから必死で記憶を消そうとしていたのは、そういうことだったのか？」

眩暈がくる。もともと眩暈は地球という乗り物におれが乗っているせいだが、その上に、またも、車に乗って、それに乗っている女に乗って掻き回されているのだ。

おれが老人や子供を殺したって？ 母さんまで？ まさか？ しかし、いま、気づいたが、おれの記憶のなかに老人と子供がいないのは、故意にそれに関係する記憶が消し去られたのかも知れない。

何十もの眩暈が痩せ細ったおふくろや、若く美しかったおふくろを取り囲んで揺れつづけ、ゆがみ、空中を跳びかい、眼のなかを泳ぎ、魚型の眼が脳天を貫き、小鳥に食い荒らされた目玉がばらばらと落ちてくる。母さん、母さんは殺されたりはしないさ！ かあさんほど痩せているなら、空襲のとき、流し台の間で、這いつくばって生き延びた小犬のやりかたで、生き延びることができたに違いない！ 母さん、母さんが揺れる。おれを膝の上に乗せ、ブランコで宙返りする。

このエプロンが本物であるなら葬らなければならないのだが？

燃してみる、燻る、臭う、毎日の料理の味がしみ込んでいる本物であるなら、懐かしい匂いが来る、多分。

力を奪い去る匂いが確かに来るが、体のどこかがひくひくし、おれは何故か、生まれ出る準備を始める。何もかも、もう一度始まってくれるに違いないという願いが、窒息するようにやってくる。狭い車内は煙ばかりだ。

煙は匂いと味のフルコースを吹き込むが、胃にとって空気は異物、肺にとっては匂いや味が異物、我慢ならないものになる。あらゆる空気に対してわれわれは従順なのだ。赤ん坊がミルクを飲みながら、ちよつとしわがれた音をたてて息をつぐ、あんな咳き込み方で、おれは口で呼吸をし、すぐに同じ口で呼吸とは別の息をする、それがなんだか判断出来ずにいて、喉を小鳥の合唱が通る。

いま、呑み込んだ甘味が口中にある。しかし次の呼吸の継ぎ目で、甘味が終わると言う不安、甘味が一続きに途切れないように、肺の方を小さいいじけた動きに押さえ込んでしまう。何も与えられないのに、このありさまは、思い出と違う、眠らないで夢をみることではないだろうか。

夢が思い出のようにあり、こんなものを与える。皮膚に霜のようなものが付着し、汗にかわり流れる。汗だろうか？ 暑い。

「暑い！ オープンのなかにいるようじゃないか？」

おれひとりの白昼夢か、夢特有の気まぐれと飛躍がある。ワインがビフテキに化け、食後のアイスクリームがくる。冷えた気塊が割れたガラス欠けのように来て、氷をほうばる上下の歯が激突して、温かいタバコの臭いを嗅いでいる。

おれは曲げた指の関節で長々と自分の鼻をこすり続ける。どうやら犠牲者の様子をしているようだ。食事のあとの充ちた思いにしながら、犠牲者のように長々と目をこする、顎もこする。

夢であり、思い出と違って、禁じられた変貌ではないから、どんなに長く眉をこすることも許されている。おれの息が毒々しい色を持っているような気がする。

女はククという音で喉を鳴らして、時々口を拭う。おれも拭うが、口の回りモミアゲの毛や胸毛が急速に育っている。女はおれの夢の中、眠らずにおれと同じ夢をみている。

車の窓に不愉快なシミがみるみる広がっていく。緑、赤、黒、形のはつきりしないそれを、女の内側からノックするが消えようとしめない。

おれは口をしっかりと閉じる、空気に栄養物が浮遊していて、皮膚からもはいるか、餌を待っている雛のように、おれの毛穴が丸い口を何千万もあけて……。飢えた記憶はあるが、食欲にこんなに粘っこく捉えられてしまったことはない。おまえは労力を費やすことはいらないのだ。空間に向かつて口の列を並べていれはすむ、口を開けて呆然としている最も幸福な時代の実験台がおれだと言うのか？

平和や平等の幻想で、空に向かって人々は億の口を開く、いつかその億の口のうちのどれがおれの口なのか捜しても決してみつからなくなり、どの口がおれだってみんなと同じ、何の違いもないことになる。

肺が痛い、実験段階の苦悩がおれに集まってくる。冷静に考えてみれば、彼らは勝者……、敵を育てあげる気などない、そこまでの深情けはない。食餌なしで錯覚だけで生き、卵を次々生み、肉も脂もつかい果たして羽だけ残して、あるいは羽さえもなくなるほどに消えてしまう鶏、そんなものを目指しているに違いない。

食事をとっている錯覚だけで人間を生かし、筋肉も骨も内臓も総て労働のエネルギーにかえてしまふ、そんなやり口を意図しているのかもしれない。

「それで間違いないなら、生き残った女は卵を生むに違いない、体が消えてなくなるまで。おれは労働をするよ！　させたらどうなんだ、一体なにをしたらいんだ！　もともと薄皮一枚むけば地球の中は白骨ばかりだ、こんな実験に消え果ててあげようじゃないか、自発的に……」
おれは思い出で力づいてわめいている。

素直に幻想を振り払えば、断食している以外のなものでもない。足は歩かず、腕はなにものも掴まない、車が止まる。

外側で人声がして、ガラスについた模様を、棒の先が吸い取り、黄色が消え、一休みして、緑色の

ところが消え……黒……ピンク……ブルー……一区切りづつ消えるのは、区別して採取されているからなのだ。色は内側からではなく、外側についているらしい。やっと静かに無味無臭の空気が来て、おれはそれに飢えていたように、がっがっ呼吸している。

「無事ついたようね、ほら見て御覧なさい、木だわ。木というものはおかしなひと、赤くなったり、黄色くなったり、緑色になったり、裸になったり、骨だけになったりして見せるのよ」

ガラスで造られた建物の中を水がゆらゆら、たゆたい続けているように、おびただし数の光が生まれたり消えたりしている下、赤い木が細い枝を吹き流されて道路を掃いている。光っているのは全部太陽の反射ではなく人工の光、空に色はないが木は育ち、虫もいる。

ここは何処なのだろう？ 人間のする生物絶滅作用は、生物そのものがする自然淘汰にくらべれば、生物にとってそれほど怖いものではないらしい、まだまだみんな生きているのだ。

「すでに終わったのね、解放されたんだわ、どこに行くことも自由なのよ。行きましよう、これ以上いたくないところにいることはない、此処から出ることが可能なよ。ほら出て来るようにと合図しているわ」

開放されたかどうかは、心のなかの問題なんだ。おれは思い出すために魂を隅々まで奮い立たせる。

「あなたは、ひとりで出て行ったらいい、同じ病気、同じ犯罪でも、あなたの泥棒と、おれの思い出とは全く違う。良心的泥棒は、記憶していないから出来ることだ、それに盗むためには物の多くある

ところに行かなければならないでしょう。おれには物はいららない、何もなしで思い出せませう」

女は気がせくのか、両手の指の全部を上に向け、花形にして回転させる。

「そうなのよ、泥棒が病気や犯罪であるわけがない。記憶遮断教育のせいなのね、本当はわたし泥棒なんかじゃない、威張っていて悪くはないわ、大威張りで出て行く。これを見て下さい、綺麗に磨かれて光っているでしょう」

女の手のなかの石がきらりとし、おれの目があちこち落ち着きなく動き回る。この空気の連なりに故郷があるなら、なにはなくとも、プランクトンを呑み込む魚のように、大気に浮遊するものを、呑み込むだけで旅することができるよう……。魚でなく、野獣としての自負が欲しいが、

目はまだ落ち着きなく動いている、あの女のピンと伸びた五本の指の生えている掌の真中の窪み、石の光が、目にちかちかしているのは、それが黒い五角形の決して燃え尽きない結び目に似ているからだ。追いつかれる自信で反り返っている女は振り向くが、サンに似た首の傾け方だ。おれは徐々に体の各部分を動かしはじめ、自分の仕草の一つ一つを意識し始め、遅かれ早かれ、一三歩、四五歩、女を追ってここから出るに違いない。
今、思い出に価値を求めないなら、その前に、それを思い出す以前の思い出の根、おれの生まれる前の世界を考えなければすまないことになる。それは天体のように余り遠くて存在したことがなかったと同じもので、おれが魂の総てを捨てなければもう取り返すすべもない。過去の二十年が三秒で行き

止まり、殆ど無意識で生きたということになる。微々たる思い出によって生きたと偽装する恐ろしさが、ぱっくり頭に口を開けているのだ。

なにか足りないものがあり、ここを後に出来ない思いがある。後部の棺の死体に上着を貸したままだ。女が出て行った以上、死体の男は蔽って隠さなければならぬものを持たない。彼はもう終点についているのだ。おれはとうとうに死体から上着を剥ぎ取ってしまう。

怯える手を袖に押し込み上着を改めるが汚れはなく、ギザギザの口の逞しい昆虫が一匹飛び立つだけだ。おれは棺と充分距離を取ってから、おもむろに棺のなかを見る。死体がない、無いはずはないと近づくと、痩せていたにしてもまだ肉体であったはずの死体が、赤黒く細々としている。もつと近づくと、血糊や肉片や内臓の屑が静かにまといついて仰臥している骨格がある。

死は静止ではなく、他へ移行する過程だといえ、死体がこれほどの短時間のうちに、これほどの変化をきたすものだろうか。おれは彼が死んでからの経過時間を測定する手段をもたないが、この車に乗ってからは夜の一つも過ぎしていない自信だけはある。腐敗菌による腐敗ではない、獣はいないから獣が食べたとは思えない、これだけの分量を食うには、上着から飛び去った虫一匹では不能。

おれに咽喉もとを締め付ける思いがくる。おれの舌が巧妙な舌なめずりをしていないか？ おれの鼻づらにべとついたものが滲んでいないか？ 快い味と匂いを鼻や食道や胃に、つらい味と匂いを肺

や気管に入れて、夢のうちに、おれは死肉を食い終わったのではないか。

おれの夢見るような満腹感は何であったか？ 嘔吐感はないか？ 唇がにやりとしていないか？ 思い出の年月の中に死肉を口に入れた記憶はないか？ 口を押さえてみる。あの頃、何百万もの死体の肉片の一片たりとも、おれの口に入れられることなく腐って宙に消えていった。何の役にも立たずに……、そのことに哀惜を覚える……？ その思いの正体はなんだ？

一生の間に食べた美味なもの内、尿、糞、汗、垢にならなかつた残りの、最も良質の部分が死体であるはずだが、その一番良質な部分が宙に消えるに当たって、腐敗菌による無残な糞臭と、毒性物質に化すだけというのでは、おれを肯かせない。人間の大部分をも肯かせないだろう。

決して機械仕掛けや化学変化による肉体の気化ではなく、死体の自然による変化のなかで、死体が一生の間に食べた食物を、美味と美臭に分解し、空中を浮遊して当然ではないか……。

おれの手はいささかも汚れていないし、口には腐敗の無い涼しさがある。間接的に食べたことと、直接食べたことでは遙かな隔たりがあるのだ。よく分からないものの中で、これだけはよく分かる知的能力がおれに残っていて、片手で自分の肩を優しく叩き、

「母さんの息子ですから！」 おれは顔を上気させ頬を染めて言うのだ。

鮮やかな真紅の墓石が等間隔を保って幾つも幾つも炎を引きながら、動く道路を四角いたために無骨

に動いていき、落ち込む火槽で煮え繰り返って、オレンジ色の炎をあげ、眼の前を赤い光になって何本も何本も細くたわまらずに、真つ直ぐ伸びて走り、雨に打たれてシューツと白煙をあげて変身し、青い肌の強固なものになる。

前からおれは、物がやがて人間に役立つことを拒否することを予感していた。あれから何日経ったか、いまはもう人も物も……廃物さえなくなっている。

地下街の扉を開けることに、空っぽの部屋が並ぶ、歩いて誰にも邪魔立てされない自信で、声帯も胃袋も自由にうごめかせ、波を高めながら歩き回る。洗面所の扉が開けっ放しになっているところから、おれの足音にびったり重なる足音で守衛がでてくる、帽子を置き忘れたのか、髪がかすかにくつついている蒼白の額。

「ここは新しい収容者のために用意されるまで閉鎖だ、きみは出所を命じられた、死んだ者や、重罪監房に回されたものも多い中で、きみは実に幸運だった」

「労働はどこでするんですか？」

「何を聞くんだ、きみは此処で総てを与えられ、今は自由でさえある。これからは、きみの年月をきみが作ることになる、理解できないか？」

「今というときに何故そう決めたんです」

「何故って？ 本当のことを説明する義務はないが……、つまりこの実態は確実に隠蔽されたのだ。わが国の政府は、政治や教育や宗教さえ記号化される、平和世界を選択した……きみに理解できるはずもないが……政府の威信にかかわる問題でもあるからこれ以上何故と言われても答えられない」

「ここが再開された場合、新規の収容者として、舞い戻ることが考えられますか？」

「悲劇は操るものじゃない、操られるものでもないよ。きみが、ここでどれほどの生命の危険にさらされたか、苦痛を思い出してみろ！ 舞い戻るなんて怖くなるはずだ。ここから何処かにいったって何かに出くわすだろう。われわれの為に死ねるだろうし、われわれが与えなくとも、化け物として生きていけるだろう。ああ、そうだ、おまえたちは過去に執着しないように馴らされたから、すぐにもここを後に出来るのだ。海峡を越えていけば、此処と違い土踏まずに地球の丸さを感じる場所もある。あ、何故かおれの脊椎に限局した疲労があつて、おれを畳み込もうとする。

「なにをしている？」

「なにも」

「行きなさい！ そうだ、そっちへ。旅行許可証は服にぬいつけてあるんだ」

おれは守衛の開けてくれた正門を出て、光や風のなかをいく。それは過去に向かつて歩くことになる。気づかずに涙を飲んで、その熱さに胸をふさがれ、それでも行きたい方向に行けるといふことだけで画期的なのだと言う自信で歩ける。

これは冒険で、おれの内部は熱く、消化器や血液さえも、過去を夢見フル回転をはじめている。

街はおれから身を隠して、地下道だけが続く。そこには後方に走る車の風速何十メートルの空気の束と、前方に走る車のつくる空気の束があるばかりだ。ついには、つんざく連続音になる。

それは、おれの体のなかの肝、腎、胃、肺、性器や心臓や、血管、リンパ管、神経、あらゆるものが回転する響き。おれの目や耳から洩れでているものかもしれない。

おれは目に見えない街の中を、目に見えないものを飲んで、エンジンに給油しているように口を開

けたまま歩き続ける。

三日間歩きつづけたとおれが思った日に、突然、街が現れる。

動く道路に乗っていく人々は、おれの方を向いて立ってはいるが、変に、黒々とした影を引き連れている。おれが視線の全部に逆らっていくと、人々は一齐に首の向きを変えてしまう。

いる、いる、海獣のように脂の乗った女も、逞しい青年も、一歳の子も、二歳の子もいる。おれは憑かれたようにみんなが視界から消えながら、次々生まれ出るのを見ている。

買って、食べて、生きて、働いて、やつぱり、二二が四、四二が八、人類は殖えているのだ！

いそぎんちやくの手を持った○・二歳もいる、○・一歳もいるのだろう、頭から呼吸が光暈のように出入りしている、毛羽立った毛布に包まれて、人工の照明のなかをいく。四四・一六、八八・六四、人間はやつぱり繁殖して昔のように生きて何食わぬ顔だ。

おれの足もとに子犬が戯れるように、前後左右、黒いものが素早く動いては止まる。おれは足を括られでもしたように動けない、助けを求めて鼻の奥でつまった声をあげる。足もとに戯れているものは影、前かと思えば後ろ、後ろかと思えば横、長いかと思えば短く、太いかと思えば細く、おれをののしっている。

水銀色の地上にあった割れ目から、腹ばいになって地中を覗き込めば、髑髏がぎつしり並んで超満

員の野球場のスタンドみたいだったのに、ここに普通の盛り場があり、人と人がすれ違い、摩擦で熱してさえいる。デパートやショッピングセンターがあり、公園に続いて学校や大学や競技場があるようだ。老人の姿は見えないが、子供は生存している。

不安な探る目つきはいらない。ここは、おれの故郷ではないから、見物はしても理解することなど
いらぬのだ。

突然、あたり一面、赤い光が発狂して騒ぎまわる。地下の、光のコントロールセンターが、故障でもおこしたのだろうか？ 赤い光に道路や家はピンクに、木々は黒味を帯び、影は物にふくらみと深みを与え、存在を現在に突出させる。

次々に通りすぎていく人々のくすんだ顔は華やかな健康色に変わり、平べったい顔に凹凸が見え、鼻柱や口の脇の窪みが思慮深そうだ。

赤が狂いまくり、ひと揺れして消えていく空を見る。偽物の空はとりとめのない蛍光の雫、ここは相変わらず地下のようだ。出来そこないの光、あてにならない光。

道路の動きに従って、後ろへ後ろへと飛んで行くポール上の球形の家々は、白を際立たせて未来都市を予感させる。みんなは、何語で話しているのだろうか？ 話がききたい！

おれのポケットがたるんでいる。たるんでいて、中身がないと言うことは救いのないことだ。中身

が充実してもっともっとポケットがたるみきるのを願って、おれは手を深々と突っ込む、突っ込む手
の力で服を重くしているのかもしれない。ポケットから出たおれの手を掴んでいる生気のみなざる手
がある。

「おれは何も掴んじやいませんよ」

手を掴んだ男は警官であることを示しながら首を振る。万国共通語だ。

「ポケットのたるんでいることが問題なんだ。何をいれたことがあったか？」

「この手ですよ」

「そう、この手か。さっきの女もそう言っただけだが、盗まれていた」

「おれじゃない！」

「じゃあ誰だ！」

「ポケットの重いやつです」

おれの下がった前髪のなかを通り過ぎる煙草の煙、何本も何本も煙っていき、おれの両手の指が重
なり合ってもつれて重く、両翼を傷めた鳥のように肩が落ちる。

女が一人、動く道路上を走ってくる。女はおれの前すれすれに立ち止まる、女は笑いかける、ソバ
カスの群、試験管のなかで出生した人に多いと聞いたことがある。おれはどぎまぎする。

「ようこそ、我街に。わたしにサインして下さい！」

彼女はぶら下げている円形の携帯電話の蓋を開ける。

「尊敬申し上げております。あなたは老人社会を擁護されているとお聴きしています。この政府首脳は老人を切って捨てました。わたしは、それを間違いだとおっしゃる、あなたの勇氣に感動しました！」

おれはどんな狂った光よりも、彼女の言葉が眩しい。変に、にたにたしてしまう自分に当惑し、おれは踵の影を、とんとんと足で叩いて黙っている。

「そのうえ、長寿された老人の遺伝子を研究され、人間に長寿で、呆けない生涯現役の社会を約束されたとお聴きました、人間にとってそれは夢です。それはあなたの、お優しい老人を労わるお心からでたものと……」

この女は何を言っているのだろう？

「もしかしたら、お人違いをしていらつしやるのでは……、もしかしたら、それはヒゲの、ヒゲの医師のことではありませんか？」

おれは当惑し、サインして欲しいという、携帯の画面に、右手の指をとんとんと往復させる。

「まあ、これなんて素敵！ 飛んで行くピーターパンみたい！」

おれはほうほうの態で道路から降りる。光は何時の間にか和らぎ、あたり一面穏やかな明るさが均等に満ちている。

おれは私生児であっても、試験管ベビーとは違う。穢れも、やましさもなさそうな彼女の明るさが

眩しい。それにしてもヒゲが記憶のなかから、突然姿をみせる。これが現在とどう繋がるのかわからない。おれの記憶として把握できないものが、言葉としておれからほとぼり出てくるというのは、どうということなのか？

人違いであっても、おふくろがにんまりしているのがわかる。おれだって、そんな社会を夢見ていたんだ、そうなのか？ 口のほうが、おれの記憶より先走りしているから、おれは落ちこぼれのよう、足もとを見て歩く。

並木にエアカーがくぐられている。ほんの一寸借りるだけだ。人々はカラフルで宇宙人のような服装で歩いていく。よく見るとみんな、一人づつロボットを連れて歩いているのだ。

おれはエアカーを引きずっている。乗ろうとしても動かない、大地を引きずっているような不規則な震動がおれを揺さぶる。手荒にいじくると部品という部品がひしめいて、やがて沈黙し、総ての音が途絶える、もはや修理不能だ。せめて軽やかに木の根元に捨てる。

おれの好みに合った服の男の後を歩く、洋服代わりの男は、街角で煙草を買い、足早になる。洋服に引きずられて、着ている人物であるおれが歩くのだ。洋服は足早だから、おれも足早になり、洋服の人物の頭上から首一つだして先をすっきり見通せるのに、着ている甲斐もなく、卑しく下をみて歩いて、いま、洋服から、洋服が買ったばかりの煙草が落ちるのを見る。

おれの洋服の落したものは、おれのものに違いないのだが、

「落としましたよ、落としましたよ！」

おれの上ずった声。

洋服は飛び退き、バスに乗り込んでしまい、もう、バスの奥の席だ。

エンジンは揺れているが、まだ閉じる寸前のバスの入り口から奥に向かって、おれはタバコを放り込む。誰一人投げ込まれたことに気づかないのか、バスはドアを閉じて、クラクションを鳴らし、それから、揺れを大きくしてドアを開け、中からこちらに向かって投げ出す……、投出されたものは、おれの投げ込んだ煙草だ。小さいけれども、さも重荷だったように投げ出して、すぐにバスは出発していく。

これはもしかしたら時限爆弾なのかもしれない、おそらくもう爆発しなければならない筈の時刻にきている。

おれに爆発を唇で押しつぶす度胸があるか？ 自分に不思議な力が発見できたように、おれは煙草の箱をつまみあげると、ポケットに突っ込む。

ポケットは大きくなるんでいるが、たるみは今のために用意されていたのだと言わんばかりに膨れはじめる。一瞬の爆発であっても、その膨れ上がる速度は決しておれの思いより先には出ない。おれの思いの速度にあわせて、一瞬怠惰に、あるいは懸命に、懸命といっても恐ろしく効率の悪い懸命さ

で……、無限に近い道草を食っているのだ。

いやはやこんなにくすぐったくて、まどろっこしく、おれの思いが間を持て余して、笑い出すほかなさそうな時間が、おれの最後を飾って、思い出の過去は相対的に小さく極限まで縮んでしまう。

地下街はこのあたりから地下工場地帯になり、ところどころに最新設備を覗かせてはいるが、その全容は厚い壁に隠している。

「時々寂しくなる時があるの、助かるわ。今からばりばり吸って、そして十分後、最後の一本を……、こんな恩義がきくものなのねえ。人と人がなかなか話し合えなくなっているけれど、話なんてもの、全部聞くことは出来ない、たいてい、ほんのちよつと肝腎なところや、都合のいいところだけ聞けばすむのよ。あなたが一番欲しいものがなにか察しはついたわ」

女は闇を背に立ち上がり、体の曲線を際立たせる。

「わたし、抜け目なく、この国で稼ぎまくったわ！ 敵討ちってところかしら？」

地下農場が効率よく青々と何重にも積み重なっている。働いているのはロボットのようだ。ところどころに巨大な空調設備があり、地下には隠れて裏道があつて、複雑に入り組んでいる。

ピクピク動く思いもあるが、覚悟を決めてコンクリートの欠け落ちた口から入り、影になって折れたり、裏返しになったりする女の後ろをいく。

目玉ほどの大きさに光り、線を引く岸壁の地下水を手でこすりながら進むのだ。うす暗く、石を蹴って躓くと背が立たず、額を打つ低いところにおいて、おれの閉じた瞼が一番高い天井だ。やっと、おれの目が安物のガラス玉のように滑走し、照明のある大きな洞穴にでる。

「たしかに地上に出る近道なんだろうね、いく方法はいくらでもありそんなものじゃないか？」
言ってみるが、女はもう天と地をつないで立つタコの木のような風根一本に入れ替わっている。

一人でも新しい道を創造出来るのだ、行く方法はいくらでも……。しかし此処で、何一つした
いようにしたことのない平穩、もつとうまくいかないものかなどとは思わない平穩に逆戻りしそうだ。
おれの町がこの国のように繁栄しているとは、とても信じられない。

故郷の生き残りの、或いは死後の、人間関係を探りだしたところで、どうにもならないだろう、前にいたことがあるからといって、あの町にサンや広が無戻りして、おれに対して同じ友愛の情を抱き、灰のかたまりを食っておれを待っていると信じられるか？
瓦礫のなかに足を突っ込み、爪をすり減らしながら歩く。

女が一本足で立つ水鳥の姿勢で手を後ろに回して立っているが、おれは意に介さず、どこかで煮えくり返っている水の音に耳を澄まし、水を求めて移動してみる。

水のごうごうと渦巻く音、鋭い横顔の重なり、この水の湧く地底に、自然の作った洞窟があつて、

何人かの人が足元の滑りを気にしながらいくのだ。地下は夜露をしのぐに心配はいらないはずだが、ここは地下水が洩れて露になって落ちる。

みんな相似形の横顔をして洞窟の壁にさわって、水のなかを見る。水のなかの方が明るいのではないか？ 目を凝らすと黒いシャンデリアのようにぶら下がっている、おびただしいコウモリが見える。水の湧く音、濡れて光る鍾乳石がある。魔王の玉座、カンガールの袋、竜の串刺し、地に墜ちた天使。

おれは足のかかる岩をさがす。

足の下、水が澄んで、銀貨が落ちている。ただの銀貨とは思えない神秘、こぼこぼ湧き出している大中小のレンズを重ねたような水のふくらみが、かすかな光でわかる。これが地を何階分もしみ通って濾過された水だろうか、地の中心から来るバイキンなしの水だろうか？ 自然の水が蒸留水みたいに、あじけない筈はないだろう。

みんな横顔の線描き、コウモリの一族に似て黒い。どこから出てきたのか？ 過去のいつか、これと同じように手足から尾を引く燐光をもって、幽鬼の子が跳び歩くのを見た。熱病で死に絶える前、足をとられて、転がらんばかりの跳び歩きかたで……。今は水を跳んで、人々は子供のように幼い。言葉が通じているのは、ここは故郷なのか？

「ほらほら、お尻みたいな石だわ」

「あれっ、おっぱいだ、今度はあんよ」

「こんな冷たい石を見て、何故そんな柔らかい表現をするんだ。おれは上に続く梯子をのぼりたいんだよ！」

「おまえに向かつてうつむく壁は、吸盤なしの足では登れないんだ。滴り落ちるおまえは雫になるのか？」

「死んだ者たちの骨はとけて形を造り直し、鍾乳石になって育っているのだ。いつの世か、ここは恐るべき名所になるだろう。」

「して上げられることだって？　どんな具合にするの？　きみの邪魔になって、足を引っ張るのでは、すまないじゃないか？」

女の顔が緑色になる、おれは何者と意思を通じているのだろうか。

大岩を超えて気温が上昇し、皮膚に水滴がついて汗まみれになる。懐かしい風のそよぎ、おれは今までいたところとは、別の気流の循環に組み込まれたらしい。

長い間、活字と親しんだことのなかつたおれの頭の芯に、ずしんずしんと響く活字、次第に激怒で息が止まりそうになる。

歯がキリキリ鳴る。

「どうした、きりきり舞しているのか？」

「いま、歯が生えてくるところなんじゃないの？ 痒いものだから歯茎をこすり合わせるのよ」

「もうすぐ二十五になる、三十五になるような気もする」

「歯が心配か？」

「死んでから生えても、しょうがないわね！」

頬の肉を内側からくわえ込んでいる中年男と、ショートカットで、銀色の犬の首輪をはめている若い女の夫婦が、おれの飢えを探り当てたように新聞をくれたのだ。

「これはなんだ！ 地下街のその下に大地中道を、五百兆の予算で着工してどうなる？ 必要なのは垂直に地上へ登る道、エレベーターや階段があれば充分じゃないか。まったく、なんてことだ、飛行機が天からぶら下がって飛ぶのではたまらない、ハイジャックが成功出来るはずがないじゃないか、

犯人と航空関係者の間には人間として最低護るべきルールがあるんじゃないか！ 天に衝突して落ちる鳥対策だつて？ 自然をだまそうとしているからだ！ 鳥だけでなく木もこまっているだろう。地下では葉っぱや花は咲いても所詮根だ、根は木の恥部、見て欲しくないにきまっているさ。地上を返せ！ 地上を返せ！ この国の、おれたちの、地上を返せ！」

誰に言えばいいのだろう、

「戦果はどうなっていたか、領土の計算資料を示せ、領土の計算資料をだ！」

おれの目は必死で活字にしがみつくと、活字に突き刺され、突き刺し、おれは何時か紙塑人形になるだろう。

「これは冗談だよな、この新聞の本当の日付けは四月一日なんだろう？」

「このひと、熱っぽくなって、青春を取り戻そうとしているみたい」

「この活字を真剣に憎悪して、憎悪のハメをはずしてはいませんよ」

「なんて上手な憎みかた！」

「おまえ、克とかいったな、実際に生きて体験している最中でさえ、いろいろ見誤っていたのに、今更、活字なんか激怒しちゃって、どうするんだよ？ いま、おまえ、エレベーターとか階段とかいったな、終わりのないほど長いのが必要なんだぜ、死の階段は終わりが無いんだ！」

このカフエの柱になっているのは天井と床をつなぐ根ばかりの木だ。根には親指の頭ほどのジャガ

イモみたいなものがたくさん連っていて、見つめているうち、ニスを塗ったような艶が見えてくる、見方によっては、太いぼつてりとした豚の顔に見え、美味な一皿にまで調理されてしまう。こんな粒がちかちかして女の首飾りだったこともあったし、こんなものに哀れっぽい目鼻がついて死体だったこともあった。

重なり合った死体のなかにおれがいてこっちを見る。

「昔、根の無い植物はピンを靴のように穿いていたが、根ばかりになった木は、一体どんな帽子を被っているんだ？」

長い間、おれは怒らないで生きていたらしい。一体誰の欲望のために自分を弱めることをしていたのだろう。敵は……、敵がいたのだ、油断しないために、おれを弱めて、この世から消していたというところかもしれない。どこかに味方が残っているはず、何人か味方が釈放されてこのあたりにいそうだ、探して教えて……、しかしみんな油断がないからな、おれに教えられるかどうか？

中年の男は、くわえている頬の肉を離しもしないで言う。

「男にとって辛いけれども、女にとって辛くないという、そんなものじゃない……」

おれは問い返す。

「なんだって？ どんなくあいに？」

あの女の不安のまじった眼に出会う、彼女の眼は人々の腰から肩のあたりを次々に動いていき、や
つと見極めがつくくらいに指を動かして合図をする。おれはもう一度激怒して盗みに加担しなければ
ならない。

「勝ったのは誰なんだ、地下に勝者がいるんなら、亡者の勝利じゃないか、この活字は亡者のする
自慢話なんだな、亡者が地下の墓を膨大にしたことを誇っているんだ、柳の根は、そよがないだろう
が……！ 葉っぱはどこにあるんだ、ええ？ おまえたちの持っているカードは柳の葉っぱじゃない
のかい、何年前発行なんだ、どうやって発行できたんだ！ おい、財布を出してみせろよ！」

「葉っぱなど欲しがるもんか、それで懐が暖かいなんて陰險な幸福だね……、亡者なんてもの、その
正体が知れば、どいつもこいつも、パンチのきかない奴ばかりだ。もつとも、ざくざく繁殖して、
どこもここも亡者だらけではパンチが効くはずないよなあ」

「亡者が何とかやりくりして、どうにかこうにか暮らしているものだとは思わなかったな。喉で笑い
たい気持ちを押さえるような顔をするな。おれに期待しているように見えるじゃないか。亡者に期待
されたりしては、おれは猫に食べられたあとの白い小骨に変わってしまう。期待してくれるなんてい
じらしいけどな、いままでことあるたびに、形勢の良い方に肩を入れるやりかたを繰り返してきたん
だろうが。ええっ？ しかし、幽霊なんてものは、所詮これでジ、エンド。エンド以外の何ものでも

ないんだ。きみ、泣きながら自分の死体を揺さぶった記憶がまだ残っていて、それを忘れるためにカフエに集まって来たんだろう？ おふくろの死体を揺さぶった記憶の方はどうなった？ 残っているのか、いないのか？ きみに鬼気迫る体験談があるにしても、作り話だろうなんて疑いはしないよ、その体験談をおれの記憶として、この頭の中央に正座させてあげても構わないぜ、どうせ空いているんだ」

両手で酒を飲もうとする男の器は、投げ縄でからめとられたように下に落ちる。おれの激昂をその音でかき消す目的なのだ。昂奮などというものは、いつでもずっこけた形で、投げ出される。

「おれじゃないよ」

砕けた器を拾いながら男がいう。

クモが網を張らずに一本の水平な糸を張り、その先にぶら下がり、糸の先に一つの大きな粘液の玉をおいて振り回している、

「投縄グモだ！」

「それがなにか呪いのこもった力を持っていて砕いたというのかい」

夫婦は靄のようにぼやけ、あの女の指先がこっちりと輪郭をかため、靄のなかを危険な横滑りをする。手をつかねてみているだけでいいのかい？ 何か毒気と異臭に満ちた雰囲気になる。

男の声がする。

「呪文で地下街を浮かびあがらせようとしたり、釣り糸で故人をつりあげようとし、釣り上げるには生き餌がいるといわんばかりに子供たちを沢山飼っている、あの老人たちの仲間になる気じゃないんだらうな！」

「何だって、老人がどうしたって？」

「もっと、もたもたしていい、結論は百も出していい、そういつているんだ」

「結論を出してくれると言うのかい？ その連中が？」

「危険だと言っているのよ」

何があるんだ、危険に対抗して叫ぼうにも、逃げようにも、そのための器官などおれは持ち合わせていない、危険なれして、危険などないと同じだ。

地上でなく地下の、巨人の足のような土色の草の根に挟み込まれたかたちで、赤と白のまじった小花が房になって、露さえ含んで咲いている……、こんなところで生き続けられるのか？

おれは、それが少女であるかのように、手をあて、脈をとり、要態をみて、地上に同行したくなる。

鼻を寄せれば芳香さえ放って、柔らかい息さえ、そよ風と受け止めて、小さな花びらをかすかに震わせる。

かって、女がいてそれはサンだった。花を根こそぎにするために垂直の茎を引っ張る。引き抜いてみると、花は散って茎だけ。花は散ったのではなく、羽虫で、飛び散ってもう霞の彼方だ。みごとに擬態。

おれも手を偽の触手だったように引つ込め、誰に馬鹿にされているんだ、おれはそのまま腕を枕にして寝転んでしまう。

無防備だなあ、生贄のようじゃないか、そうだろうとも、虫にくらべて。羽虫が花房になっているように、イトミミズがイソギンチャクになっているように、おれも小さい生物が集まって形づくる擬態かもしれないじゃないか。おれは羽虫の残した芳香に気が遠くなりそうだ。

部屋の細めにあいている窓のカーテンが風を呑んで円筒形になって舞いあがり、その筒のなかを風が突っ走っている。吹雪のなかで、おれが寝ている。はっとすると、覚えのある食堂からの匂いが、冷たさを消す眠気のように来る。

眠る、もう瞼を上げたり下げたりすることはいらぬ。その結果、眠ることに自分の命の全部を賭けている。魔術師のイカサマにかかって、おれはおれの眠りに賭けるだけだ。

しかし昔こんな怠けたやり方で命を賭けるものだったかどうか。命を賭ける？ 何のことはない、おれの周りはみんな腹ばいになって転がり、ライオンが不思議な柔和な息を吹き出すように、危険な

どとは不調和にいる。しかし雄がひよいと前足を振り上げるのが見える。いまにも肉を食い裂こうとする。

ここは地下だから、コンクリートは厚い。しかし、こんな根を見せる大地は扱いにくい野卑なところがあるから、コンクリートや石の秩序を破壊しつつあるに違いない。

途切れ途切れに鳴ると、鳴り出したら止まらないのと、二つのインターホンの音、飲みすぎのげっぷの合唱、爆発音を連ねる中古エンジン、動き回り止まりつづけて響くようだ。眠気でおれの眼は奥に引っ込んで動きが悪くなっている。

二つの椅子を並べて横になり、こつちを向いている男の大きな瞳孔は、おれになにか危険を感じている微妙な気配がある。こちらを向いたまま、その男は立ち上がるものの、したたか地面に体を叩きつけて倒れる。傍らの女は頸をめぐらしてそれを見るが、頸のめぐらし方は、頸骨の鎖をリレーしていく伝令のみえるような妙なエレガントさだ。

やれやれ、おれは自分の頬をひとなでする。なんと恍惚とした仕種をしているのだ。おれの患部みたいに不思議なリズムで湧きつづける音がある、いまのところ、何の役にも立っていない思い出のせいか？

明日は地上に出て故郷にむかう。まあまあ……思い出をなだめるつもりで耳に手をあてるが、ます

ます響き、弾丸が嵐のように飛び回る音は、破局を招きそうな音だ。

この地下街は、真中の空いた円環の形になっていて、この店と一つの壁で接しているらしい洞穴を巡って街が回転しながら押し寄せているのかもしれない。

耳の穴を小さくしてしまう。いずれにしろ、明日はここから地上に出るつもりだから構わない。ひよわな敗者のやりかたしか思い浮かばない。こんなとき、腹の動きを、どこにも手をあてずに執拗に感じる事ができるもの、この音がそれかもしれない。

気持ちのいい愛撫のような思い出がくる？ サンの白いドレス……クモ糸状のものが彼女を被ってたなびいている、白い糸が密生してたなびくのだ、おれはそのベールの頂上にピアラをおく、結婚式にするんだ！ 母がにんまりと笑う。おれはサンを抱きながら静かに歩いていく。二人は踊る機械になって回転する。くも糸を巻き、体をやわらかにしめつけ、もう、色なしに溶け合い、他から身をおくす術もいらぬ。「こんな日もあるのね、これが待っていた日だということね」
豪勢な長い長いベールを引いてサンは満足そうな天使の笑顔をみせる。

大学の入試会場で、おれの右前が突然騒然とする。女の受験生が、緊張のためか急に嘔吐したのだ、

おれの右隣りの女の子が立ち上がって、おろおろし、しきりに要態を尋ねたり、背中をさすったりしている。手をあげて試験官を呼ぶが、なかなか気づいてくれないのだ。おれは隣の女が失格になるのではと心配になる。彼女は手をあげて立ったままだ。みんな知らん顔で試験問題に集中している。吐いているご本人さえ、必死に受験問題に食らいついている。試験官がようやく気づいてやってくる。吐き続けていた女は治療のための退場を執拗に拒否した。

仕方なく試験官は通路に新聞紙をしいて行ってしまふ。

試験官がいなくなると、前の女は緊張と昂奮が頂点に達し、

「ピューー」

と鯨の潮吹きみたいに勢いよく吐き出しはじめる。

「ピュー。ペツ、ピュー。ペツ、ピュー。ペツ、ピュー。ペツ………」

リズムをとって通路の新聞紙の上に吐き出される汚物が堆くなり、その臭気がおれのところまでただよって来る。

昂奮しているために血圧があがっているのだろうか？ まるで鯨だ。それでも、ご本人は一時も試験問題から、眼を放さない。

おれはそつと隣の女を見た。まだ、前の女を心配して問題に集中できないらしく、試験問題は伏せ

られたまままだ。前の女が吐くたびに自分が吐くように大揺れする。その憂いを帯びた横顔。それは、穢れをしらない天使、思わずみとれてしまう。こんな清浄で魅惑的なものに、出会ったことが、かつてあったか？

おれは何とか気を取り直し、精神を集中させて時間をおえた。得意科目だったのに何時までも悔いが残った。

合格発表の日、おれの番号を認めると、彼女の番号を探した。彼女の前の番号はあるのに、彼女の番号はない。そんな、気が付くと、おれは大学の事務局に異議申し立てをしていた。

そんなことがあっていいのか？ 事務局の職員は二人の関係を尋ねた後、ただ黙って聞いていた。

彼女が補欠で入学したことを知ったのは、サンがおれと同じサークルに現れたときのことだ。

おれは、気まぐれの正義感から、遊び感覚で突っ走っただけで、そんな結果を想定してはいなかったのだが……。

あの頃は、よかったなあ。おふくろとサンに関する限り想い出は、消え失せはしない。おれは自分が自分であるための核のように、それを優しく保護し、そこから何度でも人生を始めようと思う。老人と子供にからむ部分で思い出は不透明になり、全容を捉えられない。

何か大切な約束を忘れているような、不安があるのだが……。

もう何日も腹一杯のピクルスを食べたような酸っぱい味がくる。酸っぱさが倍増して、喉元に狼が集まり噛み砕くような衝撃がばりばりきて、飛び起きるが、喉仏があるだけ、おれは眠ったあとの温みをまとっておっとりしている。ただ足は何時もの倍も重く腫れ上がって、一センチや三センチ浮き上がっている。おれは熱い眉をひたすらこする、白く濁った大きな光が足の上にも下にもあるようだ。いままでと違う空気を浴びている。おれのいる反対側の隅、木の根を利用してある部分が崩れを起こしているらしい。今までの空気とはつきり違う、情け容赦ない砂嵐という歯ごたえのある風を樂しむ、樂しむ？

おれにとつて与えられた運命を信じている最盛期はもう過ぎたはずだが……。崩れがこれよりひどいことにならないうちに、何とかしなければ……。

潮が引くように砂嵐が引いていく。ポカンと白い大窓ができていて、おれの瞳孔が急激に縮み、くつきりと総てが見える。転がっている男の顔が堅くなり、生命から遠く離れている。新聞をくれた男も、ハンカチを鼻ずらに押し当て、椅子の上で横になっている女も、近寄ってみれば、さっきまで重たいマツ毛の下、うっとりささの覗いていた眼は淡く滲む墨汁のように影が薄い。一人残らず死者なのだ。

おれは、何時かも一人で死体のなかにいた、現実がうまい具合に思い出と合致している。ここは大
声で助けを求めようが、片足とびで逃げ出そうが、一日中蹲っついていようが、よく似合う場所だ。そこ
の男や女のしわの寄った額になど決して涙を落しはしない。全員が死んでいるということ、おれは
自分の総ての感情から自分を保護できている。もうこれ以上破綻はききそうにない。何かやることがあ
りそうだが、ありそうだとさう思う思いは減速し、思いが死に絶えんばかりに膨大な時間を費やしている。

あの壁と天井の崩れた大窓の向こう、総ての機能の働き出す、少年の朝の活気に立ち返えれそうな、
白く明るいすがすがしさがある。

おれはどす黒い塊に変じた死体を飛び越そうと躍起になる。死体は、死者のベッドにむらがる嘆き
の人間のようにおれにむらがるのだ。

崩れてあいた大窓の向こう、グルングルン音をたてながら岩を呑み尽くす空気の渦、そのなかにク
ロレラを浮かべて粘つく流れが見える。その向こう、靄に包まれた山脈か建物か見分けのつかない白
いものが見える。思いがけないところに地上があつたにしても……地上があつて当然。自然が深呼吸
している素直な香りがあり、崩れたカフェにも副渦ができて、皮膚の毛穴が水浴したように清浄にな
る。

汚れの欠けらも無い風の分子が、おれの顎に直接飛びついてくる。ここは地上のどこだろうか？ 視

界にあるもの全部がおれのコンピュータにかけられ記憶のカードを探してカタカタ音を発している。とにかく地上があつて、風景の全部がおれのなかに流れ込めばいい。口のなかに突っ込んでくる竜巻。おれはとんでもない生物に変化してはいないか、臍の窪みのあたりにうごめくもの……。おれは自分の叫びを自分の鼻柱にぶつけてしまう。死者たちの顔は黒や茶の髪にくまどられて、それぞれに長く短く暗く明るい、一様に思慮深い未開人的風貌で、眼の数が殖えるはずも無いが、見るという絶対量を増大してこちらを見ている。それにしてもみんな、こんなところで死んでしまったのだ？ 椅子にのけぞっていた女は、変に膨張して波打つ衣裳に溺れてしまい首を埋めて顔がない。彼等はおれから遠く、どれも眼窩を大きく開けて縮んでいるのは、この間の相棒のように、大量の空気に煽られて短時間に気化したのではないか……。

何時だつて思いが裂け目になって、それに、おれが止めを刺されるなどということはない。おれはこの世に満ち溢れている死体を掃除する禿げ鷹のような掃除動物として能力を与えられ、その使命をもつて釈放されたのかもしれない、それだつて卑下することはいらぬのだ。

おれ自身そこに咲いた虫の擬態なのか、分かったものではない。肉体の気化などと言う体裁のいいものと違い虫が飛び立ったに過ぎないのではないか？ おれはその虫を蛙のように食べたらしい。……しかし、いい加減で食欲の限度もくるというものだ……。

おれは柵から落ちていながら無傷の葡萄酒の瓶を小脇にかかえ、風か熱か臭いかの一分子になって、ここから出て行こうと考える。下の流れの音に耳をすますと、冷たいシャワーのように、しぶきを含んだ濃い空気がくる。

誰の力や祈りで地獄はもちあげられたか、おれには祈る習慣などない。

28

白髪の子と、首のない子と

幼児はまだ生えそろわない小粒な歯をみせ、おれに向かって鳥を追い駆けて、ずつこけたと、パントマイムで伝えて顎をゆるめる。

リスになりそこねた子猫を連れ、くすくす笑う、首をまげる。ちび、やわらか、ウサギの帽子、ひくひくした唇のふるえ、笑窪……、何となくこんな平凡な幼児がここにいる危うさから、おれは身を避けたくなる。おまえが消えていなくなるのを見たくないから……。

「おれは、街に出る近道を探しているんだよ。おまえが知っているなんて思っていないさ。どこかがまだ崩れているゴウゴウという響きが聞こえてくるだろう？　なんて脅かすんだろう。おれが、あの音に怯えているわけではないさ、大人は慌てて逃げようなんて恥ずべきことはしないよ、逃げても助からない戦いを見てきたからね」

おれの股あたりを無心に幼児は見上げている。おまえがもつと固かったら鞭で跳ね飛ばして通り過ぎるところだ。

幼児は動物語で、前をいく猫と話を通じ、人工道だったことのありそうな平坦な道をいく、おれには、その言葉が、変によく理解できている、おれは、まだ少年のように探検好きなのだ。

「おまえが、ひとりじゃ怖いというなら、怖さを克服する助けをしてあげよう、不機嫌なつむじ曲がり嫌だからな」

その実、幼児のお恵みを受けるように、洞窟から街に出る道を動物の勘に導いて貰うつもりなのだ。猫が歩き止まり蹲ってしまう。

幼児はそれをふんわり抱き上げ、愛撫しながら毛並みに磨きをかける、たしか昔、おれも陽だまりで、よく、そうやっていたな。三毛猫は首の白い毛並みを撫でてもらい、甘やかされて、いまがこの世の最後だとしても、不貞寝をやめる気がないと言う様子で、幼児の膝で温もっている。おれはその

従者であるかのように、そばに待機している。

岩と岩の間が狭まっていきながら、なかなか一つにならない地下道は、ところどころにシュークリーム状の岩がある、岩は岩の時間体系のなかで少しずつ動いているのだろうが、おれはおれの時間の刻みが心もとない。

岩を崩そうだなんて……岩を崩したのは敵のやったことに違いない、何時だって戦争の始めで終わりで途中なのさ。おれは息を抜いて小脇に抱えてきた葡萄酒を飲む。なにか逆戻りしているように喉で葡萄酒がためらっている。ここで、おれは命令を待つ従者のように優柔不断なのだ。幼児はかくれんぼでもするように姿をくらし、おれは誰にも頼らずに、一人で洞穴の迷路を脱け出さなければならぬ。おれの足の下に灰色と栗色の毛並みは何千万本の影を作って波打っている。

「おい、耳をぴんと立てろよ、この轟きは戦いが終わったにしては、変ではないか……。これは毛皮の山。もしも、おまえの気化した汗の一滴でも、おれが吸い込んでいたら、償いとして、この石の窪みに葡萄酒を注いであげてもいいんだよ」

毛皮だけ残して化石になった？ 響きのありようによっては上から剥げ落ちて来そうな猫や幼児の化石が見える。おれは何時でも飛び退き、身を護る構えで歩く。登ったり下ったり、闇に突っ込んで、行き悩み、一段上の岩の道に這い登る。堂々と力強く歩いても足を伸ばしても、足を踏み違えても無

事でないながら、ふいに両目が消え失せてしまうのだ。

砂と埃が大きな柱になって回りながら去ると、再びおれは自分の両目を発見したように驚いてしま
う。

房になっていた魚類の卵がいちどきに孵化したように、目の前一杯に子供達が溢れる。

その数は、とても数え切れない。片側は白い帽子の子供が群れ、それを圧する影の子供の群が動く。
右に左に、上に下に、おれは立ちすくんでいる。

さっきの幼児を呼んでみる、呼び名はムーンかムーか思い出せない。おれは声門の回りを塩辛くし、
声を出して数え、気が遠くなる、これがこの世にあつた普通の人種だろうか？

突拍子もない生命をもって、こんなところで動き、形を変えながら、おれに向かって押し寄せてく
る。わめき、怯え、泣いている。

おれも泣いている、何故か知らない。胸が掻き毟られる。

あの細菌戦争がこの子らを産んだのか？ 子供たちはおれに向かって幼い小さな手をひらひらさせる。
どうしたらいいのか？ どうしたいのか？

「泣くのはやめろ！」

この大地の辺境に、どうして生きていることが出来たんだ！ 生まれることが出来たんだよ！ 親はどうした？ 存在しないのか？ 捨てられたか？ 捨てたか？

誰がおまえたちを育てているんだ、誰に護られて生きてきたんだ？ おれにどうしてもらいたいのか、それを教えてくれ！

戦慄が咆哮が突風のように過ぎ、子供の放つ甘い香りが鼻をくすぐる。

暫くの間、網膜に引っかけた増殖するものを瞬きひとつで、おれの意識を正常に保てる程度の量に減少させる。おれが大人しく眼を閉じることで、子供たちの半数が移動していき、残ったものが黒から白に変色する。みんな白い帽子ではなく白髪だったのだ。小さいのに、何故？ 老人みたいに？ その歳で、年老いたというのか？ 年老いて生まれてきたのか？

影の子供がおれのたるんでいるポケットに頭を突っ込み、入りかねない様子をする。

「カンガル―みたいなのはご免だぜ！」

腹の中から齧られたりしたら、たまらない。よくみれば、突っ込んでいるわけではなく、頭なしなのだ。

「こりゃあ、なにもの？ 服を上から被っているのかい？ こっちだって負けちゃいないぞ！」

子供たちはそれぞれに表情を持っていて小さな手でおれの体を叩く、あらゆる手は震え、狂ったよ

うに回りはじめる。

「可愛いじゃないか！　そういうのもいいな、役に立たない頭なんてない方がましさ！」

子供たちが声をあげる。

「そうか、わかるか。きつと飛びつきり、いい考えが生まれてくるさ！」

子供たちは躍り上がり、おれの手次々ハイタッチする。

何か、音のようなものが、聞こえたような気がする。草笛みたいな？

危いなら方向転換する方法を子供たちは本能的に習得しているのか、てんでばらばらのくせに、支え合う連帯の紐を持っていて、おれに衝撃だけを残し、急に鎖状に連なり、ただの通りすがりの子供群になってしまふ。

その後ろを老人たちが歩いていく、背骨も曲がらずに、生き生きとして……。老人が生きていたのか？　なら、おれのおふくろも生きているかもしれない、おれに歓喜がくる。

月日を上手に数えることなど、誰にもできないのだから……。

頭を打たれた後のような眩しさがくる。大きな雨傘が二つ傾いて、おれの行く手をふさぎ、外界をみせないが、雨が降っているわけではなく、明るい光があるのだ。低い声の女が誰かに話しているのが聞こえて来る。

「子供のはじまりは一見同じに見える一つの細胞に過ぎなかったんだ。そこから増殖してひとりの人間の形にまで育ったからといって……、困るなあ……、ヤットコ型の染色体は肉眼で不可視のものなんだから」

ってその人は言ったわ。とんでもないことに挑戦させられていると思うんでしょねえ、未婚の父探し。贖者を捉まされたりしたら大変じゃないかとも思うんでしょ、子供をあとで取り替えるなんてまっぴらだと誰もが言うのよ、とわたしは言ったわ。

「細胞のなかにヤットコ型の染色体が総勢四十六あるとして、その二分の一の二十三がぼくに関係があると見えているなら承認しても構わないけれども……、しかし、このなかの一人を勘だけで僕の子供として承認するというのはユーモラスすぎるよ」

と、その人はいったわ。五十人いるなかから、これと思う子の目の中に、目のない子には耳のなか

に、耳も目もない子には心臓のなかに、太陽の光をねじ込んで観察してみることもよ。あなたの昔の美しさをぬくぬくと着込んでいるわ。わたしは言ったの。

「これらの子供たちの全部が僕をだしにして生きていくのかい？ どうしようか、物さしを、この子らにあてて、首を叩いたり、肩をたたいたり、ずらしたり、厳密そうに測ってみたらいいのかなか」

と、その人はいったの。

「だけど目盛りを正確に読んだとしたところで何になる、読む気は全くないのだから、もしかしたら、僕のでなく、あいつの……克のではないか？ 私情にまどわされてニセモノを掴んではつまらんな…

…どうにか、ほぼ、これではないかと言うところだからな」

とその人は言ったわ。

あのころ、わたしは、身体のなかに爆発し、飛翔する気配や、こぶしを握り締めて壁を打つ音を聞いた覚えがあるわ。子宮がもみくちやになり、中から切りきざまれたと思ったことも、熱で燃えたり破裂したと思ったことも、子宮のなかに異様な振り子の音を聞いたと思ったこともあったわ。誰かが奇妙な名を呼んでいるなと思ったことも。はじめは、わたしの名ではなかったけれど、次第にわたしの名に変わったわ、それはアン。わたしは、恐らく自分が生まれるのだと錯覚していたのね、自分が

自分の限界ではないと思いたかったの。だけどそのまえに、わたしの叫び声で裂け始めていた屋根が口をあげて崩壊したのよ、洪水のようにわたしの血液が押し寄せ、釘が膝に打ち込まれているなど理解していたわ。あれで女は死に絶えたのよ。男たちは安心したように逃げ支度をはじめたわ。わたしは彼等に行かないで！ 行かないで！ と言って、誰にでも縋りついたの。克でなくとも誰でもいい、誰でもいいから残って欲しいと、わたしは抱きついて引き止めたけれど、気がつくとも木の幹にすがって叫んでいたわ。

「彼等はみんな、きみに親密になったというのかい？」

その人がいったわ。誰ひとりわたしに、ついてくるようにとは言わなかった、わたしは身体が重くだるくて、どんな動作をするのも難儀だったのよ。その人に向かって子供の一人は、

「め、め、め！」

気味の悪い声でわめき立て、浴びせかけることの出来る最も下劣な罵言になっていたわ。爪は透き通って、柔らかいけれど、とがっていて搔き、黄色になった皮膚の下から、鮮血を滲ませていたのよ。わたしはその人に文句を言ったわ、なんなら真贋なんか気にしないでいい、選ぶことに気をとられて、記憶の奴隷になっては駄目、その子たちは始めから名前を持たないのだから……。現在や未来は選択できないのつぴきならぬものとして襲ってくるけど、あなたの過去は選択できるのだという意味に

おいて。あなたの気に入った子をみつければそれによって近似したあなたの半生を取り戻せるかも知れないと言ったわ。

「頭がよくない弱い保護者が一人殖えるとか何かいいことがあるのかな？」

その人が言うと、そこにいた子供たちはいつせいにアクビをしたわ、

「爽やかな気分がぼくの方に流れてくるなあ」

だって。

その男は笛でも吹こうかと言ったの、

「きつと、一人だけついてくるぜ、ついてくるのがそれに違いないさ、僕の精子は楽譜と同じオタマジャクシ型だったろうからな」

なかには先天的に耳の聞こえない子も少なくないのに、みんな、音をむさぼるように、首をのぼしたわ。それから、その人の袖にしがみつこうとしたのもいたわ。笛ではなく、ただの口笛だったけれど、なかなか素敵な音だったし、ちょうど小さな歩幅に合うように出来ていたのね。その男は

「これはこれは……」

と言ったわ

「こう多くつちや、扱いかねたとき、耳をもぎとったり、喉を縫いくるんだりする手数が大変じゃな

いか」

大変だわと……わたしも言ってしまったの、お話ではなくて、本当のことよ、子供たちはその後
に続いて行ってしまったのよ……。

話し声が聞こえなくなって、おれの前にある黒い二つの傘が突然消えてしまう。おれの前方は崖らしく、ひくいとところに黒い水面がみえ、二つの傘は舞いながら跳びこんでいくのだ、いま心中した男女から少し遅れをとった脱け殻のように……。おれは、いま跳び込む音を聞いたかどうか考える。克と言う名を何度か耳にしたが、話していた女は誰だったのだろう、何故、おれは傘のこちら側に佇んでそれを聞いているのだろう。

考えるが、おれの脳の中で換気扇をフル回転し、思い出を追い払っているようで落ち着かないのだ。おれは辻褄の合う話を作り出そうとしながら、カンニングをした方が手取り早いと信じているあわて者の学生のように首をきよろきよろ回し、首の下にもう一つの首を生やして崖の下に浮いている二つの傘を見、黒い底に沈む逆さの傘をみる。おれは好奇心のあまり、首の下に首をもう一つ生やしもっと崖の下に頭を突き出し、ついに跳びこんでしまう。

水底で身体を建て直して、派手にしぶきを上げると、重いせいか軽いせいか分からないけれども、水中を頭蓋骨が固まって流れているところがある。大穴のあいた骨のボールなのに沈まないで浮いている宙ぶらりん、沈みきりもしない。

水が海から山に向かって逆流もするのだろうか。流水の巻き上がるころでは、頭蓋骨が岩にキョトンと座り込んでいたりするから、意外に目につくのだ。

おれは泳ぎながら拾った頭蓋骨を一つ一つ収獲物のように、紐に通していく、昔ならその恐ろしさにぞっとしたかもしれないが、それが現実であってみれば、なんの迫力もない。水は墓として立派なものだから、土に移してやる必要はない、こんなものをおかしくすることが値打ちのあることかどうか、骨は石と同じで別に当惑させられたり困らせられたりするものではない……、そこにある一つの頭蓋に、ちぎれて付着し凍りついた布は、氷で布目をおし開らかれて透き通るように見えるが、スリを働いていた女のものに違いない。

おれは、うっかりしたふりをして、その頭蓋につまずいてみる、女は深いはずの眼窩を氷で固めて凝然としている。

真つ直ぐを見、白い忘我の顔で、彼女ではないかのように、ゆっくりと仰向けになっている。骨と氷の新しい世紀が来ているのだろうか。この女はサレコウベと言うより氷塊になってひとりで岩の

上を動きだしていく。氷河の流れの一部であるかのように、場所を変えては揺らいでいる。おれに寄り添ったかと思うとすぐに離れ、また近寄る。あたかもそこにいないかのようにおとなしく信頼しきった様子で、他のものとは違う。

頭蓋らは蘇生できるという望みを、いちどきに払い落とし、観念しているようだが、恐ろしくはないよ、未来永劫、それ以上何一つなくなるといふことはないんだ、みんなのような死者から、誰も盗み取ろうなんて思わないものだよ。だけど、きみだけは、あらためて男を選ぶことをしたがっているようじゃないか？ 隣にある頭蓋の眼窩に張っている水を姿見にしてみてごらんよ、もう、どう点検してみても、二つの頬の曲線が飛び跳ねたりはしないのだから……。

油をこぼしたような虹色模様が彼女の凍った厳しい顎に見える。目を食えるようじゃないか。しかし、ざわざわと、その頭にでこぼこを作って、なめているのは日ざしの方だぜ。

氷がゆるみ、しずくが滑り始め、眼をむき、もつとむき、むいた目は間もなく暗い穴である眼そのもののなかに、溺れて吞まれて消えてしまおうだろう。

空がじつと浮かんでいる水のレンズに、溢れ広がるままに涙が振動しはじめる。

気づくと、おれも痛いほどの震えで体を硬くしている。ここでは確かに凍りもし融けてもいる自然があり、太陽は本物の太陽で氷は本物の氷なのだ。地底なんかであるものか。しかし、氷がゆるゆる

融けたら骨格だけが氷のつくった泥細工だったかのように、ぶよぶよのアイスクリーム泥になったりするかもしれない、怪しげなものだな。

おれはどんな事態にもこうやって足先の軽い動作で、とっさに対処できるように用意しているが、この動作はときとして気まぐれになりかねない。これがあの女の頭蓋だとして、その向こうにあるのは傘と水中に飛び込んだ女の頭蓋かもしれない。時間に合わないにしても過去はみんな雨傘の向こうだ。

誰もが一度に頭蓋の五コや十コ、何時だって踏み潰して歩いてきたものだ。こんなもの、フットボールの球のように、おれは蹴ってしまわないとも限らない。

こうやって辛抱強くないことが確実に出会ったことにはならず、すれ違うことにしかならないから、それらしい頭蓋の一つ二つを蹴る。

「さあ、上に行ってお休み！」

それはボールのようにはずみ、ひたいから顎骨まで肌のように白く輝かせ、空を泳ぎまわる。時が透明に流れているのだろう、舌や脳のへばりついたおれの現在と違って、くったくのない別の時間がある。

面倒が起こらないためには、ああなるのも、いいな、おれは斜視になって見上げる。丸いボールの

どこから手が出て、融けて落ちる水滴を拭いとってはいはしないか？ どちらに行ったか見えない、空は自由で行ける方向は全部なのだから……、遙か遠くへいったのか、崩れてホコリになって霧散してしまったのか、そのあたりの見極めがつかない。

「おれの見えない何処かで、乳房のように輝いてサレコウベが空を飛んでいるってのかい！」

何処かでエロっぽい笑い声が聞こえ、おれは頭に浮かぶ卑猥な言葉を混じえて、なにかもしやべり散らしてみる。

もつと融けたら昔の香料の混じった水が、雨になって降るかもしれない。それがサンのものなら、おれのぼろぼろの思い出が蘇ってくるかもしれない。

「きみたち、そうやって宙で香水の波乗りをしていてくれよ」

いつも、どこにも、闘いがあり、人間撲滅のために戦っていたな。欲望のために、公害を撒き散らして、自然を汚しまくって平気の兵座だった。それだけではないさ、子供から大人までいじめまくっていたじゃないか。信念の為だと身内をまき添いにして、次々、憑かれたように自爆しまくっていてもいいな。

それだもの、もう、どうしようもない骨だけであったとしても、標的にして撃ってくるのだ。おれの言ったことがまるで合図だったみたいに、降ってくる雨、それは香水ではなく血の匂い、闘いは血

のない骨からさえ血をこぼすのだ。おれもまた標的になり、つぶてをうけて倒れつつある。誇りと言う明快なものを失ったおれのような男は、何としてもこれ以上破壊しようもない瓦礫と同じだ。攻撃されても大したことはない、敵のうぬぼれきった微笑と同じものを、おれは笑うことができるのだ。

頭蓋は姿を現し、血ではなく、ガラス欠けのような白い息を口からこぼしながら落ちてくる。

その下顎骨は上とペアになることを止めて、別のペアを組むために岩の上ををステップしてすつ飛ぶ。一体きみは誰だというんだ、沢山言いたいことがあるみたいな様子だったのに、傘の向こうで話していたことで終わりのかな？ 下顎がなくてはもう誰ともキスさえ出来なくなるじゃないか。

「言いたいことを言わなければよかったんだ。言うのなら、おれに向かって顎をはずすほど大口を開けてわめきたてろ！」

結局は同じことになったに違いない。ここまで何かの押し寄せる響きがくる、おれは何も聞きたくないから、耳をコップのなかの光のような氷に閉じ込めている。

そのうちおれもこんな骨を集めてコンクリートに混ぜるだろう。出来上がったコンクリートの上を大音響の車が走る、平和のコンクリートか、やつらとコンクリートのぬかるみをこしらえるのだ。

おれは顎なしの頭蓋骨がぽとぽと、水を滴り落とすのを見て眼をはささない。おれは傲慢でいたから、手近なものしか見ないで、どうしようもなく幼稚になっていくところから敵に対抗すること

を始めようと思う。

新しい闘いは、この半端な頭蓋から始まりそうだ。

雨が降り、熱が加わり、静かにみずみずしくなっていくだろう。おれは断念しないで見つめつけ
る。そうするなんて、それを待っているなんて、茶番にすぎないけれども、これを見つめるという慈
善を女に施す残酷をやってみせること、それは新しい敵を育てることもあるが、この隙におれが敵
以上に強くなること！

30 二人の息子

みると岩の間を利用したレストハウスがあつて、男が二人、子供が二三人に女が二人いる。

光の反射や氷でできた像ではない。男の一人は子供たちに口笛だけの合図をおくり、ずっと下の黒
い水に向かつて釣竿をふる、浮は生きもののように奈落で立ち上がる、長い間見たこともなかった釣

りに、おれは熱中し、釣れもしないうちに陽気に拍手してしまう。

感動が外面化を欲求し、おれは一人で騒々しく楽しんで、その欲求を充たしている。

「すばらしいな、むかし映画のシーンに、こんなところで網にかかったばかりの、尾で跳ねてぴんぴんきらきらしている魚を、食べたいものを勝手に選ばせるやかたで焼いて食わせるところがありましたよ。ここでは、どんな魚が釣れるんですか？ そうだな、このご時世では故人の生まれ変わりと
言うやつばかりでしょうね。魚の顔付きだつて変わったでしょう！」

「故人だつて？ 何日前の故人を釣ってもらいたいの？ 一年前のがいいのかい？ 十年前のがいいのかい？ 思い出は努力だけで甦るものではないからな、おまえの目的のために、おれたちは骨惜しみしないさ！」

ここでは風も響きもやわらいでいるが、黒い水のなかでは説明しがたい靈気みたいなものが立ちのぼっている、過去から遡ってくる魚が光にぶつかって沈み、浮き上がり、口をあけているだろうが……釣れない。

一人の女が釣りをしている男の肩すれすれに立ち、一方の手で子供を抱き寄せ、白い帽子の上から叩いており、子供は叩かれる度に眼を8の字にしぼる、白い帽子？……よく見ると帽子ではなく白髪だ、またも白髪の子がいる……。おれは眼をそらす。どうなってしまったのだ。

見るともなくもう一人の子供を眼で探ってみる、ああ、恐る恐るだ。頭が見えないが、子供に眼をとめなかつたふりをして対岸をみつめる。……たしかに見えているのが地上であるのかどうか。対岸の中空に白い山がはっきりと輪郭を現している。

「三角のものが見えるが、あれはなんででしょうか？」

もうひとりの女が向こうの隅からさっきの子供二人を羽の下に保護する鶏のかたちで、抱え込み、いきなりヒステリックな叫びをあげる。

「あのひとは、わからないんだわ、わたしがわからないのよ！」

釣っている男の傍の女は小声でそれを、なだめ、叫ぶ女の髪を撫で付けながら、こっちに話かけてくる。

「このあたりに、いらした理由は？」

「理由と言って、故郷に帰る途中でちよつと迷い込んでしまっただけですよ」

「ふるさと？ なよなよした音感の古風な言葉ですわ……」

二人の女と、二人の男をおれは苦い嫉妬で見ているような、故意の忘却のなかに閉じ込めているような、妙な気持ちを持ち始めている。叫んだ女は悲しそうに濡れた顔でこちらに近づくが、近づくとつれて激しく息づき、おれに自分を知ること強いるが、おれは丁度明るさの中に漂っている真空部分がぼかぼかと近づいてくるほどにしか感じようとしなない。

「あ、あなたはそんな身構え方をするのね！」

「釣れたよ！ 克が釣れた、なんの崇高さもなしに死者になっっているなんて情けないな！」

男が口にする克の名が耳に飛び込む。女はおれの手をとって自分の頬に押し付け、おれの愛情の分量を手の温度によって感じようとしている。

この女がサンか、サンであるはずはない、サンは、おれのなかで、もつと若く美しい。思い出のなかで若く美化されつづけて来たにしても、おれはサンの面影をこの女に認めない。二三歳の白髪と……もうひとり……女に抱えられていて、はっきり認められないのが……首のない子、一歳か三歳か見当もつかない顔なしの……サンにこんな妙な子供が二人もいては、たまったものではない。白髪の子は眼を8の字型にしぼっては脅える小鹿のように丸くする、こんな繰り返しでまばたきをしているのだ。

「なんでこんなに生まれついたんだ？ 胚芽のままでもいいものを……、そんな目玉の動きは卵のなかで沢山なんだよ」

首のない方の子供はまだふにやふにやで、何かが生えかねない首のへこみを襟から覗かせ、湿った湯気のある指で、母親のスカートと、驚いたことに、おれのズボンをしっかりと掴んでいる。

靄が雲のように動き始め、対岸に白いピラミッド形のものがはっきりと立体感を持って姿をみせる。一つだったり、重なったりして……。

おれの信じている地図が怪しくなっていて、いくら体の細胞の全部が三角形に波立っても、おれにはそれを鎮めるすべがない。

あの響きは流れる音だけでなく、流れが停滞しているために死者という生きものが骨髓を嚙んで、チューインガムにして暇つぶしをしている音だ。本当はみんな下水を素通りして消える運命にあり、現実の歴史の表面に出ることなしに、もうことが済んだ筈だとわかっている。

戦塵がふえて、その後始末として、山に向かって流れる下水道ができたらしい、普通に流していたのでは海が溢れてしまうだろうから、方向を変えて山に向かつての流れをつくったのに違いない。その到達点はここ？ 下水道を伝って、色々なものが流されてくる、このあいだは傘が二本流れていた。まだまだ沢山ひしめいている死体やそれに近いものがあるだろう、そんなものを取り出してみてもきりがない、誰も死者を甦らせる気などないのだ。寒いさっきまで初夏のように汗ばんでいたのに、三十分もたたないうちに厳冬の寒さがきている。

この異常気象にみんなすくんで動かなくなつて、肩をすぼめ、空を見て息をひそめる。広もサンも、戸惑いの目を上に向けて立っている。五十メートルほど上にまばゆい輝線があり、眼をとめると、それは白。羽毛が舞うように降ってくる雪が中空に止まって下に落ちようともしない。みるみる降り積もる。かぼそいものがとんでもなく大量の雪をしなやかに支えるように、中空に降り積もる雪は太々とした横縞になる。

あつけらかんとした空間であるはずのそこに、一体なにが起こったのか眼をこらしても見えず、想像もつかない。死んだ鳥か、草の種の小さな羽毛が空を飛びつづけ、偶然に絡み合い連なって浮いて、雪にとらえられて凍りついたにしても、浮きつづけていることが不思議だ。雪はどんどん空中に降り積もる。雪の上の窪地に白い鳥が巣をつくっていないか。

地面には全く積もらずに、そこだけはもう雪が真上の空までとどくほどに。海の向こうではなく空の上に出現した巨大な白い大陸だ。その下端は地上から五十メートルほどに高さを保ち、下降も上昇もしない。

「地下の世界が大きくなりすぎて、地上が地の中心部と離れすぎ、中途半端な引力を持つことになったとでもいうのでしょうか、地球が変形しつづけて、ついになにかが起こりはじめたのですね」

寒い、サンは子供を両脇に引き寄せる。音を濾過したあとのように静かな地面に荒い青い蔭が広がっている。

寒い、このぶんではこの世界も、とことんまでは腐らずにすみそうだが……、新しい事態がスピードをあげて襲ってきているのに、

「ちよっと待ってくれ、そのまま置いてくれ！」

とうろたえている広は、白い大陸の下、または上を少し足を引きずって駆け回っているが、おれは

立っているだけで動く気にはなれない。男が十人ほど屠殺場の陰から飛び出してくる、一人は棒を持って振り回すが雪に届くには遥かに短すぎる。ひとりは槍投げの要領で棒を投げるが、やはりまだ下に向く地球の引力があつて、何の不思議もなく下に落ちる。寒さは下に流れるものだから、叩き落したい気持ちもわかるのだが……。

一切の科学がおれたちから剥げ落ちていくのだ。さっきまではまだ光を通して明るかった雪が、もう量りきれない厚みになっている。落ちてきたら雪で圧死してしまうだろう。とりあえずこの雪の大陸の範囲から飛び退いていくことだが……雪屁から雪屁が生えていく。

「爆弾を浴びながら、その原因など問い詰めることさえなしに素直になつていたんじゃなかったか？ 雪かもしれないものの下になることくらい何でもないさ」

「そうだね、大地だけが人間たちの支点ではないもの、大地に属するかどうか知らないけど、あれがぼくたちの新しい支点になるかもしれない」

北だ、北が戻っていたのだ。

北は上にあるものに望みをつないでいるが、もう黒く、地平に近い部分だけが、わずかに明るい。こんなふうに窒息させられたことは何度となくあるのだ。一度は死んだおれにとって、雪の重みを拒否することは肉体に対する偽善であると言う気がする。サンは雪の重みを支える柱のように背骨を伸ばし、二人の子供をかかえ、三人一緒の震源になっている。

一段と寒さが強まり、みんな一挙に不動化してしまう。しかめっつら。ガラス玉を呑んだと言う顔。凍結。頭なしの息子の首のへこみが氷の華をつくっている。体の芯がまだくすぐったい奇妙な不動だが、すぐ芯までの完璧な凍結がくる。

見えるあらゆる運動は停止している、ものが増加したり減少したり、人や物が動いたり止まったりする混沌は消えてしまう。停止しているものが生命でないと断定できない凍結。人と物との定義が次第にぼやけてきていた過程を思い出さなければ……、以前からそのふしはあった。不動のものたちを操り、動物として目まぐるしいはずらをしていたのは誰だ。

凍結がきんきんと鳴る青みを帯びた薄暗さのなか、意外に遠くまで見えて、痩せている灰色の人々に眼がとまる。いつのまにこんなに……、サン！ 再会して以来おれがいつも捉え損ねていた彼女の表情がある。動かないけれど……動かないから……わかる。いま、彼女が息の根を止めたと言つて騒いだり悲しんだりできる世の中にはないが、彼女もおれも凝固してここにあるということ、これ以上の不幸はお断りという、おれにとって、もっけの幸いということかもしれない。凝固してもサンのために失わずにいる思いがいくらでもある。入試の日のとんでもないお人よし加減、河原のボートのなかから現れた月見草の魔術。くも糸のウエディングドレス。童子さまから取り戻した日の喜び。

まだ少しは残る光の干渉縞が等高線みたいに、みんなの体に巻きついてみえる。スライスしてみた

ら何枚の肉になるか見積もられているようだ。スライスされる寸前、風が吹けば痩せたものたちは凧のように上昇するかもしれない、液体窒素に突っ込まれたように刃が触れば粉になって飛び散るだろう。

雪は地球の外側にもう一つの雪の地表をつくる、街は見えない。冬眠の寝入りばなは不老不死のホルモンがあふれ出るのかもしれない。貴重なひととき全身に回る最後の胸のときめきを大切にすることだ。ここで終わりでも世界観を変えて、人生をもう一度要求するときがきそうだから。

おやすみ、おれはせっかく体が固まったこの機会に変型し易いおれの魂を一応かつちり固めてみよう。それで絶え間なく続く危険も、不安も、上手に無傷で楽しむことができるだろう。

左の方向から残り少ない空間を横切つて、レールがするする滑り出してくる。人は冷凍のまま立ち上がり、動物は脚をあげて逆立ちをする。影絵になって、ここにいたもの全部よりも、もっともっと多くの者が……、捕虜の列のように並んで、レールに吊る下がり、視界の右方の巨大な冷凍庫に引き込まれていく。誰がレールに宙吊りにしているのだろうか、自然が事業を乗っ取ったのか？

四つ足を上にあげて吊るされた動物の間を、変に体を長く伸ばしていくサンをすでに五人も見えてい

る。影絵で見る彼女をさがす、もつと決定的な決め手になる特徴を持った彼女を探し、ついでに広と北とノブをそこにみつける。そしてまた突如として見ている、おれもその中の一人であることを知らなければならぬと自分に忠告するのだ。

みんなは生きていると思ひ込んでいるが、実はもう死んでいるのではないか。おれはちゃんと気を取り直す、

「子供たちは？」

サンが凍結したまましっかりと抱きしめていたのに、頭のない子と頭の白い子が浮き上がり、手の届かない上だ。本当は気を取り直す術をおれは知らない。連れ去られてしまわないうちに上に向かって働きかけ、レールの動きを止めなければとあせるのだ。しかし冷凍庫は、地上のものを吸い込み、

雪の大陸をつなぎとめて、もう、みごとに青白い輝きをしている。

おれも皆も架空の人物や、この世から存在を消してしまう夢魔どもではない。もう検印を受け、目録に載せられ、番号をふられ、行くべき位置を決められていて運ばれている。誰もかも、動いていたもの、流れていたものはみんな、行方知れずになつてしまうことさえできなくなる。カッチリと凍り

ついた権威をもつて、すぐ不動の位置に確実に保管されてしまうだろう。

「もしかしたら白くて平らで広いところ、そこは母さんの生まれ故郷でおれの住んだ町なのではありませんか？ 母さん、死んだからといって遠慮はいりませんよ、出てきてください」

この寒さのなか、おれを突き抜けていく熱もあって、おれは氷をとかし、白い大陸に思い出を置くとする。

「寒い朝、窓ガラスに羽型や花型や葉型の結晶が深い彫刻になっていたでしょう、そんな日には凍っていて、どこまでもどこまでも、小川も沼も、足跡さえ残さず魔法使いになって越えていきましたね」
いま、どつしりとした量感をもって降り積もる雪は、おれの真上に降り積もるから、それを見るためにおれは仰向けに倒れている。

「おまえの声がよく聞こえませんかよ、この電話のすぐそばを妨害する超高压電流みたいなものが流れているのかもしれないね。克、なにか拍手みたいな、声でない音が聞こえます。まさかこんな時にわたしとおまえの話を盗み聞きしている者がいるんじゃないでしょうね。……おまえは、いま、誕生しますよ、以前の誕生とは違い、お母さんがおまえの傍らにいてあげられませんか……」

見えぬ受話器のなかから伝わってくる声は確かにおふくろの声だ。自分の現実というものが自分に対してこんなにも説明しにくい、伝達不能なものであったかどうか？ おふくろが生きていて通話しているのか、あの世との交信が可能になったのか。

「夢のなかの出来事じゃあるまいし、今ごろ誕生するなどと言う立派な曲芸は、おれにはできませんよ、なにしろ、思い出というものをもっているのですから」

「こんなに降り積もる雪が白いの、裏返しされた昆虫が白く柔らかい腹を上に向けてもがいているみたいに、世界が裏返しになって降参したということでしょう。世界の魂と自任する魂たちは、世界を捨てていってしまったよ、その後ろ姿を確かに見送りましたもの」

「どこへ？」

「世界は痩せてしまったけど、死者を載せて死重で重くて腹ばいに直すだけでも大変ですって！」 おふくろと誰かの声が交錯し、突然暗闇が来ている。おれの周囲を塞いでいるのは凍死寸前の人間か枯れ木のようなものだ。

「どうしてなのか知らなくてかまいませんよ、おまえが生者として新しく誕生し直すのは今なので、分からなかったら頬をつねって御覧なさい。おまえはゼリーの表面のように震えているでしょう、今からすべてが始まるのですよ、おまえは何者かになって現れる。こわがると、一足先に生まれたお前の息子に笑われますよ。恥ずかしがらずに元気に産声をあげることです」

生まれたというべきかおれは少しづつ闇を明るく見ることができている、ここは四角錐、真中が吹き抜けになった劇場のような建物の中で、かなり高い位置におれはいる。足許を雪解けの水が流れている。おれは意気沮喪しそうだ。

いくらかでも凍っていて歩けるうちに早く、この左足のつま先で、そのつま先のとんがった影を一突きして歩き始める必要がある。いつかの始まりのときと同じように。

「克、震える必要はありませんよ、ともすると世界は始まらない前とそれほど変わっていないのかも知れないのです。おまえは難民のように足を引きずっていますね……、まあそうスピードを出して歩く必要は認めませんけれど……、もう少し生き生きと……」

受話器なしに聞こえ、こう話しているという奇妙な状態は、おれにとって現実であることに間違いないのだ。半分凍結し、半分ゆるみ流れている氷の上に人が数十人いる……、何故氷が融けだし人々がこんなにいるのか、あちこちに散らばっているのは何だ。おれに対して更に闇が溶ける。

四角錐の底辺にいる人たちが、頭をぐつとそらせ、咽喉から流出させているのは叫びか、祈りか、唄だろう、形容できないほどの透きとおるトリル、フルートの音。昇って来る金属的な響きが、おれの胸に伝わってくる。

胸で聞くというのは、おれに頭がないということではないかどうか。おれは当惑し下方にいる人々に視線を注ぎ、自分の意思を見ることのために集中してみる。眼があるなら、ここにいるということとは、とりも直さずこの足がおれから背いてここにいるということになる。招魂か、悪魔的祈願みたいなものだ。おれの胸のなかに何を入り込ませようとするとするのだ、これは……。

おれは記憶を他人任せにすることが多く、思考もまた軽はずみなものになっている。言ってしまう……、こんな風に妙なんだ……、何百匹もの魚の鳴き声がしなかったかとか、できるだけ早くおれを

屠殺してもらいたいとか……、白い建物に入り口があつて、たまるかとか……。おれは我慢できなくなつて、故意に記憶から落としたり、内気のあまりはにかんで言えなかつたりしたことを、言うためのウォーミングアップをはじめているらしいのだが、言うべきことが思いつかない。おれは今度はサンと長電話をしているらしい、おれの長電話に順番待ちをあきらめた者たちが、うつ向いて足許を見ながら帰っていく。しかし……おれは、はつとし、とんでもなく慌ててしまう、手に握っている受話器が白く太い脛骨に見えるから……。人の骨ではないか？　こんなものを磨き上げておれはどうしようというのだろうか。これが受話器代わりをしているのは、サンの遺骸のいちぶであることを意味してはいないだろうか？

電話はずつとはなれたところに位置を変えていて、スパイのトランシーバーのように秘密の膜の下。おれの指はサンの番号を覚えていないらしく、眼をすえても、もうボタンの上を押さえようとはしない。よく見れば冷たい電話をアブラ虫が食べており、腐敗の臭気がおれの指先に濃い。

冷凍が融けて新しく誕生したものであれば、すがすがしくありたいものだが、まるで血まみれで生まれでもしたように、臍の縮みみたいな電話線があつて、しかもそれがぶつ切り切られてしまつている、おれの誕生に立ち合った自分自身の手の魔術だ。誕生であるにもかかわらず、油断のならない解体が始まつているのだ。おれは混乱して、自分自身を敵として狙いつづける陰にこもつた、終わりのなさ

そんな怨みにとりつかれる。

「石ころを入れた缶が回転する、粗野な笑い、長いムチを振る音、メロデイにもならない音響はある効果をあげていく、老人たちは確実に生きているのだ。ここの底の方で。おれは誕生で顔を沸騰させて自分から出る蒸気にさらし、いくつかの穴を更に明確に黒く穿つことをしている。

子供がふたりいる、尿を弧に描いて生き生きと震わし、腕をからませ、共通の首輪にして陽気だ。そうではない、一人は首なしで一人はまだ溶け切れず白い頭のままだ。

「まだ白いじゃないか、世界は白い腹を上に向けたままだということだよ」

おれは白髪の子のうなじあたりに手をかける。

「頭の欠けた体は何倍も重いのだろうね、操作を誤ればおまえの頭もつぶれるよ」

子供たちはお互いの腕を反対の肩に移し替えたりしながら、むつまじげにいく、その乳臭い首のまわり、小さな身体、無頓着。

こんなにも弱いものを、誕生などというかたちで放り出すとはむごいことだ。時間の連続性をもっともつと、ばらばらにほぐしてしまえば、時の影から記憶が姿を見せるかもしれない。わかってきたら、お前たちの父親はおれだと、言っただけならいいのだが……。おれに対しても、お前たちに対しても、誕生というものは、たぶらかす性質を持つものだから、しっかりしなければいけない。

頭の欠けた子供の体を抱き上げ、そつと揺すり、何かの返事を聞こうとする、まさか、おれは、お

まえを新鮮な獲物だとおもっているわけではあるまいな。

おれの紫がかつた手の小指が気取つて外に曲がり、おれの顎を掴む子供の小指が相似に外に反り返っている。

「柔らかな体が解氷に傷つけられないようにするんだよ。誕生したとなれば、今まで以上に身を護る避難所が必要なものさ。重みはほどほどに他人に、もたせかけるんだ！」

おれはいま誕生したにしては過度に語りすぎ一言多すぎる。これは重い、おれは二人の子供を担がせられ、力を奪い取られている。

招魂の唄をうたう者たちは、楽しい騒ぎのあと、一瞬こと切れたというかたちで、へたり込んでいるが、指揮者の老人は確かに見覚えがある。たしか、カントさんとかいったな、何か？ 何か約束みたいなものがあつたような、気がかりがある。

出口に並んでいる者はおれの半分にもみたくないちびばかりだ、背に振られている整理番号が照合されている。ある者は番号のあることを、自分自身を見付け出したように喜び、ある者は自分が乗っ取られてしまつていると不満を爆発させる。しかし、喜びや不満を爆発させるやりかたも、息を切らせるのにも似てもう一つ明快でない。幼児も年老いた男女もいて、透き透つた皮膚と蒼白な眼をもつて進んでいくが、生き返つたものの、おぼろな水蒸気を踏む安堵のない行く手を予知して、時々立ち止まる。

おれに残っている思い出は、理性が正常に働いていることの成果だが、大部分の思い出は未だ閉じていて、いまに繋がらないのかもしれない。

「離れ離れにいるなんて苦しみだったわ、何時だってあなたのそばで死にたかった、思い出がわたしを生かしたり殺したりしていたわ。あなたは、アンを思い出せないの？」

「さあ、アンで誰れ？ なんならサンの思い出を盗ませてくれないか」

「わたしの思い出のなかのあなたを借用したいということね、借り着でわたしの愛を従わせることが出来ると思うの？」

「借用ではなく、いただきたいよ、きみの記憶のなかの、おれと、このおれが同一人物なら、本来の場所に返すことにはしらないか？」

彼らの行った治療で、おれの、子供と老人に絡む思い出が不鮮明になったため、周囲にはおれが、

ひどく不誠実な人間に見えているらしい。

「あなたも頭なしね、頭なしの息子は、あなたのものだと認めるのね！」

「そうかもしれないが……しかし……。まあいいさ、老いや無能を大切に育ててもらえば、飛び切り貴重なものが生まれて来るかもしれない！」

「頭なしのあの子とあなたを飼いならせということね、苦労してみるわ、わたしはまだ、あなたへの優しさを沢山抱いているのよ」

サンの磁石に引き付けられる甘さがきていて、おれはぎくしゃく、キスをし、揺り動かす、彼女は黒ずんだ顔にちらりと残る若さを見せて笑い出し、おれをつぎつぎ彼女の思い出のなかに導いていく。おれは固すぎる殻のなかに押し込められたように眠る、夢が階段を登っていく。

目覚めるとおれの肋骨がピクピク生きている。寄り添って何も言わず彼女の瞳をのぞく、ほの暗いが、おれの顔だけがその虹彩に小さく止まって動かない。

「あなたがわたしを遺棄したことを、許してあげます。わたしにもお返しのお悪をする喜びがのこっているから……。頭を押さえているのよ、あなたの思い出がまた逃げる。何を悟ってにげるのだろう、悪とやらは頭のせいではないかしら？」

彼女は間違っていた、おれは彼女を遺棄したことなど、一度だっていないのだから……。わかってい

ながら、サンは痛烈なことをいって平気だ。彼女はおれの顔を両手で挟み、身震いする。

「心を節約しているのね、あなたはわたしにとつて洞穴になつてしまったの？」

肉体から離脱する霊のようなものが、おれの溜息から洩れて、彼女の瞳の二ミリほどの、おれの小さな頭に吹き込んでいき、彼女の瞳を回転させ、その真つ直ぐ立てた首を折り曲げる。おれに臆病風が吹いてきて、

「やりきれないね、頭なしの子供というのは……。しかもそれがこんなに大勢だなんて？」

「偶然の足で踊るあの可憐さを認めないというの？ あなたはあの子たちを抱こうともしない。

あなたと瓜二つでありすぎるからでしょう！」

彼女はおれにすがりつき、すすり泣きはじめる、おれはためらいなく慰めをいう。

「あんな風に子供なのに、老人のように白髪で、生まれたてから頭なしで、それこそ品位あることだと認めるさ、清らかさは悲しいほど認めているんだ。認めるからこそ、おれはやりきれない」

魅惑的な性の遊戯をしながら、いまにも彼女を一つまみにして投げ出してしまふような危険を感じ続ける苦行を、おれはしているのだから。まして、あのやわらかい妖しい白い頭を振って、いやいやをしつづけながら後退していく、いたいけな子供と、さながらおれがハンマーを振り上げて、その子の眉間を打ち、出刃包丁で首を落としてしまったという感じの頭なしの子供に対して何乗かの恐怖を

感じるのだ。

おれは、すっぱい味の胸をもっている、もう二度と子供を抱き寄せはしない。近づかせもしない、決して。そのくせぬけぬけという。

「地上に天使がいつづけても矛盾はないものだろうか？」

「天に追放しろというの、あなたの子と認めないというの？」

おれは弱々しい微笑でごまかしながら彼女を蔽い、その耳たぶを噛む。幸いが確実に小粒に砕けていく。おれ自身の凶暴さにこんなとき、いまさら、おれが身震いしているのは解せないことだ。閉じているほの暗さが、一転、開かれた輝く明るさに変わるとき、どんな犯罪を青天白日のもとに晒す事態になるかもしれない不安に、おれは彼女から飛び退いてしまう。

彼女は唇の右隅を引き上げ、左半分の口だけ動かして横臥したままだ。

ムーンの泣き声が聞こえる。

「あれはリンに替わってムーンが泣いてあげているときの泣き声よ、あなた行つて見てきてほしい。リンの首のへこみと、ムーンの頬っぺにキスをひとつずつしてあげて頂戴、ふたり一緒にちよこちよこ足を動かして喜ぶでしょう」

「おれは嫌だ、嫌われている、白髪を筆取り取るだろうし、首なしを逆さ吊りにするだろうからな」

彼女がなぜ大きくあくびをしてみせるのかわからない。豊かに漂うあくび、遠い昔におれもした覚えのありそうな。

ドアを細目に開ける、鋭い光のある割れ目から隣室をみる。オパール色の空間がみえ、おれの眼にとりともめなく浮遊する子供たちの姿が、シャボン玉のように弾けては消える。

おれの心臓は全身を振り回しながら打っている。人がどんなに忙しく行き交っても、それは昔の残像、おれの正気に悪夢がごちゃまぜになったりはしない。おれはサンを残像のなかから見つけ出してしまう。

後ろからでもその顔を読み取るのに方法などいらなかった、単純明快、なにひとつマークなしに見つける。彼女は迷路のなかのぶらつき、長いこと彼女と手をつないでいる。ずっと前から知り合っていた暗号みたいなものがびったり手のひらのなかで照合されている。

「子供が行ってしまったの」とサンはいう。

「わたしには、なにもないの。悩みで胸を重くしていたこともないし、胎児など体のなかに抱え込んだことも、まして胎児に蹴られて死んだこともない。もしも、わたしを裂いて入っているものがあったら、それは眩暈、出て行ったものがあつたら、それも眩暈、いまのわたしのなかに隠れているもの

があるとすれば、それも。わたしはおびただしい数の眩暈の輪投げをして、わたし自身が空気の棒で串刺しにされて、身動きできなくなっているの」

「子供をどこに置いて来たって？」

おれのなかに怒りが溢れ出し、胸がしめつけられる。早く何とかしなければ……。

「子供は行ってしまった、子供のいたときでさえ夢のようで現実から遠かったの。眩暈が現実を変形させることもあるのね、だけど嘘じゃなく子供はもういない！」

彼女は口を開き、吸ったり吐いたり、あたかも匂いで異種の匂いをさぐりあてようとするかのようだ。

おれがどんなに力一杯抱きしめても抱いていると言う締めつけにはならない、軸木なしのマッチのようで、おれが焼死覚悟でなければ、彼女を炎にはしにくいのだ……。彼女はすでに気が遠く、ただ一つ原っぱに浮く鬼火のようなものだ。蒼ざめながら炎が踊る。

「急いであの空の雪のなかに連れて行って、早くしないとわたしは涙で命の火を消してしまいそうよ、まるでまばたきの数ほどに、わたしがあの子供たちを殺したことがあるみたいに涙が出てきそう。なにしろ、なにもしてやれないのだから。すぐに燃え尽きてしまうに違いなければ……」

彼女は、おれが自分のそばにいるべき正當な人物かどうかを見ている。しかし、おれは肩が固いべ

ツドを叩きつけるほどに生命が脈打っているというのに、眠った振りをしている、決して彼女に降参しないために。男女の吐く言葉など聞く気も吐く気もない、おれは何かを急がなければならぬ、それがなんであるのか迷いながら、誰もがそうであるように、取りも直さず死ぬことを急ぐことになる。殺したり、殺されたり、姿や言葉でひとを脅したり、脅されたりするのを止めるために。

彼女も眠ったふりをしている、目をつむついても瞬きをしたくなるし、口も動かさずにはいられなくなるだろう。

「ここは恐ろしい、何故と言うと、わたしに対して、あなたが質問しそうだから」
彼女の黒いシルエツトが長い爪をうごめかせたり、低い声を出したりし始める。

「夢なんかじゃなかった、断じて育っているはずだ、ただし一人だ！」

「あなたは関係ない筈だったのに、何故そんなことが気にかかるの？」

「きみが言ったからじゃないか、愛情は慌てて本当のことを暴露するところから始まるからね」

彼女はおれをよく見ないようにしている。いやに老いて見えるが、その老いから若返るためにこうやって自分であることを止めようとしているのか？ サンは決してくだかないが、子供の生まれたときの途方もないショックをひとりで乗り越え、風変わりな子供たちを育てるためにどんな苦勞をしたきたことか！ しかも、子供は二人だけではないのだ……。

彼女は耳の後ろの皮膚をひねりあげながら話始める。

「……はつきりしていることは、といつても、北さんや広の受け売りだけど。近いうちにわれわれが今度こそ絶滅する何事かが起こるのよ。将来の人間繁殖の使命を持つものは、あの雪のなかへ、見込み違いのものはすぐに捨てられる。食用になるものは屠殺場に行く、そうよ、確実に分類されている。分類なんて実にはいい加減なものなんだわ……雪のなかに再び隠されたあの人たちが将来の人間繁殖のために役立つとは、わたしにはとても思えない……絶対役立たないわ……。それなのに絶滅のときの用意が出来たと喜んでいる誰かがいるのよ。あの雪の大陸はもう高く上昇して全く見えない、わたしは、嫌なものを非常に上手に避けることができるの。もう長い間、上を見上げたこともないし、そ築後産鬮起こるもねわわだ、それは全くなんの意味ももっていない、思考を捨てた肉体は厚みを増すものだ。女を瞠目させるためのものとも違う笑い声、強いて言えば自分を脅すためのもの。彼女は頭をおれのいない方に傾け、おれから保護するために眼に片手を押しつける。

「待ちくたびれるのは嫌、もうわたしは待ちはしないわ！」

彼女は眼に当てた片手はずす。

「ここが地上なら他の天体の数々とかかわり合うはずね、果たして星がみえていますか？」

彼女はおれ以外に見えない者がいるのではないかと話しかけるが、帽子や衣類がかかっているクロ

ーゼットが開いているばかりだ。

「この国が破産しそうだということじゃないかしら、だから空調設備がうまくいかなくなり、雪を大量に製造することになった、それを冷凍庫に使うのに一定の場所につなぎとめて置こうとしたけれどそれさえできなくなったのよ。近いうちに彼等が、雪の大陸を保つことができなくなって、いままでもなく大掛かりな厄介払いをするだろうと言っているの。きつと計画をご破算にする。幸福が冬眠しているものたちを招き寄せるまで、眠らせておいたらいいと思っていたのに、不幸が後片付の役目を引き受けることになるというわけね。雪が崩れて、後片付の役目を引き受けるのは、この地上という不幸な事は知らないが、おれたちにとって奴等が、計画をご破算にするのは快いよ！」

「雪が落ちたら、耐え切れぬ空の光芒にとどめを刺されるわ」

彼女の言うことをおれは不思議に楽しんでいる。彼女は毛布にくるまり、聞き取れない言葉で何やら呟いてから、いくぶん冷ややかな視線を出す。

おれはオートバイに乗り、彼女を腰につかまらせて、疾走する。疾走する地上に対する角度は四十五度とも九十度とも理解できない上昇、どこかで磁場が狂っている感じだ。

おれは過ぎて後方に落ちる物体に手を振る。彼女はおれを大切な人だからといい。うしろからケープで包んでくれる、頭より下半身が変にびゅうびゅうしているが、過ぎる景色のなかで温んで来る、過ぎる。

おれは現在や未来を振り落としつづけて身軽になっていく。彼女がおれの体に巻きつけている腕から伝わってくる彼女の体温が上昇してくるのがわかる、こんなことは、今度こそ束の間のことだとわかっていく。スピードが上がって、おれをすり抜けていく横縞が、何故、進む方向と反対に後退していくのか、解明しようとおれは頭を痛めるのだ。

空気の断層で、水蒸気が生まれ、細かい水滴をつくり、容赦なくぶつかってくる。変わり易い天気、ケープのなかで風袋になる、ロケット旅行みたいじゃないか、もう一日を刻む明暗が消えてしまうほどの距離を行くようだ、彼女とつながる腰に力を込めて振り返ってみる。地上だろうか、絶え間なく

海に向かって水が流れている。流れが赤いじゃないか、あれはずっと下だ。眼と頬を火照らせて、おれ
れの眼は赤い脈で一杯になる。暗くなつて宇宙が膨張しつづける、長い間生物は死につづけていたの
だが、蘇生に似た死を生きることになった者の数は考え及ばないのかもしれない。しきりに、そよい
でいく眼に、見えてくるものだつてありそうなのだ。

遠ざかったり、消えたり、黒を蔽い尽くすほどに襲いかかる海。その海が白い？ 海は生まれたと
きから白かったと彼女は主張するのだ。

大地は山脈がぐるりぐるり回っているだけのレコード盤のような簡単な構造ではなく堅穴があり、
突起がある。それももう、でこぼこは音を製造する限度を越えていて、どうにもならないほど針の先
がいかれたり、つかえたりしている。

疾走すればよくわかる。いかれた針の先というのは金属のアンテナなんかじゃない、何かというと
木の根のようなものだ。木の根を元気づけるほどに死者は栄養源にならない。ときどき地図は真つ黒
になり、何者かもしれない赤い目だけが二つ並んで振り向く。

二人の姿だけが煌々と照らされているような気がする。そこに行けるだろうな、もしかしたら、ど
こかの天体の引力が枝分かれして働いているんじゃないか？

「いま大きな虫が一匹、毛にうずまって過ぎていった。見ろ！ 退化している、腹から尻尾の部分

重視するんだ……。繁殖し終わった後だろう」

だんだん何も見えなくなり、そこにはない勝手なものを見る自由がくる。おれは高慢にも甘ったれにもなる。

「行く先が何であるか知っているの？」

「行方を見失わなければ行けるはずだ、ゆっくり胎児にかえることだってできそうだけ」

気温がドンドン低くなる。

「地図を広げて計算すればわかることだったわ。あそこなら、赤いのも、黒いのも、黄色いのも、細い線のみんなが集まっているはずよ、ダイナマイトの導火線みたいに、いつだって爆発していたわ」

スローモーションで撮った波のように緩慢に展開する白い平面が突然ウロコをつくる。ブレーキを踏む、

「キーン！」

冷気が熱を帯びて痛みになる。雪のなかに突っ込んでいくが、喉の渴きはすでに肉体からはみ出して口から逃げ、ガリガリ滑走していく、音は股間に逆さになっている口のずっと先だ。雪の重みが頭のなかに一塊、胸に一塊、腹のなかに一塊。頭のなかの一塊を意思の力で思い切り凝固させ、それをキイにして銀色に輝く闇をカギ型に開く、

「ここは何処だ？」

「なんと、漠々と広い雪原、想像力を百倍にしてもお返しがくるわ。見たでしよう、どんな魔術より魔術である白を！」

点々と雪に置かれた靴跡が隊列をつくって前進してここまで続くのだが、

「ああつ、ああつ、ああつ」

いま声をあげて、靴跡は人の顔に変わりそうだ、それは掘られた靴跡ではなく、膨らみがある、従って高さがある。いまこの雪の裏側で誰かが歩いてつけている靴跡が、こちら側で膨らむといった具合のものだ。両面ではさみうちにされる靴跡はかっきりと波模様をくりぬき、白い落雁になっておれの口のなかに飛び込んだりする。

おれは長い息をし、雪面がとびとびに持ち上がるのを見る。目は、もう、よろめかないが、噴水になって息吹いているようにも見え、雪の上に突き抜けて正体を現すのは茶色に縮んだ足。痩せ細った足が雪のあちこちに突き出る、おれは驚くというより叫び声をあげてしやがみこむ。ただの棒ではないか、折れずにあるだけでいい、足でなく縮みきった首でもいい、おれは前屈みになって、その首をつかむ。一つではなく何十もの首が……乾いて縮みきったミイラほどの首が、雪から突き出している。

おれはその足や首の一つずつに左手と右手で交互につかまり、まるで断崖でも登りつめるように四つんばいに這うことから始めなければならぬ。それは登るのに似て、努力する声が笛になっている。新しい世界が始まりそうだといっても、おれが新しく誕生するといっても、つまりどれも再生したとかげの尻尾のように骨がないのだ。

外観なんかで脅されることはない。雪原の裏側でおれの足裏にあわせて、雪を突き抜けた足に つながる干からびた上半身が、

「キュツ、キュツ」

甘い陶酔の声をあげて、後ろから、おれの口笛に浮かれたようについてくる。

地上の水銀色の物質は化学物質ではなく雪だったのか……、いや、寝床のぬくもりが内側からこないで、外側からきて、おふくろの言っていることがわかっている。

「サンは見えませんか。わたしの孫も見えませんか？ 何処に行ってしまったんです？ サンは何をしているのでしょうか、どんなことがあっても、子供は手放してはいけませんよ。わたしは、あんなに美しい子を見たことはありませんよ。個性的だということは素晴らしいことです。あの美しい耳がおまえにそっくりだということを知っていますか？ 人間の耳ほどそれぞれに違う表情をもっているも

のはありませんけど……。わたしの孫は頭で考えるのではなく、魂で考える子になるんですよ。それがどういうことか、おまえは分かっているじゃありませんか。飛びつきり素敵な考えが生まれて来るだろうと。あの子に言っただけのとき、あの子の嬉しそうだったこと。おまえは、わたしの自慢の息子なんですよ。……あの美しい耳で聴き、魂で考える時代が来るのですね。祝ってやりましょう、夢の国を！」

「おれは無意識にひよいと肩を引いてしまったんです。怖かったんですよ、サンはまっ逆かさまに吊り下がっていたようでしたが、いままた念入りにも振り落としましたようです。おれはサンを背負い込んだ上に、二人の子供を背負い込むよりも、雪のなかでこうやって子供たちをおれの胸のなかで保護して、精一杯面積をひろげてうつ伏している方をとりたいと思っただけです」

ふとおれの頬から砂がこぼれていく感じがする。乾いて熱い、雪らしい冷たさを持つ一粒もない。腹の下で次第に遠ざかるサンの叫びの尾が揺れているようだ。

「大きな声ではいえませんが、おれの体の中はすっかりネズミみたいなものの巣になってしまいましたよ。おれが一度も留守にしたことのない体のなかに、こんなにネズミみたいなものをはびこらせてしまったんです。おれの体の内側に足をおいて中心にむかい耳を広げ白いヒゲをしげらせて、泣いているんです、実際、その小さな足の感触が、かゆいところに手の届かない感じなんです。どうしてで

「しょう、屠殺場ではネズミが長生きをしているんですよ」

「こうしているうちにおれの下のふるさとは、雪を消し土を広げるだろう。おれの体温で、雪解けにして……、おれは上向きにひっくりかえったりはしない。そう……こうしているうちに、おれの子供たちは引つかき傷でふるさとに街路を作るだろう。」

「克、おまえは下を見ているんですね、ホームシックにかかったら、下を見ているのもいいでしょうよ、でもサンは山にいるんでしょうから……。私は死んでどんなどころにもいけませんが、地下には行きませんよ。このごろの人は何故生きているうちから地下にもぐるんでしょうね……」

「いい加減にしろ、手のひらをあてると、小刻みな早い足取り。」

「何かが人間の予備軍になったんです、断じて人間の子供なんかじゃありませんよ、お母さん。もっと、こう……人間を超えたものです」

「孫がいるんですね、玩具をみんな壊してしまいますか？ おまえは一度も見たこともないパパのようには働くのだといっていました。スクラップ屋さんですよ。おまえには夢がありましたね。孫はそうしたことには言わないのですか？」

「母さん！ 食卓から零れ落ちるとばっちりが、四方に飛び散ったりした、あの熱い想い、あれが懐かしい！」

おれは満腹中枢を破壊された生物だったことがありそうだ。もう何ダースかの人間予備軍を繁殖させような気がする。

子供たちはおれのなかで、耳や白髪をからめて満足そうに寝入っている。

老人たちが草笛を吹く。子守唄だ。

小さいものは大きいものに、暖かいものは冷たいものに急変する。粘ついた雪が偽足を伸ばしあつて、音さえ割り込んでくる余地のないほどに、たっぷり降り始める。

何日もおれに降り積もる雪は何米も……。

膨らんでいく巨人は孤独ではない、小人の顔を包んで、ぺしゃんこになるなど考えない。なにも腐らず、何も消え失せず、雪は旋風にもちぎれない粘着性と蛮力をもって、何米もの厚みをおれの力とする。

豊かな肥満だ。おれは空色の太男になる。雪の地平線を越えて空を占領するのだ。

河面が凍結を解き、ゆるゆる動く、わたしはそこから出現するものをじっとみつめている。

ぬれた克の頭をめぐって下っているツララに魚がさされているのは、魚が克と一緒に昇天する途中で外套を干しているということかもしれない。彼は水のなか泡一粒になって消える思いだったに違いないのに、いまは何本かの太いツララを従えて逞しいのだ。逆光でツララに含まれた髪の毛のシルエツトが王冠のように輝き、霜が形成する氷の結晶がプリズムの役目をし、光線を複雑に屈折させるから、総てが光の十字架になる。彼が眩しさに手をかざすと、五本指全部が、指の延長のツララを一本ずつ持つ光の樹。

あなたはツララの指を折ってはいけないわ、指を折り、ツララの数を数えた結果、ツララが折れて

落ちてなにもなくなっていたという具合のポカは、克の一生のうちで何回か経験したに違いない。ツララの数のほかに、彼がいま数えたいものはなんだろうか。夢のなかの目標も、いままで生きてきた目標も、こんなかたちの蘇生だったの？

あなたはツララが耳から一時に落ちたように、突然なものかがあなたを訪れたと感じ取っているけれど、みんな、溺死するような果かないあなたとは無縁でいたがっているよ、勿論あなたのような半死者は、誰からも一言も話しかけられずにいるのを好むものだわ。あのひとたちも、もう引き返していく。

あなたがいま、しゃぶっているところだけが、本物のツララだというのではなく、あなたを含む全部が本当のツララなのよ。突然、氷が日向のぬるま湯になり、外側からざわざわと頭にでこぼこを作っていく。ゆるんで毛先へと滑り始めるツララは、むずがゆい雫の触手になってするする伸びる。すっかり溶けたら背骨のつらなりを首飾りにしたりして、泥色の顔があらわれるだろう。

正面の石に彼を立てかける。そしてわたしは、根づいた木同士みたいに彼と一生対面していなければならぬようなやりきれなさにぐずぐずする。あなたは何処にも何時だっていると思えていたから……あなたに会ったと言うことは、目隠しされて踊る足もとが狂ってぶつかっただけのことと考えたの。怖いとか、可哀そうだとかいういたわりはない。材木を扱うやりかたでわたしは他人の

遺体を椅子にしている。わたしは、もう、長い間、後ろ足をバツタのように折り曲げてこうやってすわっているのではないかしら、藁屋根の下で二人で話し合った、あのときから……。

あなたは、まだ融け終わらないツララをマツ毛につけて、融けてしまうまでの息の長い涙にくれているのだわ、わたしは感傷にとっぷりつかるとは気持ちはないな。

火が燃えている。こんな炎で暖をとるのも少し振りでなつかしいから、暖めなければならぬ凍った人間を後ろにして、自然に人々は前に出、何時のまのかひとまわり内側の地べたに座って、目を見開いていながら眠っているようになる。

火は人の上に煙をかぶせる、煙で眼をやられると、もう誰も鋭さを取り戻すことができなくなり動けなくなり、言葉にならない音を発する、ア、ヒ、へ、わたしの眼もかゆくなるが、ただの死を死ぬのを助けるために克の世話をする気はない、生き返って貰わなければ……。

わたしは彼を引っ張って火に近づける。

「克の首は短くなってしまうたのではないか？ あんたの話す息をすぐに取り込み吸いこむかたちで息をはじめそうかね？ ……数分後かな？ 別れを告げるのは……」

男たちは勝手なことを言って楽しんでさえている。

「どうだい？ まだかい？ 終わりという一丁上がり、一丁上がりじゃないのかい？」

その声に広が肩を怒らせ、指を一本たてて周囲を制している。

「まだ何も言わないで下さい、そんな声をだされると、こつちまで吹き倒されてしまいですよ」

克の角膜のなかから分泌される白いにこりが見え、肝腎のわたしは誰かの質問の間を素通りしている。彼の体から止めどなくツララのとける水が流れ出し、毛先から、脇の下から、股からも流れ出て、水道の蛇口のような、こんなにも融けているのは彼ひとりだ。融け終わったあとの彼の顔が、いまより魅力的なものであるかどうか。

髪をかきあげながら彼の顔にかがみ込む小柄な女がいる。ホーホーホー、克の唇に自分の唇をあてて、悪い音楽で唇を鳴らし、繰り返す。

「わたしの彼なの？ あなたは誰です？」

「誰だっていいはずだけれど……。女の中にも時々、いい思いつきをする人物はいるものよ、要するにそれだけのことね」

「何時からそんな、みだらな形の蘇生術を施すようになったのかしら？」

「これもまた大変結構なことじゃないの」

その女の堂々とやっている盗人くさくない物腰が、わたしには気に入らないのだ。

「なにも憤慨することはない、あなたも怖がらずにやったらどうなの、キスを！」。

なにをいったところで無駄だから、それにわたしは背を向けている。それが、わたしにとって、つらいかつらくないのか計る一番切実な物指しがずっと前からあやふやなのだ。

いままでのわかりきった力がいちどきに脱け出ていってしまい、わたしの認知しない力だけで、わたしはここにいます。それは彼を見捨てることの出来ないのろまという力。

水分が消えて、残ったものが彼で、あの美しいツララで長く伸びていた手の先は、ネンドをめり込ませて、終わりになる。いったい何をこねあげて造っていたの？

彼は更に乾ききって、その胸を凧のように張り詰めようとする。胸に昔膨らんだ何かがあつて、それがさつきまで水に溺れていたはずなのに、もう皮膚は太い骨に引っ張られてピンと張り詰める。

抱こうとする欲望によるのかもしれない。わたしの前に立ちはだかった彼は演技をこえて場違いな目つきをしている。

「あなたは自分の体力を信じきっている様子をしているわ。あなたのツララに刺されていた小さな魚は尻尾をふりふり素早く逃げていった。あなたから水を飲んだ女はみずみずしくなって、さつき鏡のまえできりきり舞をしていたわ、こんなに他人に注目されるほど若返るなんて困るといったわ。あなたは気づかないでしょうけれど、あなたの表情に、ぼつの悪さが見えてきている。なんのために河に飛び込んだりするのよ？ 無念無想、それも捨てたものでないけれど、その為に心の中で傾き折れて

いた背骨が無邪気につながって若返ったかどうか。あなたに鳴り止まない耳鳴りがきているのでしよう。わたしはあなたの力で、生々しい死者たちの誕生を内側から立ち会わせてもらっている気持ちでいたけれど、そうでもなかったのね。あなたはそもそもわたし抜きで蘇生することが出来たのだから……もうわたしの力で覆すことのできない世界を作っていることになるのね」

なんだろう、わたしの力で覆すことの出来ない世界というのは……。克が独りぼっちではなかったということ、忘れて説明できない昔が出没するということだ。

わたしはあなたとの間に見つけ出した距離を忘れ果てはしない。再びあなたに拘束されるなんて嫌な気もする、今度の誕生をわたしと離れた遙か彼方の出来事として、彼に確認させ、わたしも確認する手続きとして、立ち会っていると思われてくる。なんだかわたしが彼を待っていた時間は無駄骨だったということになってしまう。わたしは時間を無駄にしていたけれど、どうやらあの気の遠くなるような時間の長さは、終末からわたしを引き離し、わたしを護る役割を果たしてくれたようだ。わたしが克に期待を持つなんて、そんな少女時代の期待は尾を引くものではない筈なのよ。わたしはせいぜいあなたや息子たちが、生き延びる時代の一部を知りたいと願うだけなの、あなたのお母さまであるみたいに。

いま彼の声が聞こえる。幸せと不幸せが二重に焼き付けになるような奇妙な気持ちだ。こうして幸と不幸せの両方から危く逃げたということかもしれない。

「それはおれにとつても好都合です。暫く考えさせて下さい」

彼が何か言っているのだ。

「またあなたはわたしを待たせるというの？ そんなことのために、どれだけ遅れをとることになったか、わたしはもう、昔のように体を希望で膨らませることはしないのよ」

「おれがいま、生まれたんだといったね？ きみの場合はどうなんです」

「いま生まれただなんて、大人としての体面を失ってしまうでしょうね……」

「体面だって？ そんな言葉があつただろうか？」

首を傾げている。彼と縁の薄そうな言葉だ。そのいいぐさ、生まれたばかりで、まだ視力も、聴力も、思考力も弱いだろうと思つたのに、あなたはよく分かっているじゃない！

わたしは両手で克の手首を掴もうとするが、彼の手はするりと抜けて開いた五本の指を櫛型にして伸びている髪をとかしている。彼は立ち上がる、現在こうやっているが、これからはこんなやりかたでいく、こんなやりかたとは何かは黙っている。そんな解釈の出来そうな妙な動きをみせる。それはぎこちなさの為に後ろに誰かがひそんでいて操っているかのように見え、彼がその口の両端を引き降

ろすと、顔も大きな腹話術の人形に見えてしまう。そして彼は急に元気を取り戻す。

「気分は悪くないか？ おなかは空いていないか？ なにか食べるものはないか？ 体が自由になる
と変な気がするね」

克はこんなことを口走りながらわたしを背負って進んでいき、そこにいる見知らぬ男に近づき、艶
なく湿りのなかった眼から楽しそうな微光を発する。

「克！」

それは人違いです、あなたはその方と面識がない。わたしは高く響く声で克の名を呼ぶ、声は小さ
な塊になって、コトンと彼の靴のかかとで踏み潰されてしまう。ツララがまだ残っていて落ちたのね？
指を開いて見るがいい。わたしの恋人だった彼、わたしの夫だった彼、わたしの待っていた彼、もう
待つことをよした彼、わたしを背負ってくれるこの人物が、克という名を持っていたかどうか？ わ
たしは彼の広い背中で身体の向きをゆっくり変えて考えている。

確固たる克は実在しないということかもしれない。彼もまた、わたしを記憶していないという孤独
をさまよっているのに、記憶が欠落していることによる、生のきらめきみたいなもので活気づいてき
ている。

自分はアイスクリームにまみれていたが、はからずも今日、体から出たり戻ったりする状態になり、

漸く隙に乗じて、まみれていたものを振り落として来ることに成功したと、そういうがいい、つじつまはあっている。彼と向き合わせになっている人物はいきなり克の若さによって小さく痩せ細り、なにか陰險な皺に包み込まれて、一挙に年寄ってしまう。

「確実なことは眼に見えませんが、おれを不透明にしていた嗅ぎ覚えのある昔の臭いはもうないでしょう。安心してください、おれはもう、あなたの貴重なものを奪いはしませんよ」

克は言っている。あなたは怠け者で何時だって、影を落とすことを省略し続けていたのよ、日中は寝ぼけていたわ。わたしは跳躍して、皺のないクッションに滑り落ちる。

何を言っても彼はその答えを答えることはない、自分の長すぎた無為の時間を認めることになるから。彼は何か渴望していて、冷静をよそおっているのではないか、そんな風にも見える。わたしもあなたの中に巢食う誰かと同じ程度に親密な誰かを持っていそうだから、あなたに此処だけにおいて、他の場所には決していないことを要求したりはしない。氷の大建築をささえて、子供や動物を従え、安定した軸になって地球の病が癒えるのを待ってもいい。そんなあり方も悪くはない。そうなったら、山から立ち去る前の決心に立ち返らせることが可能かもしれない。

頭はもともと肉体を引き連れるには無能なのだから、さして不便がないといえるのに、わたしは涙を頭なしの息子の首のへこみに落としてしまう、首のへこみに小さく残っている耳が雨を受けた蕾のように震える。いい子、わたしは耳もとで話し掛ける、耳までなくなったら大変、いつも引っ張っていてあげましょう。頭がなく大きな耳だけで生きている動物を見たことがあるわ、つまりあんなになればいい。立派なものよ。

何時でもこの子を見ると、ドキドキしてしまう。わたしたちは地下に入るのを拒ばまれ、こんな地上に追放されてまで、時代によって軽侮されているけれど、この子は頭がないだけに軽侮のされかたが少ない。

わたしがこの子を産んだとき、酒呑地では次々頭のない子や、白髪の子が生まれた。ヒゲとニキビのところでも、隠していたが、少女が頭のない子を産んでいたのだ。ノブも頭のない子を産んだ。後のみんなは慌てふためき、子供を捨てて出ていったのだ。

この子のことは誰もわかりようがない、わたしもまだ、まるつきり知らない。無脳と言うのはどんな？ 居心地は？

弟のかわりに白髪の子のムーンが、すみれ色の小じわをいくつも鼻の上において、すすり泣きながら息を切らせる。痛い……ああ？ わたしがリンの耳を引っ張ったので泣いてあげるのなら、ちよつとタイミングが狂っている。その頬にピンクの斑点が幾つもある。いつか色の濃いソバカスになるだろう。あとでそつと洗ってあげよう。

あらゆる老衰の萌芽を抱えているのが子供なのだとは知っているが、老婆たちのいう信仰みたいに子供の命は充分減びている。

白髪じゃないか！ 忘れ易いんじゃないか！ その証拠に頭がないじゃないか、能力以上のものを求めるな、完全無害の柔らかい箱に入れて育てろ！ わたしはあんなやりかたはとらない。子供を抱くものは子供の死も抱く覚悟はできている。白髪の子を抱くときよりも、首なしの子を抱くとき涙が出、安堵の思いがあるのだ。

絶対に他人に痛めつけられることのない無脳という強さを抱いているから。それは何時か、わたしをも助けてくれそうな強さだ、椅子の沈むほどに……、生きながら重い。

白髪のムーンは目を拳でこすって泣き止まない。

「お腹が痛い？ 石を食べちゃったの？」

リンがムーンに食べさせた？ リンは口を持たないから、ムーンに食べさせることばかりする。

「どの位の大きさの石を？ ゲンコくらい？」

ムーンはつくった拳を交叉させて、わたしの周りを回る。

「役者じゃないか！」

克は少し横を向いていて何も言わず、広がいう。

「何故サンは子供を用心深く扱わないの？ 死んだと言っても死肌からヒゲも伸びるし、木も生えるさ。そつと扱はなけりや損だなあ、その苦労が無になるよ！」

「無になることには馴れているわ。ムーンは黄色く隙間の開いた歯並びなのに、石を噛むの？ 腹を探ってみればごろごろではなく、ざくざく触るわ」

ふたりに食物を与えると、競争の取り合いをするが、大抵頭なしのリンの勝ち、エプロン一杯の食べ物を手掴みにし、ムーンの口を解剖するみたいに押し広げて突っ込む。リンは見えないし、味わえないから食べ物だと言われれば何もかもムーンの口に入れてしまう。ムーンに一度食べられたことがあるみたいに、ムーンの口のありかを本能的に知っていて突っ込む。

「誰？ 子供に石をあたえたのは？」

わたしが子供たちを老婆から引き取って育てるようになった時よりはずっとましだけれど、克の子供たちの姿や匂いに対する馴れ方はかなり遅々たるものだ。

克が後ずさりする、子供たちも後ずさりする。顔がないということは顔以上の広い面積でものを言うこと、怖がっているのだ。白髪だということは真面目腐っていること、考え深いことだ。子供たちの近くに彼は立ち止まらないし、子供たちは彼にさとられない隙に、場所をひよいと変えたりする。克は白髪のムーンが、かなり自分に似ていることを認めてはいるが、しかし頭なしのリンの方は顔を見たことがないからと言って、未だに認めない。

「石を食うとは勇敢じゃないか、荒々しいね。誇りを失わないためには身体は重いほうがいいのさ、石を食べることだよ。ベーコンやハムやバターが子供の知恵や肉になるのではなく石が栄養になるべきなんだ！」

克がようやくよく思っていることを言う。克が石好きなくらい、わたしだつて知っているわ。それに口笛が得意だ。

ムーンは水を飲む、紫色になり、喉がつかまっている。根本的な体の仕組骨組に石が響かなければいいが……。

「痛くないの？」

そんなものを食べさせるなんて、おかしいのは克の方だ。石を食べさせながらムーンの巻き毛から膝まで、何時になく満足げに見はしなかったか？ リンの頭なしの首のあたりに調理中の動物に対す

るような目つきを流しはしなかったか？ 生贄にしたいという気持ちを押さえるために石をたべさせたいにはむごいこと。

ムーンの湿った顔を拭く、拭いた後から泣き出し、髪を掻き耨る。

「毛むくじやらは嫌だ！ 白髪は嫌だ！」

「それが可愛いのに……」

「頭なしになりたい！」

「頭が大事、体でも覚えられるものもあるけれど、頭の方がもっと沢山覚えるわ。ときにはパパのように記憶なしというものもあるけれど、便利なものなのよ、頭は！」

「頭が重い！」

「確かにリンを抱くのと違い、頭が一つごろりとあつて余計ものね。倒れかからないで、ムーンはリンを倒れないようにしてあげる係りでしょう！」

リンが不満そうに体を揺らし、手を頭のあるべき場所に置いて往復させる。

「リンは頭を欲しがっている、うまくいかないものね。二人とも現状では安らぎがないというの？ 生きてくるものとしてもっと、勇敢でなくては……とてもではなく、ほんの少しの勇敢さを……」

椅子に克を掛けさせ、広はカミソリに光の輪をゆらゆらさせる。カミソリの刃の二ミリ間隔の刺激でも普通の人間なら意識できるはずなのに、彼の皮膚反応は常人の八分の一か十分の一にさがっている。彼はまだ物体なみの神経しか持たない。「動くな！ おれの趣味に協力してくれよ」

広は刃を滑らせて舌打ちする。

「でも、ハンサムになつたな。サンも北も、克をしばらくは責めないでおこうよ。なあ、何時だつて人間は多くのことを省いて、それで平気でいられるんだからさ！」

広はカミソリを空に漂わせ、自分で演じていることに感動している。

克は、目の中に潤いもどおり、高い鼻梁が目立ち、広より遙に若く見えるが、眉を半分そぎとられて、またも前世に生きていそうな面持ちに返る。

「あの日、おれはな、やっぱし、おまえを追って出て行つたんだよ。はじめは克のスキーのあとを辿って行けば良かったから、気楽で悲壮感なんてなかった。すぐに、追いつき合流するつもりだったし、

追いついたとき克が、なんていうかな？　びっくりするかな？　なんて気楽に空想して楽しんでたんだ。ところが吹雪がきて、見る間にスキーのあとはかき消され、おれは目標を簡単に見失ってしまった。克まかせで、地図も持っていなかったし、雪は山も谷も埋めつくして、ただ、真っ白な大雪原になって拡がってしまう。おれは堅穴を掘って休息しながら、お前の行った方向だけを護って必死になつて進んでいった。もう、限界だと目を上げると、雪は何時の間にか、水銀色になつて地平線までつづいていたんだ。とうとう、やったあ！　おれは小躍りした、平野に出たんだ。それなのにどう見回しても、地上から、おれたちの町はいや国が消えうせていた。ただ水銀色に覆われた途方もない平原がつづくだけだ。……どうやら、戦争が最高の厄介払いをしたんだな、ある種の変人達が暇をかけてする、贅沢な希望の達成があつたんだなど、おれにも、わかつたさ。見回しても、克はどこにも見えなかった。たった一人だった。空しさが厭なら嘘をつくりだせばすむ、おれは、宇宙人にされるべく、或いは地中から追放されてここにいることにしても良いと考えたよ。嘘は謎を簡単に解いてくれる、謎が残ったら解くための嘘をまたつくり出せばすむ。変更も可能だ。お前は地下に入ったんだね。追つていくつもりが、おれは何故か逡巡したんだ。疲れてもいた。おれは二つ折りになつて見たが、飲むものも食べるものも見当たらなかった。おれはスキーをぬいで、ただ歩いていった。靴音は自身自身を踏みつけにするが、足は進み甲斐もなく同じ場所にあり、重く痛い。気づくと、おれは銀色の砂

をガリガリ食べていた。大量の砂の中から水一滴を期待したのかもしれない、のどが渴いていたんだよ。そのくせ食べた後で、この水銀色の物質がなんであるか無性に気になってね、マツチで火をつけてみたんだ。おかしなことに、水銀色のものはジュージュウと音をたてて燃えた。しばらくしたら、おれが放火でもしたみたいに、こつちにも、あつちにも、炎があがりはじめたのさ！ たまげたなあ、おれの影のほかに、薄色の影もあつて、おれを追つてぐんぐん進んで来るが、振り向けば、炎がいくつもあるだけだ。誰もいない、おれの影が幾通りにも増加していて、足もとから湧いて前進する黒い影もあつて、それもおれの影で、おれの立っている足の影が、木立の影のようにおれの靴の上をつぎ流れていったりした。炎は野獣みたいに舌なめずりして襲つて来そうだったが、おれを力づけてもくれたよ。気のゆるむような幸福な窓の灯とも違う。炎はけばけばしい粘液になつて流れもした。けばけばしさの下に隠れている黒いものが動静をうかがつていそうな気がして、おれはその炎の動きを窺い、窺い、燃えているものを胃袋のなかでゆすりながら炎から逃げた。今思えば、何かとりかえしのつかない影響を与えるガスが、濃く立ち込めていたのに違いない。そのなかから出てきたのが、顔の皮膚が燃えはじめている老人たちだったんだよ。片目を開けて、火に顔を突っ込んでいた。彼らは炭火を手でじかにつまんでも、手が焦げないやりかたを知っているせいか、火力に対する警戒が足りなかったのに違いない。みんな、か弱く光るローソクになつて立っていたが、おれを見ると、「ほら、

あそこに」炎の出る手で指さしながら、「あの暗い眼で茫然と立っている男を見てご覧よ、生き返っているぞ！」というんだ。自制のない大声で、その、男という言い方！ おれが驚いて振り返ると、北がいたんだよ、嬉しかったなあ。北は克に頼まれたからといって、おれを山に引きずって行こうとした。

山は雪だったから、まだ春は浅かったはずなんだが、気温が上がり始めてね。急に炎暑がくるという異常気象がきたんだ。幾日か経ち、おれたちは、白も水銀色もない山のなかにいた。その山が今度は喘息の発作のような破裂音を出しながら火を吹いたんだ、次の日には雨が降るが、一日もすると新しい場所から煙が出始め、山火事は広がり、水中の魚に似た飛行機が消防活動するのが見えた。やはりこの国はあつて地中に隠れていたんだよ。煙のベール越しにその翼に日の丸と消防のマークが確認できたもの。おまえはその見えないところに、いたってわけだな？ ときには煙が這って来て、おれたちの脚の回りに、ズボンのように巻きついたから、おれたちは裸で歩いても平気だったよ。風が吹けば暑さはいくらかやわらいだが、また山火事が広がり、死火山が刺激されたように噴火をした。黒煙は地上を這い、おれの食べたものが体のなかで炎になっているなど思ったよ。火事は夜遅く照明弾が落ちたように、異種の輝きを見せることがあった。老人たちはローソクのように燃えながら、北と一緒にあって、おれを酒呑地まで引きずって行った……」

「おまえ、あの、あれを、ほんとに食ったのか？　で、大丈夫か？　心配になってきたな！」

克が突然、友情をとりもどしている、克が戻ってきたのだ。北と、広が両側から克に抱きついて三人一緒にひっくり返ってしまう。わたしは一人、疎外された気分になる。

「おれは、広と北とサンのいる学生時代なら、はつきり思い出せる。地下に入る前、北にあったことも、広を部落まで引きずって行って欲しいと、頼んだことも覚えてるさ。しかし、その後となると、記憶はパッチワークしてみたみたいに消去されて、つながらなくなるんだよ」

「そうか、覚えていたか？　なら、急ぐな！　記憶をゆるゆる揺すりながら、再構築すればいい。お前の場合は、多分、老人や子供に対する愛情をとりもどせば……、きつととり戻せるさ！」

北が確信にみちていう。そうかもしれない、わたしだって、それくらいわかっているわ。

「……あのあと、大掛かりな消火剤の流れが、霧になっていたのよ。夜の灯が向こうの地割れから、出たり入ったりし、示し合わせたような光の合図をこちら側からするのも見たわ。それから……」

わたしは、男の友情を前にして孤立し、話しながら気がかりになる、子供たちが見えない、ノブはどうしたの？　どこに子供たちを連れていってしまったのだろうか？

屠殺場の外の偽装された体重計の上で、いま死を予感した動物が暴れている。なかでは脊椎で折半された動物たちが天井のレールにぶら下がって流れていく。引き出された臓器は最後のうらみを込めて膨張して、のたうち、床の穴から下の階に落ちて放水される。無表情な白衣の女たちがコンベアの上の長い腸を繰り、紫色のスタンプを押しつづけている。赤い水がぐる排水浄化装置の脇で、わたしは鼻をつまみながら中を覗き見している……。

果たして牛や豚だけかどうか？ 生き返ったもののなかで最も数の多いのが何か考えてみればわかる。

「もつとましな勤め口がありそうなものじゃない？」

克のマスクや額に血がついている、わたしの眼のへりに、朱色の糸が音をたててステッチをかけていき網膜が引っ張られる。

「前からこういう職業に敬意を抱いて狙っていたんだよ。どうだ、おれにとって最適の職業ではないか？ 死体に接しすぎたから、これからは死体が、屠殺する、おれの後ろ盾になってくれるだろう」

「どうして、そんな風に死者の思いを捏造するのよ、いまの世のなか、誰一人死を経験しないものな

ど、いないのに。こういう仕事って、昔から追放された人間の仕事とされてきたのよ。わたしたちは地球の内臓にされるのを拒否して、山にすることで、胡散臭いものとして、地下から締め出されていたんだから……。あなたもふさわしい職業を与えられたということね。……あなたは知らなかったでしょうけど、酒呑地からも世界の変化は見てとれたわ。夜の灯が向こうの排気口から、サーチライトみたいにもれだしていたし、地形も変わり、酒呑地も地続きになって、山の下に道路が出来、倉庫も屠殺場も浄水場もできたのよ」

「そう。知らなかったな、知らないことなら沢山あるよ。この職場に十日前から残っている者は二三人しかいないんだよ、みんな入れ替わっている。いなくなったということは死んだことに違いない！」

「お芝居じゃないよ、あなたの視界から消えたことが、死だなんて……。錯覚だわ！」

わたしには、まだぬくぬくとしている命があつて、捕まえられないように蹲っている。屠殺する彼の後ろ盾には、わたしがいないのに違いない。

黄色のトレーラーがゆっくり動いてくる、彼は不承不承眺めるといふ様子で、わたしと並んで同じものを見ている。屠殺場や浄水場のなかから、幾種かの音や臭いがきて、どれも複雑に混合して山盛りになる。

「おれは以前いつも眠ったふりをしてたよ、きみもおれが眠っていると思っっているふりをしたのか

もしれないが……、眠ると言う油断が許せないから、長い間眠っていないつもりでいたんだ」

「誰かがいつでも殺人をめざしているというのね、いつでも誰かはいるよ」

「ここで殺しをめざして意気込むのはおれだが、いままでも新しい軟らかい死体を夢の中で欲しがり
はしなかったか？ という疑いを持って見たのさ。ここに踏みとどまらせたのは、おれの生命の超合
理的な流れが、おれを不道徳から救ってくれると言うことに違いないのだから。……おれの背後に嵐
が湧き立つてはいないかい？」
トレーラーの音がそう聞こえるのだ。

大型トレーラーがヘアピンカーブの道をくる、前の牽引車が進めば後ろの牽引車が外側に傾いて内
側のタイヤが持ち上がってしまう。一米くらいずつ、前と後ろの牽引車が交替で動かしているが、僅
かな距離なのに一時間以上かかっても、まだ中腹に達していない。道路の彎曲部、牽引車の間に道路
をはずれて吊り下がる大きい重そうな荷物がある。車輪のある機械にしては、それをとりまく喧噪が
こたえる。
殺戮よりずっと不気味なこと、魂を作り直すとか、動物の魂を回収して人間に移し変えるとか、そ
んなとんでもないことに利用されそうな何か。大地を波打たせて進んでくる巨大な重量が移動した軌
跡の向こうは脱け殻のような灰色の空間、ひるんではいけない、いつもこんなトレーラーが動いて
いるものなんだ。これとそっくり似た場面はよくあった、わたしはしつこくむさぼり見て、見ている

ことの為に不活発になっていく。これが新兵器の一種だといふのでなければよいが、わたしの最後の臥床になるなどというような。

車の進む響きで地面という地面にV字の線がはしり、角という角に対する接線が空や地面に突き刺さっていく。人々の手足が目につくほど位置をずらし、顔は鼻を釘で打ち付けられたように歪んでいる。牽引車は活性の刺激臭を絶えず出している、重い荷物から解き放たれたら、わたしの方に逆行しても突き進んでくるだろう。崖のはるか下の水の中を流れている死者の聲が高まる。

「死んだものよりは少しは、ましなんじゃないか！」

唇が乾いてウロコを作る。わたしは自分の腕を捨てるように、子供たちを振り切って家に置いてきている、彼がそのことを言いそうだ。大丈夫よ、ノブがいるから、頼んでは来なかつたけど、……：……空がぐらぐら落ちてしまう。

彼の顔がわたしに接近している、愚、ホルモンと屠殺との相関を考える。愚かな有機的な機能である魂などというものは、毛むくじやらの独占物、科学的所産である機械に魂を結びつける、とり越し苦労はいらないのだ。

「いいわ、いいわ」

彼の生え揃った眉がわたしの鼻をこそげる。

「そんなやりかたで屠殺するとき心臓を捜すのでしょうか？ 逆にあなたの心臓を死者に探られてしまうでしょう？」

彼はわたしを抱えたまま地上に置くのを遅らせている。

「きみは取るに足りないことだと思うだろうが、子供を置いてけぼりにするのは、危険だよ！」

トレーラーに引かれてきた巨大な荷物の周りには、宇宙旅行の途中で立ち寄ったという様子で、果然と立ち尽くしている人々が見える。青白く見えていたものが、わずかに緑を含んだ立方体にみえ、巻きつく斜めの棧があり、下の方は丸い穴が二枚貝の水管のように飛び出ている、その下、関節みたいな脚が八つある。あれほど強い圧力を見るものに感じさせていた荷物は、巨大であるものの、いまは何か和ついで見える。笛が鳴って、

鈍い音が続くのは最近できた地下に通じるインターチェンジのあたりからで、荷物から直接洩れ出る音は全くない。わたしをじろじろ見つめる人物があつて歩くとわたしの足もとに、行く手を遮つてごろりと寝転んでしまう。他にも肩越しに振り返ると肩に冷たい体重を乗せてくる人物がある、わたしは遂に足蹴にしてしまう。

「なにをするのさ、この肥満症め！」

どこかで替わりばんこにのしっている声が聞こえる、わたしの足首はエンピツほどの細さだとい

うのに……。

見物の人の間から黒い球になって飛び出すのは？ 頭が転がっているのだ、人は落し物をするように頭を落としていくが、もう二度と落し物を思い出す頭がなくなっている。

寒々とする。空気の断層がいくらでもあつて、地上の冬と夏が回転する以上の気温の激変がくるから、肌が擦り切れそうだ。大荷物を遠くから囲んで離れ難い様子をしていた四五人の人が、叫びをあげて荷物に集まる。

叫びが長い沈黙を引き寄せる。

わたしには沈黙の間に自分の耳のきのこが大きくなるのがわかり、ゆつくりと幾巻かの螺旋状の壁が渦巻きながら埋没していくのがわかる。この耳が次の言葉を聞き分けてくれる。

箱の扉が開かれている、ふるえてしまう、大荷物から吐き出されるのは冷凍人間。

「ずしん、ずしん」

回りが揺れ動いて崩れ落ちる。ここに向かって送り込まれているなんてわかっていた、放り出されている凍っている人間が凍ったまま融かされもせずに……。

子供も老人もいる……わたしはひとりで走り出している。大変重大なことなのだ、許し難いこともある。

白髪が頭なしをいまにも倒れそうな格好で導いていく。

大きなダンボール箱が載せてあるトラックがのろのろ進むあとをつけていくのだ。動物商の文字が車の横に貼り付いているがふたりには読めない。

グレーのパンツに青い縞のシャツ、赤いベストのお揃いのふたりは、一見ムーンが二着の服を着ていると見えそうなものだが、服は屈伸する、旋回する、すっぽぬける、被さる。

運転手はそれをバックミラーで見物し、ふたりの歩調に合わせて車を進めているのだ。服でなく体があり、その体が動いている。……動くものならなんでも後をつけていく……そんな習性が、ふたりになかったらうか？

あなたたちは空想の産物を見ているのよ、そんなものは、あつというまに、恐ろしい悪魔に早変わ

りする、どんな場合も、何かについて行ってはだめです。何時だって導いてくれたものたちは、わたしたちの運命まで引き受けてしまったものなのだわ。

ふたりは子狐にされて見世物になる、あげくの果て、頭のあるのと、ないのと二つの首巻にされてしまう。

白髪、頭なし、それがふたりの強さだとばかり信じていたのに、その強さの通用しない妙なものについていくようだ。わたしは用心深くふたりをつかまえようと駆け寄るが、ふたりは思いがけなく巧妙な歩き方をしており、顔と、首のへこみに汗を溜めて、すでに汗疹までつくっていて、わたしの手の下をすり抜ける。

誰もかも、空しい拡がりのなかでさえ何かに関係づけられてしまうにしても、なにもこの子たちまで……。一体、わたしがつけていることを意識しているのだろうか？ わたしがここにいないかのよう
うに 前をすり抜ける、何の方に身を向けているのか？ ダンボール箱の車しかない。

あなたたちは自分を見捨てるつもりなの？ あの車のなかにはふたりを消し去ろうとする悪い奴がいるんだよ。

わたしも不可解であるための発汗がきて、水泡疹ができそうだ。ふたりは一緒に転ぶが、元気があって起こそうとする手から逃れ、向こうに対する真面目な人なつつこさを示していき、わたしに対し

て残したのは手をかすめた冷たさだけだ。

車は止まり、紺のシャツを着ている男がダンボール箱を両手でおろす。ダンボール箱が歩き出す。足があるからカラではなく何かが入っているのだ。

リンはムーンを跳ね飛ばす、ムーンが怒鳴る。

「だめ、ぼくんだ！」

ダンボール箱は足も眼もち、体を不器用に動かし、道路に白いあとを引いていく。生まれてはじめて見た動くものの後ろをどこまでもつけていく本能をもつ動物みたいに……。

子供たちは生き生きと浮き立ち、幸せそうな激しい興奮で先を争い、絡み合い、はなれ、支えながら、ダンボール箱の後ろにつづいていく、箱はふたりを待つては逃げると言うやりかたで、子供たちを導いていく。

なるほど、あなたたちは老婆たちに甘やかされ、愛撫されつづけたころ、いつも安全で清潔な保育箱のなかに入れられていた。あの箱を本当の親だと思っているの？ あれが懐かしいのね。同じくらしいの大きさの箱だといえ言えるけれど、不潔な匂いのするあんなもの、大変な違いがあるじゃないの。

………といって、………親はここにいるのよ！ 残酷だわ、わたしから逃げる恐ろしい無邪気。ふたり

には箱に入れられていた頃が快適だったのだろうか？ 見えないあなたたちの世界が、あんなダンボール箱の中にあるとでも言うの？ 恐ろしい足がそのなかに隠れているのよ。

あれは囷だ。小さな迷路に入っていく、気ままを装う四角の箱は、ぎくしゃくと子供の足に歩調を合わせて動く。わたしは子供の後ろを追うが、エアポケットに陥ちでもするように、全身から力を失う。手が震え始める。あのダンボール箱の行き先を想像しながら、進路を遮ることを思い、箱を捕らえることを思う。あの子たちをその中で保護する？

「箱を驚つかみにするんだ、握り潰し、もうひとつ蹴飛ばしても構わない！」

リンが年下なのにムーンの肩より大分大きくなっている、帽子を被せれば同じ背丈に見えそうだが、どこからか、口笛が聞こえてくる、懐かしい音だ。

今までの小道が徐々に大きな道路に変わっていく、わたしの方が小さくなっているのではないか、疑問を宙に浮かせたところで沈黙する。

ダンボール箱も息子たちも、もう、わたしがどんなに追い駆けても捕らえられそうにない。

まだ顔付きの定まらない早朝、わたしの髪は帯電したように立っている。目覚めてもやはり子供たちは戻ってはいない。

いなくなつて、永遠に痛みだけの塊になり、子宮の中でひいひい悲鳴をあげつづけることになつたらかなわない、わたしは走り出している。無限に地下に落ちていく感じだ、子供が山に連れ去られたと感じ、上をめざしながら……。

変身転生できるなら、わたしは何処にも吹き飛んでいく千の雪片になる。

気象の変化は突如やつて来る、雪が豪華に降り始める。降ってくる雪は、地上にどんどん降り積もり、雪尻が雪尻を伸ばして、空と地上に向かつて膨張しつづけ、地上の空間の全部を占拠しそうだ。

白のなかに開かれた白い入り口から入る、わたしたちの家だ。帰つたといつても老人たちの畏に陥ちたというものでもない、激変を超えても、この酒呑地だけはもとのままだ。

わたしは、どんなものも食べどんな液体も飲む。何の警戒心も持たずに口をあんどぐり開け、怖がらずに食べる。たとえ脅迫的に奨められても、以前のように手を引っ込めて背を向けたりはしない。

目的もなく逃亡してきているようにここにいながら、わたしは子供たちを捜し出す自信を太らせている。

「サン、克が思い出すまで放って置こうよ。彼に時間をやるんだ！」

わたしがなにも訴えていないのに、広はまたも親友を庇う自分の言葉に満足している。ノブまで大きくうなづく。

「僕だって記憶を取り戻すのは、それは大変だったよ。まして、克の場合は敵の秘密に触れたんだろう？ それに関連した記憶が膜の下なんだよ。サンの気持ちもわからないではないけど、いけずは、もう、そのくらいにして、彼を追い詰めるな！」

北も又、わたしを腹に据えかねているのが、その態度でわかる。北のそばにA市から来た女がいる。昔、克と肩を組んでいた顎の張った女だ。みんな克の味方なのだ。

変な気がする、それでは、わたしはなんなの？ わたしは何をしたの？ 彼を待ただけよ！

「もう、いいから……」

わたしは恨みを、みんな、射しこんで来た陽光のせいにして目を閉じる。

一世紀のような一瞬が過ぎ、眠っている子供の口の中で舌だけが何時までも動いている。

眠りつづけている子供のお手玉のような凹みのなかで、華のような耳だけが何時までも震えている。

「子供たちを奪われてしもうたわ！ 口笛に浮かれて、子供たちはみんな、ついて行ってしまった。老人や老婆もついていった。何処へ行ったか、それはわからん？ 連れ去ったのは、おまえの夫の克じゃ！ しかし安心するがいい、彼には考えがあつてのことじゃろう。おまえを力づけるために口先だけで言ってるんじゃないぞ。骨だというのは、凶暴すぎる力づけになってしまふからもう！」

赤い湯気を背に回すかたちで、長老のカントさんは南方を指す。そこに厚い土の壁がないとしても、その先、厚く深々とした雪が多分漕ぎまわつづき、もうひとつの白の中の白い出口など見つけようにも見つけられないほど、影が蒸発した白が続いている。

「色なしの空の日には見えないじゃろうが、空が青や紫に染まった日には、はっきり見える。地震で低くなった二つの山を越した、ずっと向こう、気の遠くなるような広がりの中に大男が寝ておる。雪が積もって何百倍かの大物に変変わって、存在を現したのじゃ！ あの男は案外あの雪の下で、すっぽり姿を隠しおおせた気であるじゃろう。この降り続いた雪は、化けの皮として、いささか地形的、宇宙的でありすぎる、存在を隠しながら存在を千倍にもしてしまふ、隠れミノにはなりえんのじゃ」

わたしは低い山の頂上を幾つも越えて体を折ってうつ伏している自分の寝姿を意識する、影の蒸発

する白のなかでは、どんなにも自分の空虚を前方に開き、限界を超えて膨らんでいける、形さえ変えて。小枝が白熊に見えているのを、わたしは見たことがある。

「それが克であると、どうして言えるんです？」

「木の伸び方は著しいのじゃ、木の形は年々変わる。これといって木は定まった形をもたぬが、雪のなかの行き倒れは形を変えぬ。子供たちはあの巨人のなかにいる、そこまではわかる。しかし、アン、お前のようにその巨人が生き返るかどうかが気にならぬか？」

「なるわ、なります。もしそれが本当なら、死者の死としての生ではなく、本当の生者として生き返えられるかどうか？ 生き返っても、なお、巨人でありうるかどうか？ もしかしてその人物の厚すぎ大きすぎる隠れミノ、隠れミノだと思っている化けきれない化けの皮の下に、この世界が蔽われてしまったのではないかどうか？ 今までの支配者たちが変わって彼がただの一人、大物になったのではないかどうか？ 一生そうして、その場所にいる気なのかどうか？ 子供たちを小さな骨だけ残し全部食べ終ったのではないかどうか？ その時の叫び声、もしくは笑い声を聞いたか、あわれをもよおさなかつたか、その人物の口に突っ込まれた子供の小指の曲がり具合は？ いまそれとそっくりの自らの唇が伸び嚙む下は眼瞼が含めさ氤に塵焔裏で」燃えさかる焔が騒がしく動き、火のはねると一緒に、わたしの気がかりは遠く幾キロか越えて行つては帰ってくる。

雪がぐんぐん小波をつくり、二等辺三角形をつくって、ソリの背後に広がり、老人たちは白い影になる。

「おまえに話してやる機会がなかったがの、克はここを去るまえ、ヒゲに、酒呑地の老人の血をとつてのう、不老長寿の薬をつくって欲しいと言ひ残したんじや。克は人間がぶち壊しにした地球の再生をまつて、やがて、老いと無脳を、宝として、希望として、世界の前に取り出して見せるじやろうて！」

総てが雪によって統一され、感覚も知識も不要。わたしは遠くに取り残されているのか、みんなを取り残して進んでいるのか、わからない。

白い影は天地を蔽う無数の人魂、この世に残った最後の巨大な体に一番乗りし、わがものにしてしようとたくらんでいるのかもしれない。見捨てられ、溺れる者か？ 雪の海に突き出した拳のような顔がひとつ、わたしの眼に入る。

いままで経験したことのないほどの熱い汗のなかに針のような冷汗が一本降りていく。

わたしの顔のなかで眼と眼の間が引きちぎられ、視野が三百六十度以上にも拡がってしまう。後ろで左右の視線が重なるところ、かすかに、それとわかるクリーム色が見え、次第にその巾をひろげ面積を大きくする。その色がなにかで区切られている、なだらかな土地の起伏する曲線、前の視線の交

差するところにも……浮き上がるものがある、あれは……。

「蘇らぬ場合でも地に早よう返さねばならぬ、死者の胎児や精液は生きていることもあるぞ」
積乱雲のような大男が、淡い空色に縁取られて、地平を蔽って居座っている。

わたしはまだ行きつかないが、何故かその人物が辱めを受けていけるのを眺めている気がする。その人物は顔のない頭、両手を組んだ腕の下に入れて、膨張し、無能力を問わず語りには告白している。大きいからといって、わたしは、おじけつきはしない。近いが行ってみると遠くにある。もっと遠くを見るが巨人の姿がとらえどころのないものになる。

記憶に問い掛けてみる、果たして敵の射程外にでたのか、際限もなく白いのに、克も子供も出没する袋小路であることは、何故なのか。盲目的に操作されることと、袋小路にいたることと、どう違う。風のうねりが寄せても靴をブレーキにするな、もつと遠くを見るのだ。巨人に対しては、なにも当てにしてはいない。もう、近いが行こうとするると遠近に迷うのだ。

山の何昼夜かが過ぎ、掘られたなかに雪を跳ねる葉のない喬木。老人は皺のなかから昔を取り出し愛撫しながら小枝を拾っている。雪を振り動かし、ふるいわける枝は一匹になり、あるいはひとりになる。踏めば体内に射ち込まれ、投げればくるりと軌道をひねって、つぶてになって、返礼される。

光芒の華麗な陸上スタジアムほどの大きなスリ鉢の底、掘り上げた雪の段や壁。

あの子たちは、襷のついた白いカーテンのなかにかがみ込んでいたものだったけれど……、雪の襷は、なかなか、わたしの視線を受けられない。あんな消され方が犯罪と認められないのか、こんな世の中になっても、正義について少しは論争があってもよさそうに思う。

「なにもかも、説明してやらねば分からねぬのか、この激動の時代にあっても、酒呑国だけは無傷で残った。あせるでない、あの男は、おまえのなかを通らねば、この国には帰れんのじゃ！ アン、おまえは珍しい婆になったの。双眼鏡を持って、もつとずっと遠くを見てご覧！ 調節しながら、あらゆる方向を見るのじゃ、この場所なんぞ、ずっと後ろにおっぼり出して、おまえの目玉も吹き飛ばしてしまうんじゃ！」

言いながら挟まれた目を見せる老人の足もとには、犬とも猫ともつかない小動物が、生きて呼吸している。雪のうろこから孵化して湧き出してくる同種の動物を待って、二つの耳が小刻みに動く。わたしは冷たい双眼鏡を暖める。腕の支点が定まらず、何百もの方向を動き回らせるが、そのなかに踊る星も陽も現われない。

ふいに弾んで大地が小さくなり、白い大男が大地のあとを占領する。しかしそれは、雪を着て横たわり、その胸には斜めに倒れ掛かるアンテナを支え、頭には飛び出す屋根を立てかけ、腹には広告の裏文字を飾り、足には逆立ちするヘリコプターを止まらせている。

決して地下の亡者たちの出したスクラップなんかではない！

わたしは足場を固め、両腕の位置を固めて、斜めのアンテナを建て直し、逆立ちするヘリコプターを横向きにするが、広告は逆立ち、それらに取り憑く妬ましがちな光線がある。

もう、三度目、わたしが体を建て直して覗けば、地平線を蔽っていた白い大男は空色になって立ち上がっている。

それをよじ登っていく光芒があり、アンテナも屋根も広告もヘリコプターも、もう空にない。いま、空が青色に早や変わりし、きらりと光って下から飛んだものがある。

巨人は立ち姿のまま、海を背に厚い雪を着、雪の全部を引きずって歩きはじめる。

「あそこを歩いていきます、あれです。隠れていてもわかります、あれは克です！！」

完